

# 女鐸

# 女鑑 第拾七年第九號目次

真正
無毒
高等
化粧

# クイーン白粉
# クイーン水

◎本品ハ我同盟國ヨリ輸入セル最新最良原料ニ貴重ナル芳香ヲ加ヘ精製シタル化粧品ニテ先祖傳來的ノ陳腐ナル品ニアラズ壹度御試用ノ榮ヲ賜ラン事ヲ

▲取次販賣ハ至ル所ノ小間物化粧品店ニアリ若シ品切ナレバ直接ニ御注文ヲ乞フ



東京日本橋區新和泉町
本舗
三井花陽堂

---

本品は忝くも

# 皇后陛下

東京勸業博覧會場へ御行啓の際献上し奉り即時御嘉納の光榮を得たり

內務省衛生試驗所檢查濟

# ムスク香油

壹瓶　五十錢



一本品は最良の植物性原油を精製し更に毛髪の攝養上肝要なる加工を施し尚優等なる芳香を配合せしものなれば他に比類なき摸範的香油であります

一本品は一度び御用ひあれば乍ち髪の毛さらりとし艶黒く麗はしく其上優美なる(バイオレット)の芳香を保ち紳士淑女の一日も缺く事のできぬ香油であります

一本品は毛髪の發育を大切になさる御婦人は申に及ばず男子方の散髪用として無比の佳品で有升

一本品は市内到る處賣藥小間物化粧品店にて販賣致し居升御最寄にて御需めを乞ふ

○若し品切等の節は端書にて本舗へ御注文あれば東京市内に限り壹瓶以上何程にても直ちに御屆け申上べく候

ムスク香水
ホーサ石鹼

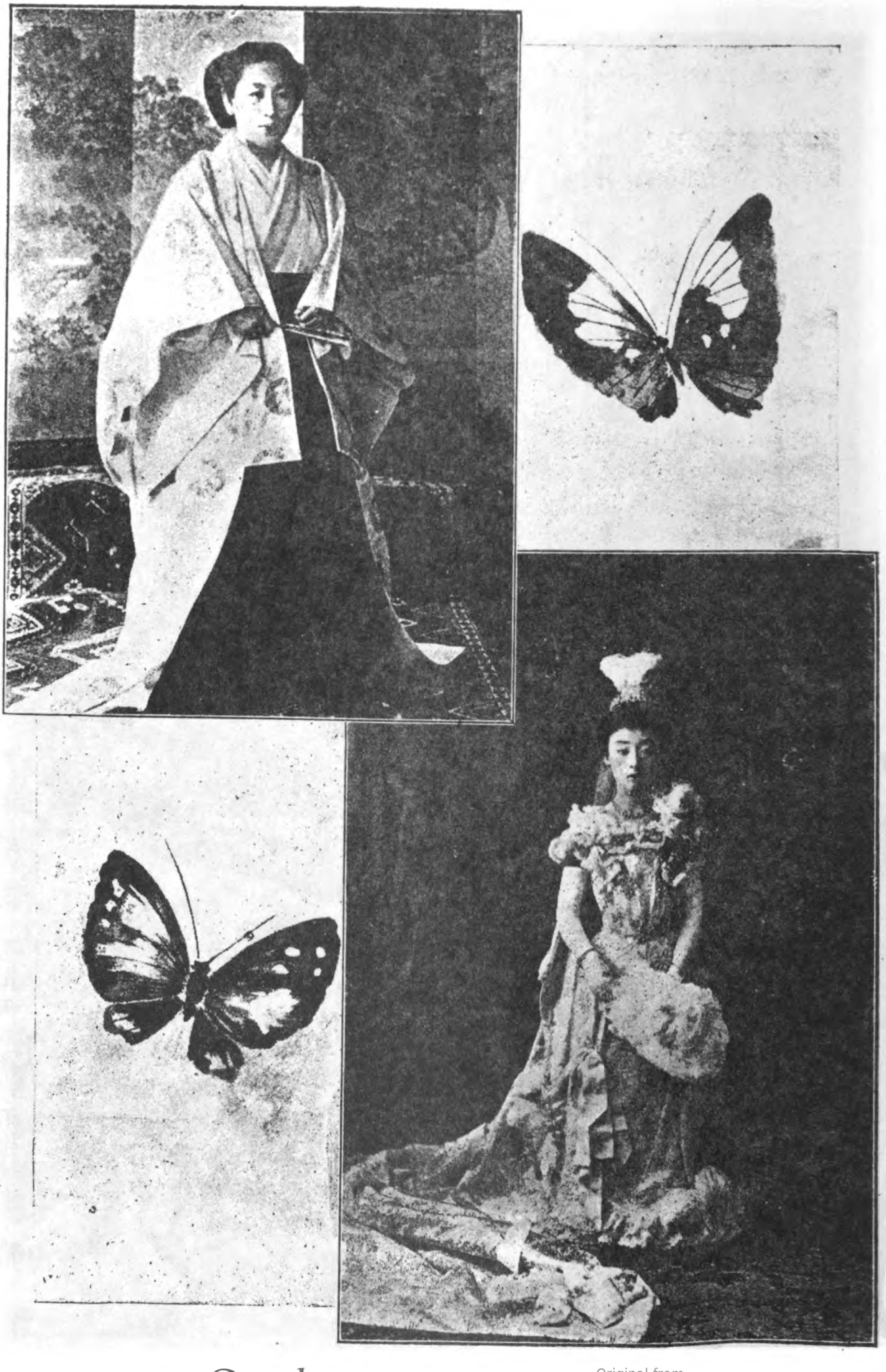
東京日本橋區本石町四丁目
本舗　松澤常吉化粧品部

# わかれ



竹久夢二作

# 竹の園生



賀陽宮妃好子殿下

山階宮妃常子殿下

# 廿世紀の貴婦人



其の一　公爵夫人　徳川泰子君

其の二　公爵夫人　一條悦子君

# 廿世紀の貴婦人

其の三　侯爵夫人　大山捨松君

其の四　侯爵夫人　山内禎子君



## 井上博士の家庭



令息泰忠君



井上通泰君



令孃桃枝子君

善良なる主婦となるべき女學生にして未だ本誌を讀まざる人ありや

體裁優美

# 婦人世界

記事親切

九月一日發行毎月一回二卷十號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘六冊郵税共九十錢十二冊同一圓七十五錢

△本號には誰にも出來る新案の大懸賞募集あり

◎辨當料理談（弦齋夫人）

◎私の感心せる奥樣（山脇房子）

◎我等は如何なる妻を望むか（在米日本人會）

◎娘を嫁にやりし實驗談（原れい子）

◎女中より成功せし呉服店の主婦

◎私の感心せる女學生（上野女學校長）

△何人も聽かんと欲して聽く能はず言はんと欲して言ふ能はざりし大教訓

◎男女戀愛論……村井弦齋

△娘も母も男子も亦此大教訓を讀まざれば百年の悔あるべし

◎小兒に果物を與ふる注意（加藤醫學博士）

◎强情な子供の癖を矯正せし實驗

◎不妊症全治者の實例（榊醫學博士）

◎大困難と戰ひたる棚橋絢子刀自

◎男の子は如何にして產まるるか（伊庭學士）

◎少女欄　小說より面白く倫理より有益也

△口繪◎侯爵西鄕寅太郎氏令夫人◎名流令孃寫眞◎櫻井中尉新婚寫眞◎朝の女學生◎きぬた（花蹊）◎秋の花（安信）◎蟲（珠子）其他數葉

發行所　東京京橋南紺屋町十二番地　實業之日本社　郵便振替貯金口座參貳六番　賣捌　全國書店

# 大日本淑女學會

## 第五回新學期開始

此際入會者に限り入會金全免すべし！

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雑誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

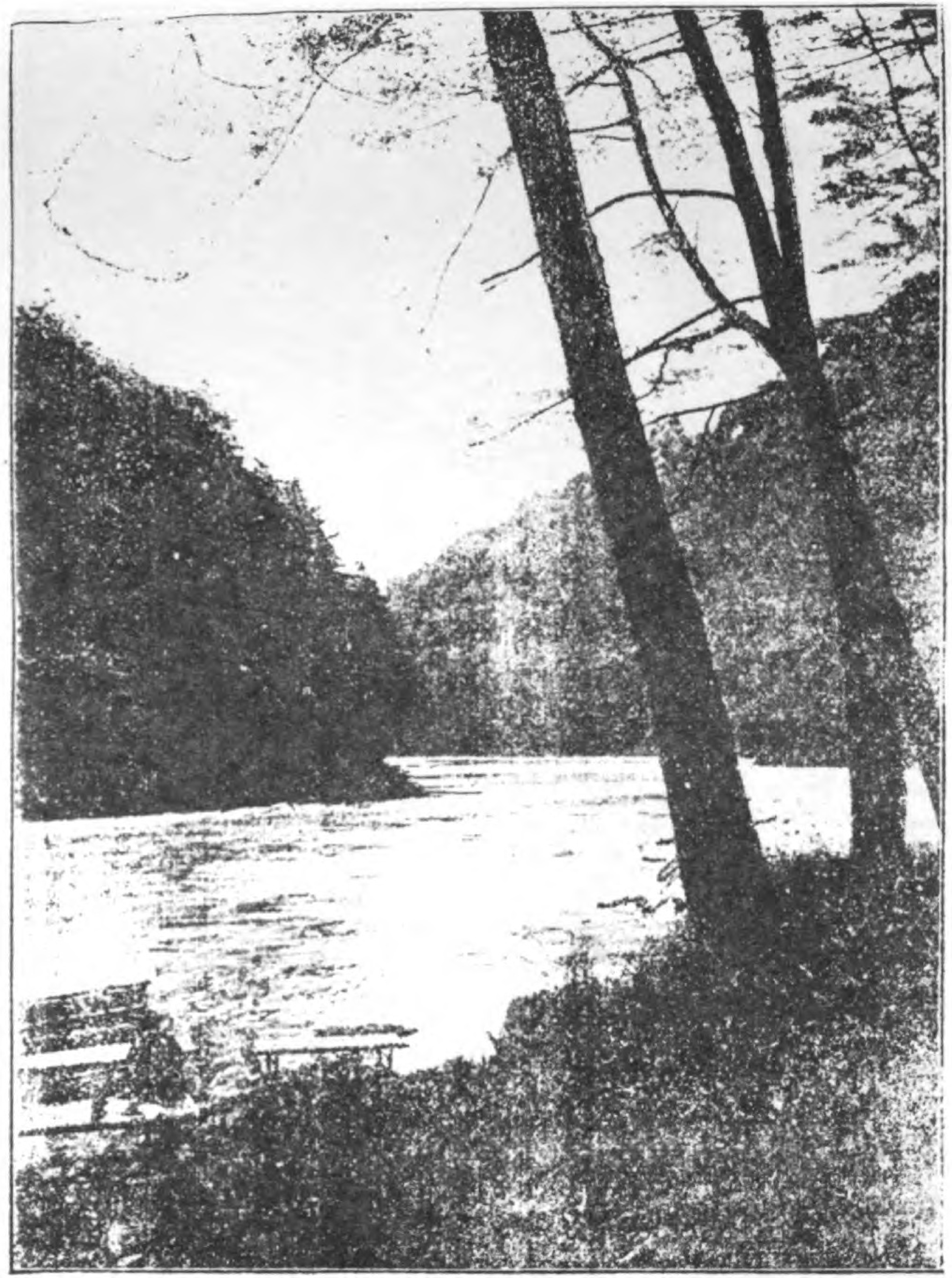
▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

◉詳はしい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）大日本淑女學會



妙義山の石門



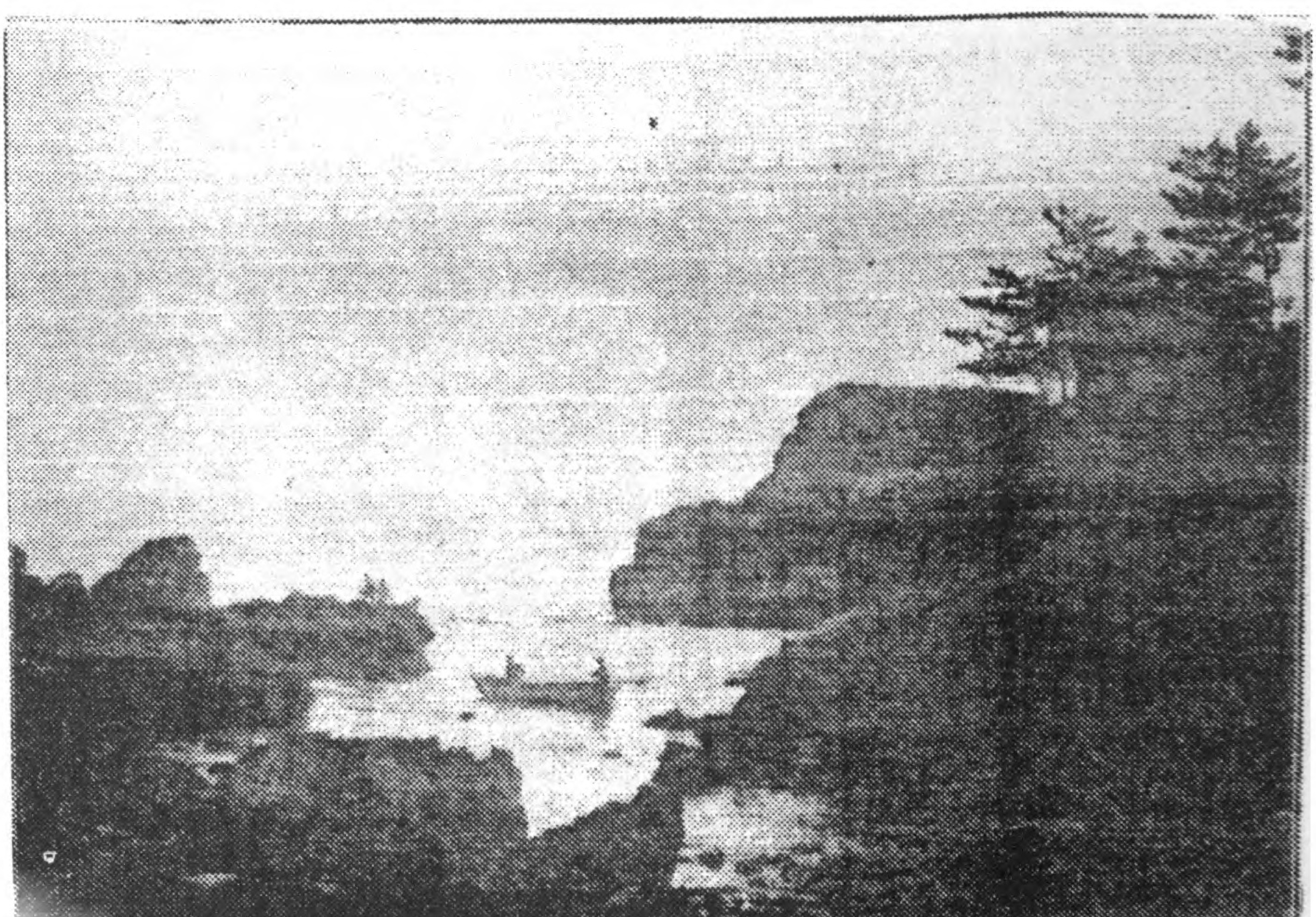
嵐峽

渡邊清次郎君撮影

# 海の眺



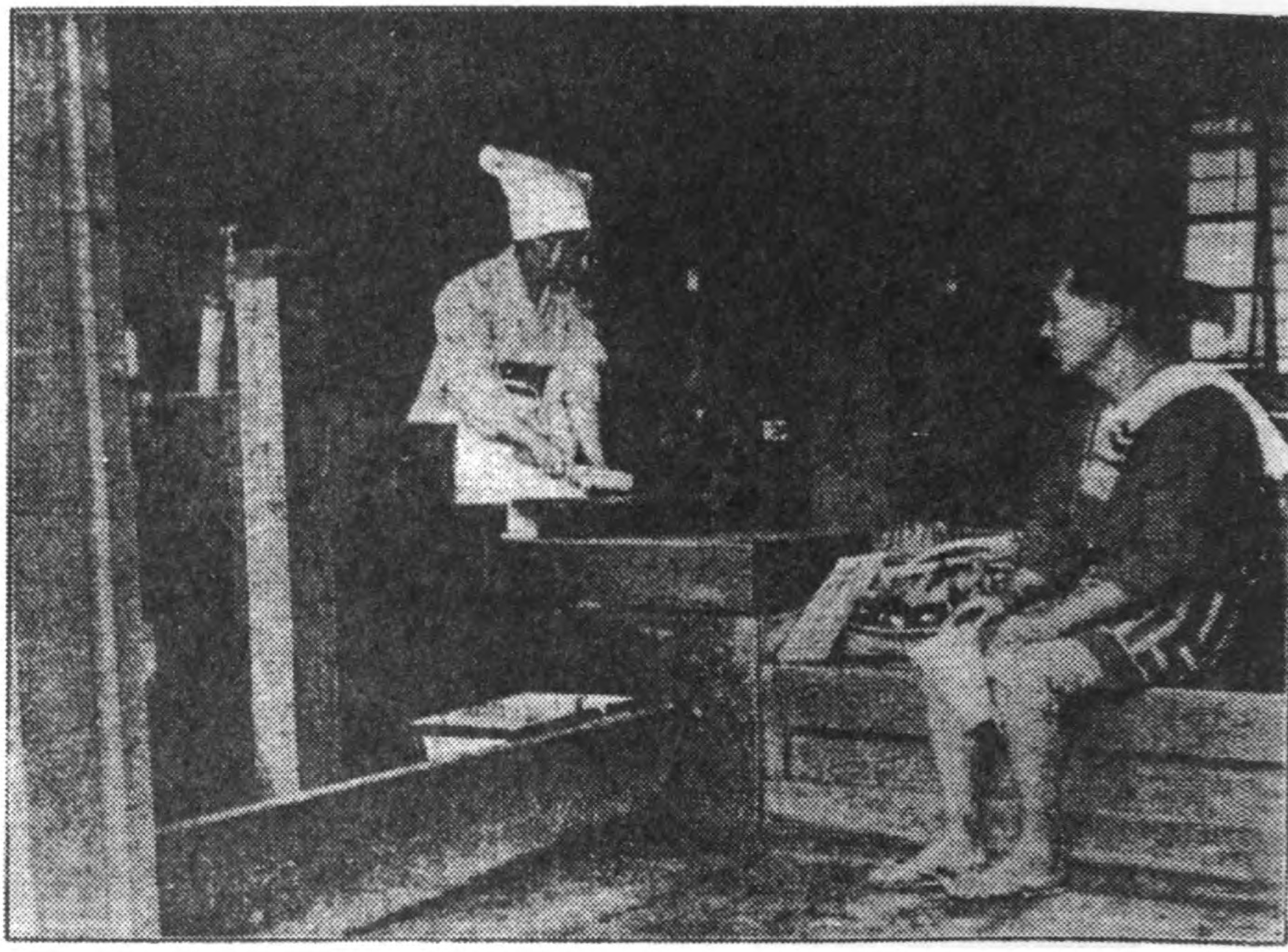
須磨浦より淡路を望む

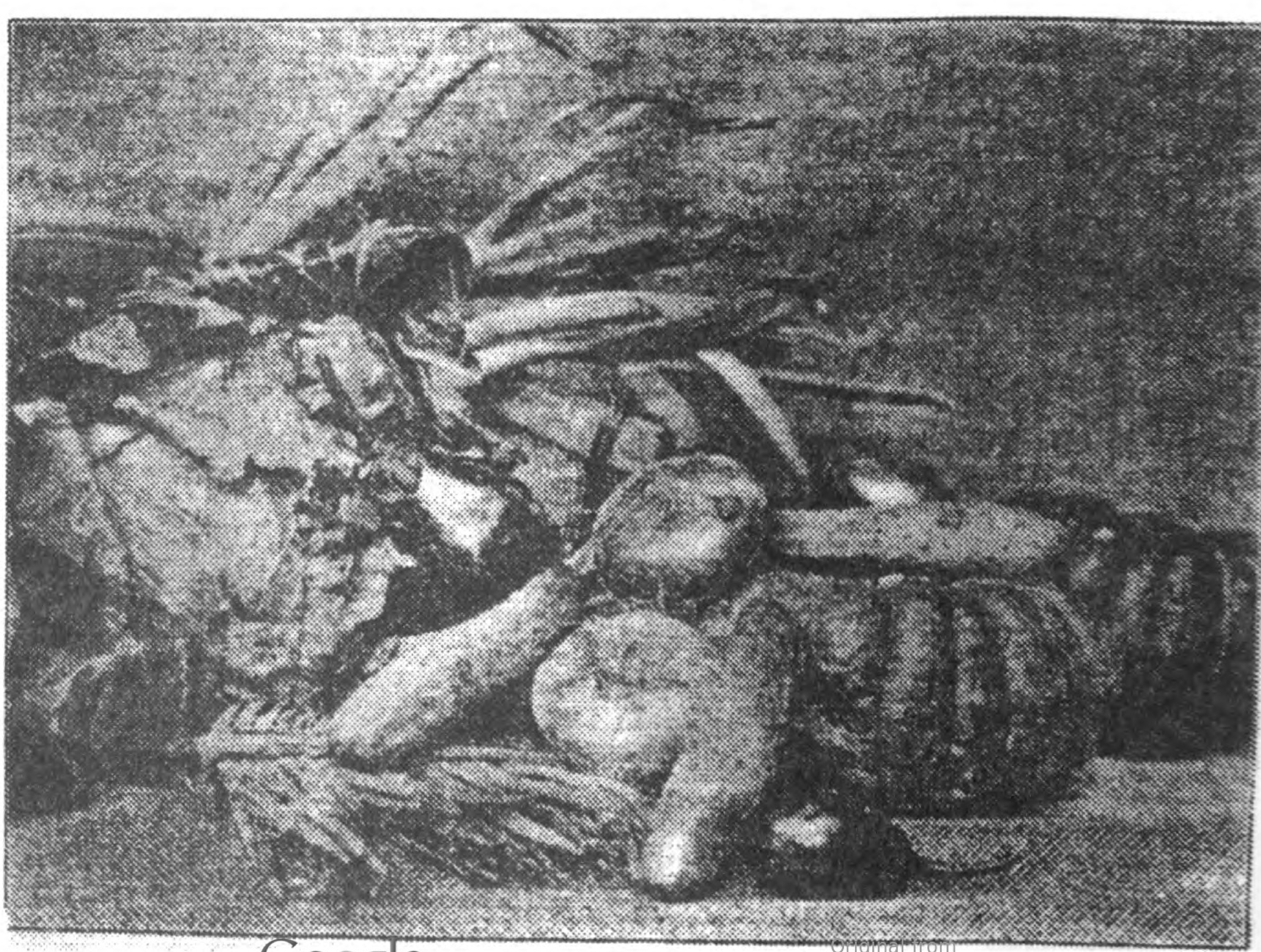


磐城の五浦

渡邊清次郎君撮影

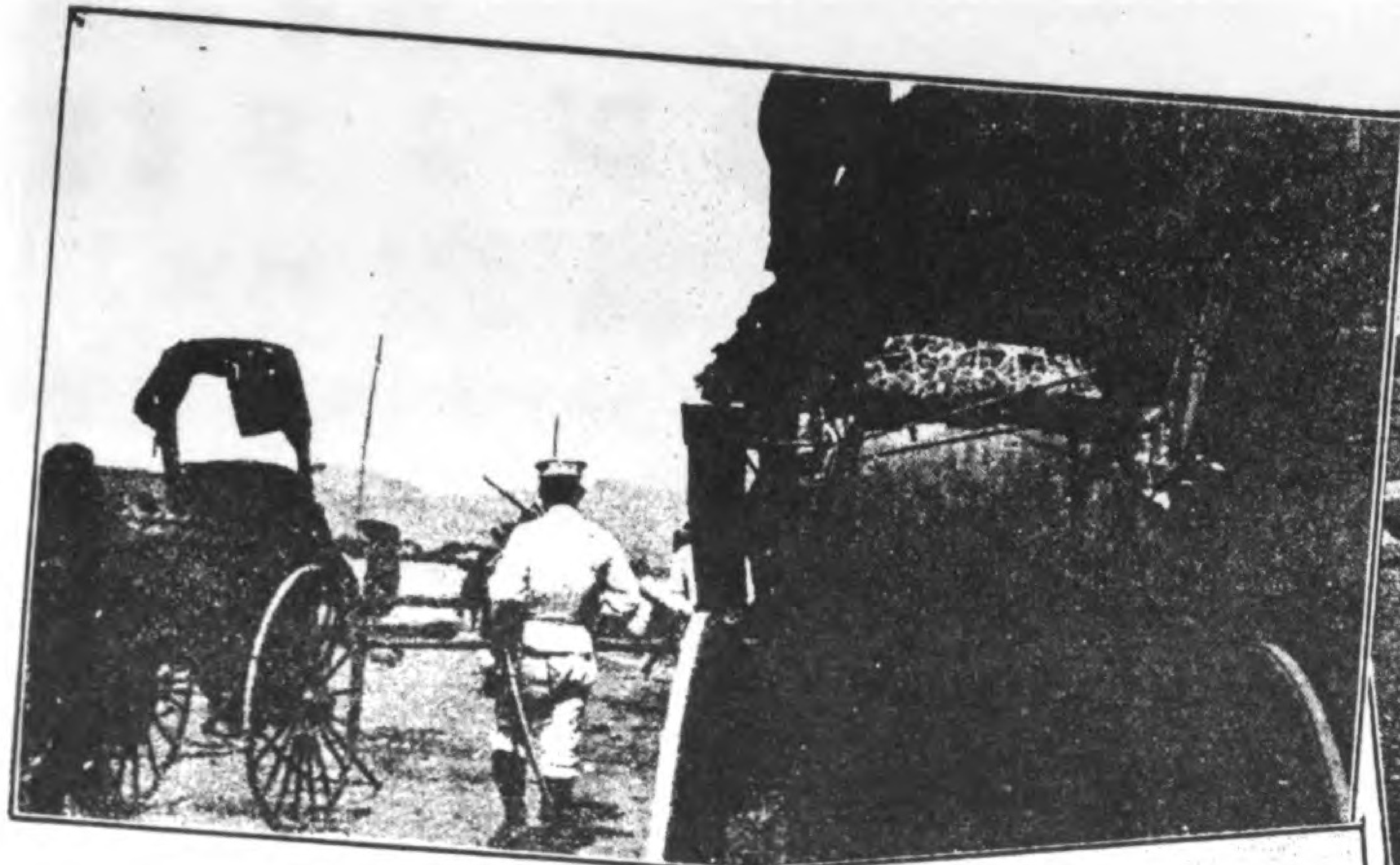
## 臺どころ



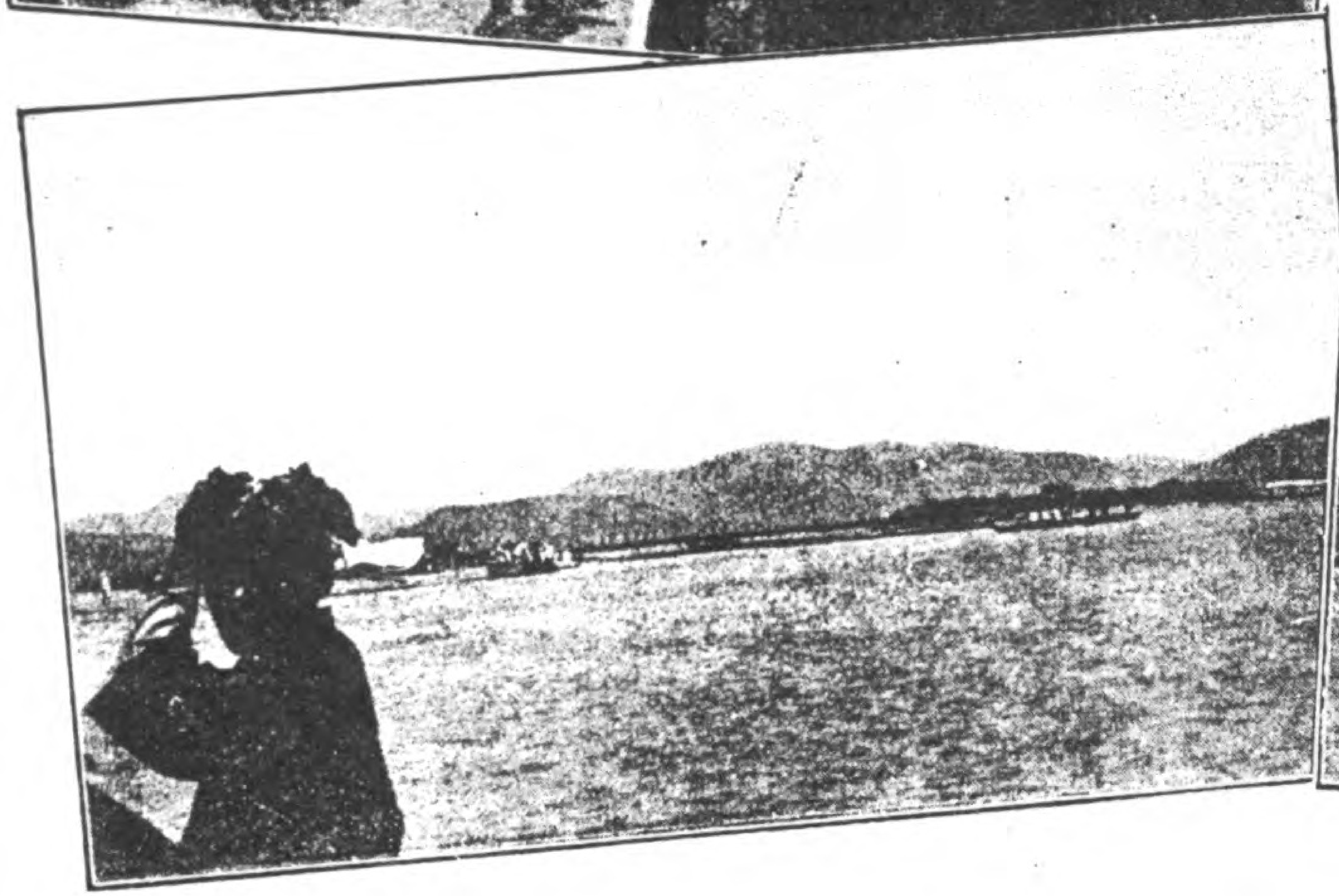


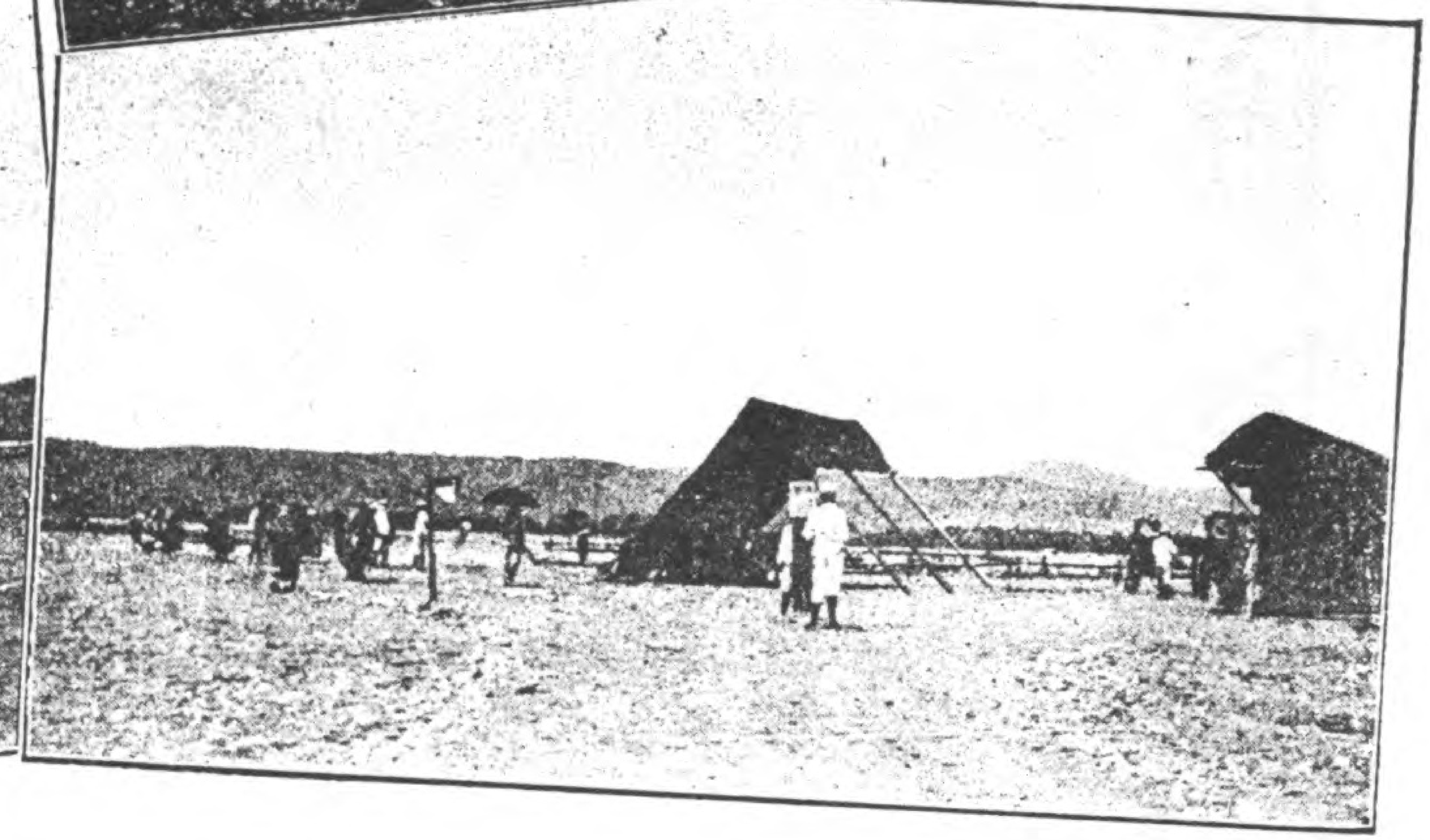
伯爵松平弄月君撮影

# 雨の大井川









松平氏撮影（本文歸省雜記參照）

完全無比

# 衛生御料 ぬか石鹸

定價（大形一個金廿錢／小形一個金十錢）

學理と實驗に於て最も進歩せる
ぬか石鹸は滿天下の紳士淑女に
盛んなる御愛用を受けつゝあり

歐米の石鹸は、總て肉食をして居る人の皮膚に適するやうに製造してあれども、今和製の石鹸として、米穀を常食とする、日本人の皮膚に適するやうに、製造せしもの甚だ稀なり、然るに此ぬか石鹸は、弊店が多年の研究と幾多の經驗とに依り、日本人の化粧用として、古來何人にも珍重せられ且日本人の皮膚に最も適當と稱せられつゝある（皮膚病に最も特効あることは大醫の常に稱揚せらるゝ所なり）彼の米ぬかの精分を以て製造せしものなれば、素より化粧石鹸として、惡るからう筈はなし、唯米ぬかといふものが、常に人々の目に見馴れ耳に聞きなれて居るが爲めに、或は安ッぽく思はるゝか知らねど其實驗に於ける化粧衛生と、嚴冬にあれることなく酷暑日に焦けざる等の效力に至つては、舶來石鹸及び他の優等と自稱する多くの石鹸に優れること勿論にして、而も最新最良の芳香は、馥郁として皮膚に薫り、恰も香水を注ぎ匂袋を携帯するに異ならず、希はくば世の殿方御婦人方に拘はらず一度此ぬか石鹸を御試用の上、多々益々御愛用の榮を賜はらんことを

**注意**（ぬか石鹸はたき製なれば他の石鹸の如く「メリケン」粉粘土並に「ユーカリ」等を含有せず御安心の上御使用を乞ふ）




ぬか石鹸本舗　東京市京橋區木挽町一丁目十四番地　廣瀨商店

# 校舍增築、生徒募集

## 私立 女藝專修學校

家事部各級三十名ツヽ
裁縫部　　三十名
實踐部各科三十名ツヽ
專修部　　若干名

今回三層大校舍新築成り各部の生徒を募集す特に新設の實踐部は窮行實踐の敎育を奬勵せん爲めに裁縫及各技藝の專門生を募集す（學費不足者の爲め及精神敎育をも兼修せんとする者の爲めには最も便なり）

一本校敎師は皆知名の女學校に敎鞭を執られ最熟練なる技藝及精神敎育家を招聘せり

一本校には寄宿寮の設けありて寮母監督の下に嚴格なる家族的生活を爲さしむ

一委細の規則書入用の者は郵劵貳錢を添へ申込まるへし

明治四十年九月十一日より第二學期授業開始す

東京市牛込區橫寺町九、十番地（電話番町一七一七）

校長　子爵　松平直敬
副校長　星野愼之輔
主幹　八木兼夫

# 大懸賞募集

此の才媛文集發行以來女流文學の鼓吹となり模範となり女學生は勿論令嬢夫人其他明治文學に志ある人は男女を論せず各一本を手にせざるなき盛況を來し弊社同人の光榮之より大なるはなし今や其の第二編第一集の發行に際し大に面目を一新し大懸賞原稿を募集し大々的發展を期せんとす希くは續々御投稿あらんことを

原稿　來九月卅日締切

賞與　天（各正金參圓）　地（各書籍券貳圓）　人（各書籍券壹圓）各部一名

秀逸（女子文章作法、文集西洋傑婦傳の中壹冊）各部十名

天賞の内一人は公平なる抽籤により風琴壹臺を呈す

來十一月三日發刊

## 明治才媛文集

第二編
第一集

論説、叙事文（馬場孤蝶君選）

[illegible]情文、消息文（鹽井雨江君選）

小説、日記（島崎藤村君選）

御伽説、短文（小村勁林君選）

短歌、今様（尾上柴舟君選）

新體詩（蒲原有明君選）

各章必其種類別を明記し必明治才媛文集原稿を表記すべし日記は必日記體たるべく今回は專ら旅行又は歸省の途上家庭又は歸省中其地方にて得たる記事を主とす

●女子大學教授文學士 鹽井雨江先生著

●女子文章作法　金五十錢　郵税八錢

文學士大町桂月先生選評

●第拾二明治才媛文集　新刊金廿五錢　郵税四錢

發行所　東京神田南乘物町十二番地　合資會社　東洋社　電話本局二七二一番　振替口座五一四一番



東京砲兵工廠技手
日野清三郎君案出
新案登録
露國陸軍の判印あり
戦利廢棄弾丸
藥莢で出来た
真に趣味ある
戦利好紀念物
ナイフ
ペン軸
東京下谷池之端仲町
電話下谷
宮内省
御用
玉寶堂
取次御望みの方には御相談に應ず



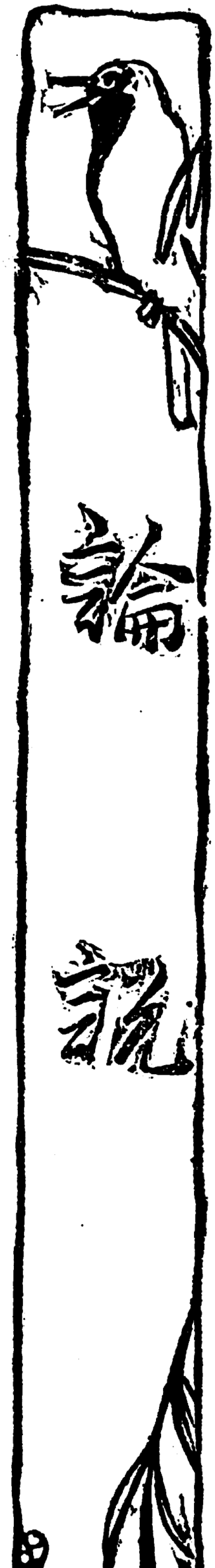
# 女鑑

第十七年第九號

## 秋の野

月も隈な洩れ出でゝ　心すますやあきの野に
いしきとゝなふ今宵哉　おもしろやはぎ女郎花
桔梗かるかや藤ばかま　名さへ優しき八千草の
おのがまに／＼咲振の　繕ろはぬこそ風情あれ
色さま／＼に咲く花の　いづれの枝や擇ばなん
流石に留ぞまどはせる　露もなか／＼哀れにて
仇なる風にふかれては　玉とみだるゝ虫のこゑ
思ひ／＼のふしつけて　何を歌ふか夜もすがら

((中川愛氷作))




# 女子と簿記思想

法學博士　松崎藏之助

予の立場から云ふときは少し女子には關係の薄いので、從つて之に關する事項も平素餘り氣を留めて居ないので、差當り之ぞといふ談柄も無いが、いさゝか感じたことを述べやう、さて一家と云ふものは、男子のみで遣つて行けるものでは無い、即ち男子の外交は女子の內助の力と相俟つて始めて一家と云ふものゝ組織が鞏固に形造らるゝのである。

左れば云ふまでもなく一家の整理と云ふものは、主婦たるべき者の管理に屬するので、斯の管理の宜しきを得ると否らざるとは、一家の盛衰に大影響を及ぼす、のみならず興亡に關するので、少し大業だか知らんが、延て國家の消長にまで影響を及ぼすのである、と云ふものは元來邦國なるものは個人の集合體であつて、一家といふものは夫妻の共棲に依つて成立つて居るのであるからその國家の細胞たる個人が衰弱して國家が特り隆昌であると云ふことは矛盾の甚だしいものである、例へば、若しも吾人が榮養不足するときは身體全般に衰弱を來たすと毫も異つたことは無いのである。

是に由つて見るときは、家庭の整理と云ふものゝ機宜に契ふと否らざると、主婦たる者の任務の大切であると云ふことは、固より辨明を要しないのである

併し眼を轉じて熟々世の中を觀るに、頗る慨すべく歎ずべき濁潮が漲つて居る、それは外でもない、既に今日主婦たる者、又は將來家庭の王たるべき女子達が簿記思想に乏しい、否、寧ろ之を缺で居るやうに考へるのである、此く云つたならば、論者は或は云ふであらう、今や到る處の女學校に於て家計簿記の一科を設けて教授しつゝあれば、或部分を除くの外は決して此の如き不都合なることなし、其は杞憂に過ぎないと辨難さるゝかも知らんが、成程それも一應は尤もに聞えるけれども、之を學びたりとて直ちに理財の思想に富んで居る、家政の整理に熟して居るものと速斷することは出來ない、所謂論語讀みの論語知らずと云ふが如く、實務の才と學問とは自ら區別があるもので、例へば、經濟學者が炊爨の事を解しないのと一般である。

まづ手近い所が、百軒の家を推しならして、小使帳の備へてある家は何軒あらうか、最も商家は別として、殆んど此備へつけてある家は僅少なるに驚くばかりであらうと思ふのである、彼の商家の女子には達者に忠實に之を記すものはあるが、所謂勘定高いばかりで、未だ實務に適するものゝやうには思はれないのである。

殊に月給取すなはち官吏または會社員、その他出來星の紳士など綽名さるゝ家庭を觀來るに、その主婦たる者が何うも簿記の思想が薄いやうに思はるゝのである、最も稀には實務に長じて居るものが無いのみではないが、概して左樣である、と云ふものは女子に通有性の虚榮心よりして、納るものを計らずして無暗に出すことばかりを知つて居て、帶を買ふ衣服を求める又は櫛簪若くばブローチの類を購ふと云ふ風であるから、結局收支が相償はなくなる、此の如き結果に陷るといふものは畢竟主婦たるものに理財の觀念が乏しいからである。

而して收支相償はぬといふは、ツマリ自分が招いた禍であるから、早く此所に氣が注いて、以後は手を締るといふ工合にすれば可いが、その虚榮心が嵩じて借金をする、借金をしても足らんで、遂には盜賊に爲る、之は最も甚しいものを擧げたのであるが、兎に角借金を爲るものは珍らしくない、固より人間と云ふものは何日何時、如何なる不慮の災厄等のために自己の財產を失はぬとは云へぬ、その時は止むを得ずして借金を爲ることもあらうが、前述のやうな場合に爲る所の借金は、決して譽むべからざるのみならず、罪惡である。

此の如き人に限つて多くは帳簿を記さない、假りに記すとしても概して正當でない、簿記本來の目的を誤つて居るのである、簿記は云ふまでもなく、詳かに收支を記し貸借の關係等を掲げて、その蹤跡を知悉すると同時に將來の要鑒に具ふべきものである。

而もその正鵠を失つて居るのみでは無く、貸借關係などを記すに方つて、或者の如きは借方を僅少にし貸方を多大に記して置くものがある、此の如き弊習を西洋では一の罪惡であるかの如くに嫌忌して、最も正確なるを貴んで居るのであるが、我國では之を誇りとする風が行はれて居るが、之は道德上の罪惡と云ふも敢て誣言ではない、どうか斯ういふ風習は改めたいものである。

一體我國には尙ほ一種の厭ふべき封建時代の餘習が殘留して居る、卽ち武士は食はねど高楊枝といふ俚言である、固より純一に國家の爲に盡す、君國の急に趣くといふ場合には金錢問題などに繫つて居べき筈のものでは無い、また之を併行しやうとする事は不可能である、併し之は家庭に應用すべき事では無い。

家庭の主婦たるものは、常に宜しく入るものを量つて出るものを節し、豫め病氣その他不時の事に備へて置くやうにせねばならぬのである、それには帳簿を具へて置て、逐一收支を明らかに記載し、その月末

に至らば克く細かに之が事項を審査して、果して冗費に屬するもの丶有無を見極めて、若し之ありとせば宜しく翌月より之を節すると同時に、その入るものを標準として豫算を立てゆくと云ふことは、主婦たるもの丶最も注意を怠つてはならぬことである、之に就ては若し正當の簿記法に依る事が出來なければ、所謂小使帳でも宜いのである。

けれども若し今日のまゝにして、入ることにお構ひ無く、たゞ出す事のみで、之に次ぐに借財をすると云ふ風では、迚も家政と云ふものは圓滿に行く筈のものでは無い、若し之が行かぬとすれば延て國家に累を及ぼすのである、依つて主婦たるもの又將來主婦たらんとするものは、須らく此に意を注で家政整理の任を完ふせられん事を希望するのである。

# 女子敎育の缺點

高等工業學校長　手島精一

單に女子の敎育とは云ふもの丶、自から其中には、文學に屬するものもあれば、又實業に屬するものもある、されば今予が言はんと欲する所のものは、果して其孰れに屬するものなりやと云ふに、卽ち後者の實業敎育中の技藝敎育に關するのである、近來は非常に造花、編物、刺繡その他の技藝を學ぶものが日一日と增加して來たが、これは女子が或者を自覺して來た結果か否かは且らく措き、大いに國家の爲に賀すべき事であると考へる。

併し今是等技藝を修むる者を分てば、一は將來獨立自營の爲と、一は嗜好にする者とに岐るゝやうである、而して其獨立自營の爲に之を修めたる後、是等修業者の製作物が如何に社會より歡迎せらるゝやと云

ふに、哀しいかな其作物に於て缺けたる所があるから、迚も市場に於て競爭する事は出來ないのである、只僅に女子が製作せし物であると云ふ、此中には一種憐愍的の情緒よりして、彼の盲人癈人等の製作物と同一視せらるゝ傾きが多いのである、之は決して世人を咎むるには及ばない、女子自身の作物に生氣が無いからである、換言すれば、當初之を學ぶ時に、之を以て獨立せねばならぬ自營せねばならぬと覺悟せし精神が貫て居らぬからである、その氣性が作物に乘つて居らぬ結果である、左れば何うして他を怨むことが出來やう、自ら反省せねばならぬのである。

近頃各所の工場に於て、彼方此方の技藝學校の卒業生を雇うても、何れも永く腰を落付て居るものが尠ない、尤も各工場ともに一種の弊があるであらう、併し無ければ夫程結構な事はないが、若し之ありとしたならば、古人も大河の決するは赤手の克く捍ふる所にあらずと云はれし如く、已に業に根底をなして瀰漫せる所の多年の弊害は、到底一朝一夕に之を矯正すると云ふことは出來るものでは無い、若し急劇に爲さんとする時は、却つて角を矯めて牛を殺すの愚を招くものなれば、且らく平氣虚心にして之が匡正改良の方法を熟慮し、徐々に機の熟するを待ち、自から卒先して之を斷行すると云ふ勇氣に乏しいのみならず各工場にて是等女子を雇ふには大概日給である。

ソコデ是等怠慢の女子は異口同音に、金力は雇主の有する所にして勞力は自己の所有たり、苟も給金を欲すれば勞働も爲すなれ、若し給金を欲せざらんか、勤むると否とは自己の隨意にして、決して雇主の干渉すべきものに非ずと放言して憚からず、毫も雇主に對して義務の無いものゝやうに思つて居る、けれども之は大いに心得違ひと云ふものである。

何せなれば、各所の工場に於ては、孰れも其規模の大小、廣狹、工女の多少等に因つて、自から生産力

の豫定と云ふものがある、例へば、仕立屋が注文を請けるにしても、單衣ならば一日に凡そ何枚、袷ならば幾枚仕立るを一人前の仕事と定めおき、乃ち雇人の多少に由りて請負ふと一般で、各工場とても同じく平日の生産力より打算して注文を取り、又は製作を爲すにも拘はらず、前述の如く氣儘勝手に休まれては雇主の迷惑は如何ばかりであらう、實に察せらるゝのである、すべて工場主は豫じめ完成期日を定めて着手せしにも拘はらず、右の如き故障の爲に其期を誤まらるゝ時は、之より生ずる損害は少なくないのである、即ち間接に損害を與へるのである、極言すれば、その損害の一部を負擔せねばならぬのである、尤も之に就ては被雇者たる女子のみを責むるの酷なる事は予も亦諒とする所であつて、その一部の責は雇主たる者の負擔すべきものである事は云ふまでも無いが、兎に角前陳のやうでは、折角將來獨立自營の爲に技藝を修得せし女子の爲であるまいと憂慮するのである。

外國の例を見るに、年一年と女子が男子の職業範圍を蠶食するやうになつて來て、將來倍々盛んに行はれんとする趨勢を示して居るが、之は果して何の爲であるかと云ふに、日一日と社會が進むと同時に複雜となるに從ひ、男女ともに生活難に逢着することとなつて來た、ソコデ男子は且らく問はず、その善惡を論ぜず女子が獨立自營と云ふことを自覺するの結果、事務員その他餘り力を要せざる所の、從來男子の手に屬せし職業の範圍を蠶食してまでも、自己が衣食住の缺乏を塡塞しやうと爲るやうになつたのである之に關する事の善惡は兎もあれ、女子までが此く個々に活動すると云ふことは、最も國運を增進せしむる喜ぶべき現象であると思ふのである。

是に由つて觀るときは、我國の女子は其形質に於て泰西の女子と比較して敢て軒輊が無いかも知らんがその實質に至りては遠く遜色なき能はずで、頗ぶる遺憾の至りと云はねばならぬ。

然らば何が爲に此く實質に於て懸隔があるかと云ふに、その原因に就ては多々あるであらうが、予の觀る所では精神敎育の缺乏に基因するものであると考へるのである、故に將來獨立自營のために技藝を修めんとする所の女子の敎育には、固より敏腕は望む所なれども、縱んば技藝の手腕は多少鈍くとも、必らず之を以て己れが畢生を貫くといふ堅忍不拔の精神を養成したならば、假りに各工場へ雇はるゝに方りても必らず勤勉に誠實に自己の任務を盡すであらうと思はれる、此くなれば雇者被雇者ともに、安全に且つ確實に職務を遂行し得るのみならず、女子に於ても當初の目的を達することが出來るのである、左れど今日の技藝敎育の如くにして所謂佛作つて魂を入れざる、即ち精神敎育の缺けたるものでは一向に其效が無いのである、依つて予は大いに技藝敎育を推奬すると同時に精神の敎育を忽かせにせざらん事を切望するのである。

## 家庭と文藝

女子には獨立的敎育を施すの必要はない。良妻賢母主義で澤山である。從つて女子はそれ程高等の敎育を施す必要はないなど、いふ論者もあるが、私は。成程女子敎育の一般の標準としては、良妻賢母主義で澤山であると思ふが、併し良妻賢母主義だから大した敎育は入らぬと云ふは、僻論である、女子は主として、今一層高深なる學術技藝上の知識と修養とを要すべしと思ふ。敢て多きことは望まぬが、例へば「日日」とか「讀賣」とかに出る位な文藝や、科學に關する記事にても、日々多數の家庭の話題に上る位にでもならば、子女は學校敎育を待たずして、自然多方面の趣味が養はれると思ふ。從つて漸次我社會の專門癖（惡い意味の）を救ふことが出來やう。併し、單に家庭に於てのみならず、文藝趣味などは、學校敎育に於ても、モー少し多く加味することが出來はせぬかとも思はれる。

（朝永文學士談片）

# 家庭

## 胃腸の養生法（承前）

醫學博士　長與稱吉

### 三　食物は腸内で如何に變化さるゝか

健康な胃ならば、食餌を攝てから五時間も經てば、大抵空虚になつて了ふ事は前にも言つた通りである。さて食物が胃を辭して、腸の方へやつて來ると、其の始部なる十二指腸の中で、再び消化が開始される。即ち膵臓からは膵液、肝臓からは膽汁、腸自己からは腸液が、一時に出て來て、そして胃中で完全に消化されなかつた物に向かつて、消化作用を營むのである。

腸消化液の中で最も大切なのは、膵液である。此のものゝ中には、澱粉質（米、豆、芋の類）を消化する成分もある。蛋白質（肉類）を消化する成分もある。脂肪を分解する成分もある。膽汁と、腸液とは餘り顯著な消化作用を有つて居らぬ。これ等は單に膵液を補助するに過ぎないのである。然し膽汁は、腸管を刺戟して一種の運動を起させる特異の能をもつて居る。腸管の運動は、醫學上これを蠕動運動といつて、中々重要のものであるから、此の事に就いては、尚ほ後段に於て絮説しやうと思ふ。

◎腸の吸收機能

腸に於ては食物の消化を爲すの外、消化されたも

のを吸收する機能を有つて居る。此の機能は、吾々にとつて最も大切なもので、凡ての消化產物は皆、此の能によつて體内の成分となるのである。即ち蛋白質の消化產物たるペプトーンや、澱粉から化生た糖分や、其の他水分に溶解した食品や、脂肪の乳化したものや、是等は皆、腸の粘膜を通して、血管、又は水脈管の中に受容せられ、それから全身の各部へ、安排よく輸送せられるのである。

胃に於ても吸收の機能はあるけれども、それは實に微々たるもので、腸のそれに較べると、十分一にも足らない、だから胃に於ては吸收機能よりも分泌機能よりも運動官能が大切であるが、腸はそれと反對に、吸收作用が何より大切なものになつて居るのだ。故に吸收機能は實に生命維持の根本で、吾人は這のお陰で、其の日々々を安全に保つてゆくのである。今若し此の作用が腸に於て廢絶したらば、如何に食物が口や、胃や、腸で消化されても、其の中の營養分を體内に吸收ることが不可能くなる即ち腸は徒らに自家の蠕動運動によつて、食物の全部を猶豫なしに、ドンドン下方へ送り下げて了ふ。所謂消耗に對する補給といふ事が、全然ゼロになるので、吾々の肢體は忽ち、瘦せ、衰えて、終に冷やかな死の手に攫られなければならぬことになるのだ。

◎腸の運動官能――即ち蠕動

斯の如く、食物は胃や腸の中で、複雜な作用を受けて、最後に腸から吸收せられ、而して體内の成分となるのであるが、食べたものは悉く吸收せられるかといふに、決して然うはゆかない。其の中の幾分は消化に漏れ、吸收にもれて、糞便となるのである。即ち營養分の吸收量といふものが、大抵一定して居るのであるから、其の制限を超えては決して吸收されないのだ。さて此の消化吸收に漏れた所のものは、最早腸の中に在つても用はないから、自家固

行の運動によつて、排泄して了ふ。

不用物の送下、排泄は所謂蠕動によつて成し遂げられるので、これは前にも言つた如く、膽汁の刺戟又は食物の刺戟によつて其の管壁に起る、恰も蚯蚓が匍行ふときのやうな、一種微妙な運動であつて腸に於ては夫の吸收作用と共に、實に大切な官能の一つになつて居る。といふのは、若し此の官能がないとすれば、不用の殘片は腸内に蓄積し、腐敗して、種々の障害を惹起すのを以て知らるゝ。

## ◎排泄と營養と

消化吸收に漏れた殘片の、逐次下方に送り下げらるゝや、初めの內は粥の如うに、どろどろになつて居るが、下の方へ來れば來る程、其の中の水分が亡失なつて、終に大腸の終末の方に近づくと、全く固形のものとなつて、糞便の外觀を備へるやうになるのである。これを今少し順序正しくいへば、先づ食べた所の物は、五時間の後、胃を辭して小腸に下り、玆に停ること約三時間、其の間に營養分の吸收が行はれて、殘餘の部分が大腸へ來る。而して其の中に約十二時間も留まつて居て、水分を失ひ、竟に其の終末部に來つて初めて糞便の形を成し、排泄さるゝに至るのである。

由來排泄といふことは、俗間に於ては勿論、醫師すらも餘り重く視て居ない、即ち食ふ事には色んな心配もし、注意もするが、排泄に向つては實に冷淡に看過されて居る傾きがある。これは大なる心得違ひ。排泄は身體の健康に實に少なからぬ關係があるのである。泰西の或る學者は

『人間は排泄と營養と能く行はれる間は、完全に健康を保てるものだ』

といつて居るが、實にこれは不動の眞理である。排泄は恰かも下水のやうなものだから、如何に上から流し込んでも、下部が疏通しなかつた日には、何にもならない。殊に便秘は下痢を來す原因になることが多いからして、規則正しく疏通を計るといふ事を

忘れてはならぬ。

それには毎朝一回づゝ、上圊の習慣を作ることが必要である。即ち便意い氣味がなくとも、必ず上圊して排泄すやうに努めるがよい。尤もこれは初めの内は中々思ふ様にゆかないけれども、一週間、十日とやつてゆく中には、終に一種の習慣を生じ、規則正しく排泄を成し得るに至るものだ。然し若しそれでも便通を得なかつたならば、早朝一椀の冷水を呷つて後、上圊するがよい。兎に角毎朝一回づゝ排泄の習慣をつけるといふ事は、肝要なことである。

## ◎營養物の話

### 一　營養品とは甚麼ものか

體質の消耗を補ひ、以て生命を維持し、又は身體の發育を計るために、日常外界から攝るところの食物は、吾人これを名づけて『營養品』又は『滋養物』といふ。

抑も人間の身體は、種々樣々の物質から組織つて



居るが、試みにこれを化學上、單一なる成分に分けて見ると、蛋白質、脂肪、含水炭素、膠質、水、鹽類の六種に過ぎない。で、是等の物質が生活のために、日々消費せられるのだから、これを補ふ食品も亦、此の種の成分を含んで居なければならぬのである。此の單一なる成分は、食品の中に在つては『食素』と名づけらるゝ。

然し吾々は日常、以上のやうな單一の物質――所謂食素――を各個別々に攝ることは稀である、殆んど無いといつても可い。大抵は各種の成分が、適宜に混和し配合されて居る、天然の合成物を以て之れに充てゝ居る。是れ即ち普通の食餌を攝取る所以である。

普通の食餌には、動物性のものと、植物性のものと、流動性のものとあつて、各々其の成分にも、品種の別によつて大差はあるが、一つとして生命保持、身體發育の目的に副はぬものはない。即ち必要成分たる二、三の食素は必ず包含して居るのだか

ら、凡ての食餌は皆、營養品、滋物といつて差支がないのである。

### ◎榮養品、滋養物に就いての誤解

然るに世の中には、此の營養品、滋養物といふことについて、一般に大なる誤解――寧ろ迷信を抱いて居られるやうだから、一言、其の蒙を啓かうと思ふ。

營養品、滋養物についての誤解とは何か。といふに、夫れは外でもない。凡て營養品又は滋養物とさへ言へば、何でも牛乳、肉類、鷄卵、ソップ、のやうなものに限るとやうに迷信つて、其の他のものは更らに價値がないかの如くに、蔑視する人が少なくない事である。論より證據、若し諸君の家庭に病人でも出來ると直ぐ、粥、おも湯呼はりをする。又醫師もそれを奬める、病人も亦それを好んで食べる。而して普通の食餌は殆んど廢めにして了つて、鷄卵、牛乳、ソップの如うなもので補ひをつけやうとする。是れは吾々が日常目撃する所であるが、憐れむべし大なる誤りで、丸で自分で自分の病氣を增進らせるようなものだ。

尙ほ此の外に健康な人が、牛乳、ソップを飮んで、普通食を減して居るのも見受けるが、是等は實に愚の極だ。

言ふまでもなく、おも湯よりは粥、粥よりは飯、又、ソップよりも夫れを煎出した肉の滓の方が、遙かに滋養の効價があるのだから、何も滋養分の少ない、而かも不味いものを食べて、ワザと身體を弱らせる愚を學ばなくとも良い話である。

素より、胃腸が普通の食餌に堪えられないとか、流動食の外は食べられないとか言ふ――例令ば急性の胃病、胃の潰瘍、癌腫、腸の急性病、熱のでる疾病、其他の急性病で胃の安靜を要する場合――ならば是非もない次第であるが、其の他の場合に、食べて惡いと云ふ事は決して無いのである。

たとへ又胃が病ひにしても、柔かな物ばかり食べ

て居るのは宜敷くない（但し潰瘍とか癌腫とかいふ胃病は別として）何となれば、柔軟なものは胃を刺戟する事が少ないから、胃は益々夫れに馴れて、運動をしなくなる。すると本病は左程重くなくても、胃運動減弱のために、營養の不給を來たし、知らず識らず全身を衰弱させる事があるからだ。

私は常に言つて居る

『多くの醫師は食ひ過ぎさせて害するよりも、控へ過ぎさせて害することが多い』

と。病氣の際には、何んでも身體を衰弱させぬやうにして、而して病魔に打ち克つ――少くとも抵抗するだけの體力を養ふのが肝腎なのである。換言すれば、直接に病魔を退治るよりも、全身の營養を增進させる事が大切なのである。故に病氣を罹たらば、少し位は胃腸を傷しても良いから、ドシ〳〵食べる方針を取らねばならぬ。

胃養生法の奥の手は胃を強固にするに在るのだから、木でも石でも消化する位に、胃を鍛え上げなければならない、だから歐洲の學者も言つて居る。

『胃を保護する事も必要であるが、然し又練磨する事も必要である』

と。之れを要するに、胃腸を犠牲にしても、全身の營養は忽諸に出來ないのである。（此頃未完）

# 家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

## 第三　感覺の練習

皆さんの御承知の如く、人の心と云ふものは、皆自分の身體以外の色々の刺戟を受けて段々と開けて行くのであります。

それから心と云へば、詔り自分の身體以外の所有天地萬物が皆寫つて、恰度寫眞が撮られるやうな具合に働いて現れてくるのであつて、云はゞ心と云ふものは宇宙の萬物であると云つてもよい位であります。

偉い人と云へば、其心の材料が澤山に這入つて偉い働をするのである。又詰らない人と云ふのは、一向世界の事が其人の心に這入らない、それで働を現すことが十分でない事を云ふのであります。心に宇宙の萬物が次第に這入つて來ると云ふのは、申迄もなく五官から這入つてくるのであります、それ故五官の作用をよくすると云ふとは人を賢く、人を段々發達させて行くと云ふ上に就いて最も大切な事であります。

學校では色々の教育をしますが、殊に實物教授と云ふこ[illegible]を、今日は重んじて居ります、これは何であるかと云ふと、其の事柄を知らすと云ふ事も大事な事でありますけれども、一には五官の働を鋭くし誤りのないやうに導くと云ふことが大事な目的になつて居るのであります。ですから、學校に出た子供と、少しも出ない子供とは其怜悧さが只文字を知つて居るとか珠露盤が出來るとか云ふのではないのでありまして、其外に五官がよく働き、心の働が鋭いと云ふことが大變に違つて居るのであります、學校に出ない者は、物を見せても茫然して居つて、見方が大變疎略である、聞かしても、聞方が粗雑かつたりして、大事な事に氣付か



ぬと云ふやうでありますが、學校に出て適當な敎育を受けた者は見たり、聞いたりした事が、判然、精密に分るのであります。で此の事をよく考へまして、一家の主婦たる人は勿論の事、自分が召使つて居る處の者によく氣をつけて、五官の働を鋭くして、事をするにも、早い間に精密に、判然と分ると云ふやうに練習することが、最も大事なことであります。

子供に玩具を與へることは「でん〳〵太鼓」や「笙の笛」や色々變つた音のするものを與へるといふやうに皆んな五官を練習する大事な働をなすものであります。色々の音の違つたものを聞くと子供が何の音であるとか云ふやうなことが、直にわかつて、其物の音をきくと音と一緒に形までが出てくるやうになるのであります。又小さい時から音のする方角をよく聞き分けると云ふのは大きくなつて働くのに、大切な事であります、即ち此の世界の物の位置を知り、距離を知るなどに付きて、大變大事な力を



有つて居るものであります。

處が、他の家などに行つて見ますると、どうも一家の内の主婦なり、主人なりが、大變、感覺の習練が足りないと思ふのであります、大抵の家で、茶を出すに茶碗の縁に垢が溜つて居ないと云ふのは殆どない、よく見ると云ふと、其縁にズット小さい塵や黑いものが着いて居つて、手やなんかで拭はなければ口を着けるに、躊躇するやうなのが多いのであります、上流の家庭、敎育ある人の處では余程少い、田舍に行くとそれが多い、殊に無學な下女であつて、何んにも讀めもしない、書けもしないと云ふやうなものにはそれが多いのであります、それから又物を損すことが多い、それは粗暴いから破すかと云ふにそればかりではない、一つは感覺の習練が足らないからである、手に物を持つても、觸れたと云ふ感じが、十分に起らないからして、かう云ふ過失がおこつてくるのであります。感覺の鋭い人ならば少し觸つても、少しの音がしても、直ぐ自分が感じま

すから、過失が少ないのであります。それから無學な習練のない女中を使ふ處では、最も茶碗を損したり、過失をしたりするのであつて、感覺の練習された教育のある人にはそれが、少ないのであります。

それは勿論、感覺計りではない、心の働も大變關係して居るのでありますが、直接には此の感覺と云ふことが大事なのであります。それですから、田舍の一向教育のない下女などは小さな針をもつて裁縫をすることが出來ない、それは筋肉の働や、感覺の働が鈍いからで、是等のものは雜布をさゝせるにしても、特別に疊針や何かを買つてこなければ雜布もさせないと云ふやうになるのであります、是等は只不斷、色々の物を取扱つて行くことに就いて、感覺の大事なことを述べたのでありますが、其の外味の感覺、香の感覺、或は其外の人の有つて居る處の感覺は家を修めるに、よく養つて置くことが必要である、殊に料理をするのは、只仕方を習つたり、食物の成分を知つたりすることばかりではいかない、それを作らへる人は、味覺と云ふものが進んで居らなければ、立派な料理をすると云ふことは、出來ない、日本の家庭は、どうも無理な話で、これを作る女中とか、一家の主婦に於てもさうであるが、自分がそれを食べないで、この位にしたら、よからう、と、先生から敎へられ又は姑から敎つたことを其儘するのである、只主人が喜び又一家の者が喜んで食べたら今日は好かつたのだと云ふやうに、自分から、其原因を尋ね見出すことをしないでよい加減に當推量をやつて行くやうであるが、これは大變な間違ひであつて、一軒の家の者が、同じやうに味覺が進んで來なければ、出來ないのである。それで私が日本の家庭に勸めたいのは、一軒の家の者が、食事を一緒にすると云ふことである、上流下流に於ては一緒になつて居るけれども、中流の家では、一軒の家の者が、主人と同じものを食べることが出來ないと云ふやうなことで、主人と主婦と家の者とは違つたものを食べて居る。それで、家で食べるものは

水つぽいとか、鹽からいとか云ふやうなことを云つて、主人は遂には料理屋へ行つて食べる樣な事になつて來て、一家の平和を害すると云ふやうにもなるのである、それでこれを一緒にして、たとひ不味いものでも一家同じに、主人から下男迄も一緒にする、さうしてこれを作へる人は、主婦であつても、下婢であつても先づ自分が味つて見て、今日はよかつたとか、今日は惡るかつたとか云ふことを判斷して、昨日は惡るかつたから、今日は斯う云ふ風にしていかうと云ふやうに改めて行くことが、必要であります。

私が先年、靜岡縣の燒津と云ふ處へ海水浴に行つて居つた處が、其の燒津館の主人は食物と云ふことに熱心であつて、それは新しく開いた處でありましたから、他と競爭するには勉强しなければならぬと思ひまして、料理や何かも三度々々御注文を聞きに來る、來てそれから後に料理に執りかゝる、それは普通の旅館でも隨分やることで別に珍らしいことではありませぬが、只私が感心したのは、私が食べた殘りを必ず主人が調べて其の殘りを食べて見て、澤山殘つて居ると云ふとこれは作方が惡るかつたから召しあがらないのであると云ひ、食べてあると、あゝこれは御氣に入つたのであると云つて、かう云ふやうにして改良をして居るのであります、それから段々に宿つて居る中に主人は私の食性が分つてきましたので、非常に愉快に過すことが出來るやうになつたことがありました、一軒の家もこの通りでありますから、これを作らへる女中にも食べさせて見ると云ふことが必要であります。又鼻も其通りであつて、特別に練習をせなければならぬので、惡臭いものは惡臭い、薫のよいものは好いと何人でも云ふのでありますが、これも一家の者が、よく一致して臭い時には皆んなが嫌つてこれを防ぐと云ふやうにする、例へば好き香のする花とか、又時には香を焚くとか云ふやうにして、皆んな好き香を愛し、惡臭がしたならば能く其原因を除くと云ふこと

が大事なことである、これは人心を養ふと云ふことに大切であるが、又一家の團欒の上にも大切であります。又一家の內に臭いものを構はないと云ふやうな者があつて　又殊に子供にさう云ふ者があつたら、其儘には置かないで、よく氣を付けて、只鼻が塞つて居ると云ふならば、家で氣を付け、又それで直らない時には前にも云つたやうに、直ぐ醫者にかける必要があります。

この感覺の大切なのは、只感覺より這入つてくるもの計りでなく、全體の氣分と云ふものに大變に關係して、痼癖持になつたり、又非常に沈欝な人になつたりするやうなことが感覺の缺點の爲にくるのであります、中にも鼻の感覺と云ふものは其有樣が強いのでありまして、鼻の惡い爲に神經衰弱を起し、腦病を起し、何をしても面白くない、忍耐力がなくなると云ふやうなことが、子供の時には有りがちなことでありますから、少し鼻に異狀があると思つたならば、早く直さなければならぬ、又一軒の家の主人などが、折角主婦が作つた料理などを不味いと云つて食べないならば、それは鼻の狀態をよく調べて見る必要がある、鼻が塞つて、ものが臭はないと云ふ時は、著しく食物の味がなくなるのである、それは皆さんが風を引いた時に、さつぱり食物の味がなくなることを經驗するでありませう。其の外鼻に一寸異狀があつても、直ぐ味が違つて來ますから、よく注意しなければならぬ。

斯の如く、家庭を修めて行くには、眼でも耳でも、舌でも、鼻でも所有感覺を習練してこれをよく働かして、段々とこれが銳く働くやうにしなければ、決してこれが修まるものではない。其の證據には食物などに限らず掃除などが、さうである、視覺の惡い者がした掃除は隅に塵埃などが殘つて居る、ものを拭かしても、よく拭けてない、これは惡意でやるのではない、橫着でやるのではない、これは疎略や不注意ではない、十分に念を入れてやるのではあるが……あんなに叱られるから、能くやらなくてはな

らないと云つて一生懸命でやるのであるが、練習が足らないから、出來ないのであります。自分の心の發達した處から見て、心の足らない處を一概に叱るのは惡いとてであります、練習をさせて行くがよい。又子供に色々の玩具を見せたり、先に申したやうに、色々の音を聽かせたりするのは、感覺を練習するに必要なことである。又家庭のことゝは御話が少しそれるやうであるが、世の中に出てから、それが非常に役に立つのである、支那、臺灣などでは味の感覺が出來る爲にそれだけで、生活して居る人もある位であります。それはお茶の香を嗅いて、其價を定めることを職業にして居る人である、例へば、新しいお茶が出來た時に、これを一寸嗅いで見てこの香が好いとか惡いとか云つて、それ〳〵一斤幾等々々と皆んな價をつけて區別して行くのであります。斯の如くして、これで給料をとつて行くものがあるのであります。それだからと云つて何もこの職業の爲に家庭で感覺を練習して行けと云ふのではありませんけれども、兎も角も男の兒は日本を護らねばならぬと云ふ爲に兵隊に行かなければならないのであります、軍に出なければならないのでありますが、軍に出てもこの感覺の鋭敏と云ふことが大變必要であり、例へば斥候に行つた時に感覺が鈍い時は大變危險である。又外國で路に迷つて方角を知ることが出來ないときに感覺が鋭どくて、微細な事に直で氣が付くと云ふやうな人は危險が少ないのでありますが平生心の働が鈍い、從て「ぼんやり」した人は自分の身を全うすることが出來ないのであります。斯う云ふやうな譯で、家庭でもつて感覺を練習すると云ふことは、只家を修め、清潔にし又家人の間を美しくすると云ふこと計りではない、世の中に立ても必要なことなのであります。



# 婦人の衞生

楠田病院長　楠田謙藏

## 姙娠と攝生

### 其四　睡眠

睡眠は常に不足にならぬやう心掛けねばならぬ、左れば夜は成るべく早く寝ね、朝は夙く起きて、新鮮なる空氣の中を運動するが良い、たとひ樂しき遊びなどの爲にても、夜更しをすると云ふことは甚だ悪い、よく／＼注意すべきことである、

### 其五　居室

居室は日光の十分に射し込んで明るいのが良い、若し光線の射し込みが不足なるときは、不潔になり易いばかりでなく、動もすれば憂鬱症に罹り易いのである、

一體居室は、夏は涼しく冬は寒からぬやうにすべきは云ふまでもないが、屢々室内の空氣を取換へて不潔にならぬやうに注意を爲さねばならぬのであるが、寒きをりは空氣を取換へるとき、俄かに冷たい風が烈しく入つて來ないやうになさねばならぬ、元來我國の障子は、常に紙の目より適當に空氣の交換せらるゝものなれば、酷く寒い時などは、敢て之を開けて風を通すには及ばない、

### 其六　外出

外出するには、夏ならば朝夕の涼しき中、冬ならば日中の暖かい時を撰ぶが良い、雨の降る日または風の强い日などには外出せぬが良い、而して履物は草履あるひは低い下駄の類を用うるか、若くば靴を穿くのも宜い、よく世間に試しのあることで、姙婦の躓づき倒れたるが爲に流産を起し、或は胎兒の位置を悪くしたり爲ることがある、是等は重に履物に原因するのである、

### 其七　衣服

衣服は時候に應じて、寒からず又熱からぬやうに用うべきは勿論、襯衣は屢々洗濯するが可い、而して夜間は重ね着するやうに注意し、腹帶はフランネ

ルなどを用ゐて、あまり緊からぬやうに腹部を被ひ夏にてもやはり之を用うるが良い、一體これまで世間に行はれて居る腹帶はあまり、緊過ぎて胎兒に害がある、宜しく注意すべきである、頭髮は云ふまでも無いが、數々洗つて清潔になし、重き櫛または簪殊に入髷などは用ゐざるを良しとす、入浴は大抵毎日一度は缺ぐべからざることであるが、湯の溫度は能く加減に注意をなすべし、冷水浴は宜しくない、また入浴の時間は短かいのが良い、決して空腹の時食後、感冒その他の病にて身體に熱のある時などは入浴してはならぬ、浴後は暫らく安靜にして且つ湯ざめのせぬやうに心付けるが良い、

### 其八　乳房

乳房は分娩の後、小兒を養ふべき大切のものなれば、十分に之を保護しなければならぬ、左れば常に之を清潔になしおくべきは云ふまでも無く、若しも乳房の皮膚が薄弱なるときは、アルコールを清淨なる布片に浸して時々之を拭ふが良い、また萬一乳頭



の發育の惡いものは、時々手にて柔らかに揉み、且つ牽き延ばすやうに爲すべきものである、

## 妊娠と榮養

妊娠中は甚だたやすく消化器を損するもので、その度の強いものは遂に惡阻に陷るものなれば、飲食物は十分に注意せねばならぬのである、若し妊娠中に適當の滋養物を食せざるか、或は食することの出來ぬ時分には、分娩の時期まで其健康を保つことが出來ぬのみならず、胎兒までが健全なることを得ないのである、

乃で凡ての場合に於て滋養品として常用せらるゝ所の牛乳及び鷄卵は、妊婦に對しても亦缺ぐべからざる食料である、以下少しく項を分ちて示さん

### 第一　牛乳

牛乳は其品質の良いものを撰び、よく煮立てゝ用うべきであるが、この牛乳の中には病原となるべき黴菌を含むことのあるものなれば、搾りしまゝの物

を用うるは甚だ危険である、牛乳を煮たり且之を蓄ふる爲に製せられたる機械がある、之を用うれば消毒は確かである、彼の市中に販賣する牛乳には往々不良のものがあれば注意を要するのである、若し牛乳を得難い土地ではコンデンスミルクを用ゐても可いが滋養品としての價値は牛乳に劣るのである、而して世には往々五勺程の牛乳を飲んで得々として居るものがある、けれども實際滋養に用うるには毎日三四合づゝ飲まねば十分とは云へぬのである、



### 其二　鶏卵

鶏卵は我國に於ても古へより食料に供せられて、婦人の口にも慣れて居るのみならず、その新らしきか否らざるかは一見して知ることが出來る、且少しも黴菌を含むの憂が無い、左れば最も滋養品として用ゐるに宜い、人も知る如く、鶏卵は生なるもあまり煮過ぎたるも共に消化の十分宜くないものなれば、常に半ば煮たるもの又は炙りたるものを用うるが良い、但し炙りたるものは、焼鍋に塗り過したる油の浸みこみたる爲に消化を害することがある、たとへ左なくとも油の臭氣は姙婦の厭ふことあれば注意を要するのである、乃でこの鶏卵も一二個を食して足

れりとして居る風習がある、けれ共少くとも一日に七八個位は用ねば十分と云ふことは出來ぬのである

### 其三　ソップ

ソップは種々の鳥獸の肉および骨より製せらるゝもので、多くの滋養分を含んでは居ない、けれども消化を進むるには良効のあるものなれば少量づゝ用うるが可い、市中に於て之を販賣するものが多いけれども中には不正品があるから、成るべくは自宅にて製するが宜い、併し餘り多く鹽または醤油を混入せぬが良い、

### 其四　肉類

牛肉は脂肪の部分を去り、且つ軟かなるものを撰ばねばならぬ、豚肉は用ゐぬが可い、鳥類の肉も其脂肪の所を取去れば、通常の食料に供するものは何れの肉を用うるも差支へなし、去りながら魚肉の脂肪多きものは、その部分のみを別つことは困難なれば、之を用ゐぬが宜い、例へば、鰻、鮪等の如きものである、その他烏賊、章魚、蝦類、蟹類、貝類に至りては皆膳に近寄らせぬが良い、よしんば、食料に適したる肉類たりとも、干したるもの又は鹽漬となしたるものは用ゐてはならぬ、彼の罐詰の肉類は腐敗に傾きたるもの又は不良の肉にて製したるものあれば、之を食せんとする時は、よく〱其品を擇ばねばならぬのである、

### 其五　蔬菜

蔬菜の類にて用うべからざるものは、南瓜、西瓜芹、獨活、筍などで、赤根菜、鶯菜、京菜(土地により水菜と云ふ)人參、蕃牡丹など、凡て葉を摘みて食料とするものは差支へない、全體根を食するものでも又は葉を食するものでも、あまり纖維の多いものは消化し難い、また長じ過ぎたる蔬菜類も同樣である、尙ほ茸類および海草類即ち昆布、羊栖菜等は總て消化し難いものなれば避けるが宜い、

### 其六　果實

果實も滋養の價値が無いではないが、通常は其味と香氣とを賞翫するに止まるものである、左れば林

檎、梨子、桃、柿、葡萄、蜜柑などは、よく熟したる新らしきものを擇び、皮と核とを去りて少しづゝ用うるが良い、一體姙婦は多く是等の物を貪ふの恐れがあるものなれば最も注意を要するのである、

其七　穀類

穀類の中にて、米は我國の常食の主なるものなれば、平生の如く之を用うるが宜い、乃ち飯にても粥にても差支へないが、飯の餘り硬いのは胃を疲らすから宜くない、餅や赤飯は食せぬが宜い、鮨もまた消化に害がある、麥飯、麵麭、饂飩の類は宜い、けれども素麵、蕎麥の類は用ゐぬが宜い、豆類を食するには其皮を去らねばならぬ、併し豆腐は澤山用ゐなければ害にはならぬのである、此の穀類と肉類および蔬菜の類とを適宜に交へ用うることは至極結構なる仕方である、

其八　雜件

菓子類は餘り糖分の多いために胃を傷ひ易いものなれば多く用ゐてはならぬ、但しビスケットの如きものは、姙婦の食するに適當なるものである、右に反してあまり鹽分の多いものも亦消化を妨ぐるものなれば注意すべきである、

滋養分の多いものでも消化し難いものは用ゐぬが宜い、去りとて消化は如何に良いとても滋養量の不十分なるものは用ゐても、身體の榮養を充たす事が出來ないから効用は無いのである、世には往々之を思ひ誤まり居る人が多い、此事は姙婦たるものは餘程注意を要するのである、

飲料としては清水又は濃からざる珈琲などを用うるが宜い、若し酒類を嗜むものは、アルコールを含むことの尠いもの、即ち麥酒、日本酒、葡萄酒等の佳品を擇びて少し用うれば害にはならぬ、又鷄卵に砂糖を加へ、之に少量のブランデイを混じ、熱湯を注ぎて稀薄にして用うるときは、亢奮の料に滋養の價値を兼ねしむることを得るのである。

香辛料すなはち胡椒、生姜、蕃椒、橙皮、葱の類のやうなものは用ゐぬが宜い、

凡て食物は一度に多量を採つてはならぬ、少しづつ數回に用ゐるが良い、而して床に就く前になつて飮食してはならぬ、又食後には劇しい運動を禁じなければならぬのである、

以上食物の注意を約言すれば、姙婦は別に平素の食物を改むるには及ばない、唯成るべく分量が少くして滋養量の多い、消化のし易いものを用ゐ、あまり是まで用ゐなれぬ食料を採らず、且つ飽食を愼しみ、調理法に注意すべしと云ふのである、

## 育兒法の誤謬

篠田利英

家庭の事と云つても、別に耳新らしい考へもなく毎に同じ事を繰返すやうなものだが、所謂歴史は事實を再演すると云ふが如く、今また家庭の事に就ても斯様な事を繰返さねばならぬと云ふも餘儀なくせらるゝので、それは外でも無い、即ち予が始終口癖のやうに目に觸れ耳にする毎に傷心に堪へないのは家庭に於て子供の取扱ひを爲すに當りて叱ると云ふことである、

この叱ると云ふ事は、子供の身心を萎縮させて暢發することを妨ぐるものである、左れば何うか之を絶えて無くすると云ふことは不可能であるが、成るべく之を少なくすると云ふことは、最も育兒上に有効の事であると考へる、

固より子供は尙ほ未だ辨別契合などゝ云ふ智識の發達しないものであるから、自然何れが惡戲になるか、又爲らぬかと云ふやうな考は薄いものであれば深く咎むるに足らぬものである、併しながら之が親たるものは克く是等の辨別の就て居らぬものは無いのである、最も子供を育てゝ行くには、父兄たる者が仔細に監督して寛嚴宜しきを得て、或時は叱らねばならぬ事もあるが、廣く世間を見渡すに、多くの場合に於て、夫等の區別を辨へてする程の考深い親達の尠ないのは甚だ殘念である、

チヨツト子供が何かする、親は直ちに惡戲の名の下に於て叱かるけれども、その惡戲と云ふものは實に無邪氣のものであつて、少しも心あつて爲るものでは無い、偶々故意に出る事が無いでもないが、左樣いふ場合は甚だ稀であると思ふのである、

例へば、親が障子の張換をして居るのを見て、直ちに子供は其所に來つて紙を剝がす、親は之を認て惡戲とするけれども、子供の心には、親も剝がすから自分も爲ると云ふ極單純な考で、その間に何等の區別はないのである、また屋外に出でゝ石を投げても惡戲にはならぬ、けれども之を座敷や庭園内に於て爲るときは直ちに惡戲と目せらるゝ、また棒切を持つて庭の土を攪き廻はした時は叱られぬが、若し母親の傍に來て尺度を弄べば、是また忽ち惡戲として叱責せらるゝと云ふが如き實例は決して尠なくない、

併しこの時子供の心に於ては、屋外と庭内とにて石を投ずるも、また尺度と棒とを以て遊ぶ間に何等の區別は認めないのである、左れば果して何れの遊戲が害になるか或は爲らぬなどゝ云ふ考は毫も無い恐らくは世間多くの親達も此間の區別は大いに苦む事であらうと思ふ、素より惡戲本來の意味に於てする惡戲は、設令前述の如くその場合は僅少なるにもせよ、その時は寬假せずして叱責せねばならぬけれども、子供の爲る多くの場合は殆んど無邪氣で、他に遊ぶ方法が無い所より爲るものであれば、通常世間で見て以て惡戲とする所のものは、その親たるものが子供のために相當の設備さへして遣れば、叱責する度數を減少することが出來やうと思ふ、併し相當の設備と云つたとても、無暗に鞦韆を備へよ運動場を造れと云ふのではない、各自自家の生活の程度より割出して、玩具または適當なる所謂小供の嗜好に投ずるやうな物を具へ、或は夫等を具へざるも、適當に小供を遊ばせるやうに指導するものさへあれば、決して子供が有用なる物品を傷めるなどゝ云ふ事は無くして濟むのである、

一體子供といふものは、寸時も手足を動かさずには居られぬ性質のもので、同じ口を動かすと云ふ中にも、口を動かして飲食するとか、或は饒舌をするとか、若くは手を振るとか足を擡ぐるとか、少しも靜止して居ないのが子供の性質である、左れば親々たるものは克く斯の子供の性質を呑みこんで、之を害のないやうに導くのは親たるものゝ責任である、それにも關はらず、且つその行爲の果して善意であるか或は惡意であるかと云ふことすらも究めずして謂はゞ自己の任意に之を叱責すると云ふは、その曲は親にありと云はねばならぬのである、是は世の親たるものが大いに育兒上注意を拂はねばならぬ事であると考へる、

加ふるに子供が眞に惡意は勿論、善惡の境を脱して無邪氣に遊戯して居るものを親たるものが、己れが都合上、予は殊に己れが都合上と云ふ何せなれば世の多くは時として子供が平常より以上の惡戯を爲すも自己にして閑散に苦しむか若くは他に喜悦を以て充さるゝ時等は、殆んど一笑に附して之を叱せざるのみならず、却つて之を歡賞するの態度に出ることあり、之に反し、若し自己が一種憂鬱の暗雲に鎖され、或は不快の感に打れつゝある時は、常に一眄半顧に値せざる遊戯も、忽ち青天の霹靂一聲迅雷耳を蔽ふに遑なからしむるの奇觀を現することがあるからである、

此く事の善惡を問はずして容易叱るときは、子供をして反省の餘地なからしむると同時に、身神を萎縮せしめて暢然したる性質に育て上ると云ふことは到底出來ない、假りに身體は缺目なく育つても、精神が萎縮して歪み僻んだ不具者となるのである、且つ斯樣に叱り癖がつく時は、子供ながら其事に慣るゝは云ふまでもなく、それが第二の天性となつて成人の後怒り易き性質と變じ、只に自己が些細の事にも怒るばかりでなく、その怒りを他人に移すやうになる、容易に怒りを他人に及ぼすやうになれば、知らず〳〵人の怨みを買ふことが數次である、諺にも

世には味方、千人に仇敵千人と云ふが如く、尋常でさへも此の如くであるのに、若し怒り易くして人の怨みを買ふことの度重なれば、從つて自己の身を亡ぼすの日を早めしむるのであれば、親たるものは最も克く此點に注意して育兒の誤謬に陥らぬやう、且つは子女の將來をして身神ともに健全に幸福に生活の意義を完からしむるに努むるは、正に今日世の父母たる者の執るべき急務であらうと思ふ、

## 食物と乳汁

醫學士　久保杏林

近來一般に衛生思想の發達して來た結果と見えて大部滋養攝生のために牛乳を飲用するものが增加するのは誠に喜ぶべき現象であるが、サテその牛に與ふる所の食物と、之が分泌する所の乳汁とは如何なる關係を有して居るものであるかと云ふ事に至つては、餘り心に留めて居る人が多くないやうに考へるそれ故に聊か之に關することを述べて、殊に殘暑に對する攝生の注意を促すのである、

總體乳牛の食物は、その乳汁の分泌量に相應せねばならぬものである、推て考ふれば、食物即ち飼糧が餘りに良過ぎれば肥滿しすぎて、其がために乳牛として不相應なる缺點がある、それかと云つて餘り粗惡の飼料を與ふれば、單に消化器を害するばかりでは無く、品質の至つて惡い乳汁を分泌するから是また不可である、

多き飼料の中でも、成分を澤山含んで居る綠飼料等は一番良いのである、けれども餘り澤山の水分を含んで居るもの、即ち青草などは、縱ひ乳の量が澤山であつても、その品質は如何も良くない劣るのである、然れば之に適宜の油粕を混せて與ふれば、第一乳汁の分量が多いばかりで無く、その品質も至つて良くなるのである、

如何も水分に富んで居る飼料を與へると、極めて薄い乳汁を分泌するので、之は取りも直さず、器物

の中で直接乳汁に水を混ずる代りに、動物の體内で交せると同一な理である、是の故に奸智に長けた、乳屋は、搾り取つた乳へ直ちに水を混ぜずに、前述のやうに、乳牛に水分の多い飼料を與へ、而して澤山の乳汁を得やうとするから、飲用者は宜く此邊に注意を拂はぬと、同じ價格で斯樣な粗品を當てがはれることが少ないのである、

　それで滋養分の澤山に含まれて居る飼料は必らず成分に富める乳汁を産出するものである、之に就て現今丁抹の飼料の事を參考までに述べやう、

　丁抹では、菜種、油粕、燕麥およびフスマ等を以て、牛酪質の出來る一等よい飼料として、大麥は第二位におかれ、豌豆、ライ麥、亞麻仁油粕を第三等の食物としてあるが、亞麻仁油粕には一種の毒があつて、それがため乳牛の消化器を害するから、之には熱湯をかけて與へることに爲つて居る、元來一等よい食物は、柔軟なる牛酪を生ずるけれども、第三に位するものは、硬い牛酪の外良いものが出來ぬとのことである、

　次に氣候より云へば、冬期には一等または二等の飼料に、藁若くは枯草か、又は根菜類を混ぜて與ふれば澤山の良い牛酪が出來るのである、けれども蕪菁や大根等を與へますと、生乳は勿論、製作を加へた牛酪も、共に強猛なる臭氣に感染するの患があるのである、

　左すれば根菜中何が一番良いのであるかと云ふにビーツ即ち根菾菜が最も良いのである、併し餘儀なく蕪菁とか又は大根などを與へた場合には、大凡左に掲ぐる手續を施して、生乳の不快なる臭氣を除去せねばならぬのである、

1、牛乳を搾取するや否や蕪菁を與へてはならぬ、又以來も決して之を與へてはならぬ、一體蕪菁の臭氣を消滅するには十二時間を要するのである、

2、牛乳の温度を長く持續せしむるが宜い、左すれば揮發性の臭氣は自然に發散するものである、今之を温むるには、器物中にて爲すか又は乳汁の中

へ温湯を注でも宜いのである、
3、蕪菁と他の飼料を混じて與ふるときは、自然に
その臭氣は無くなるとのことである、それ故に藁
または刈草の類に交せて與へる場合が多い、
4、牛酪を分離する前に乳精を熱するか、又は少し
の間なりとも温暖に保つて置くのである、
5、牛酪を分離する前に、乳精二升五合に一匙の硝
石を加へても宜し、又は牛酪を洗滌する水に、牛
酪一ポンドにつき一ドムの鹽化石灰を混入しても
宜いのである、
已に飼料と乳汁との事を述べたれば、是より少し
く之が取扱方を話して置かう、
サテ搾り取つた乳汁は、多少毛皮膚などの不潔物
を混じて、居れば銀製又は眞鍮製の篩で必らず一度
は濾過せねばならぬ、若し銀製又は眞鍮製のもの丶
無い時は、之に代ふるに馬の毛で拵へた篩を用ゐて
も宜いのである、
大凡搾り取りたる當時の乳の温度は攝氏の三十度
餘である、この温度は恰も黴菌の發育するに最も適
當なる温度であれば、自由自在に黴菌をして發育せ
しめ、それがために乳汁を酸敗せしめ、或は凝結せ
しめる虞があるから、之に就ては左の條目を遵守せ
ねばならぬのである、
1、先づ第一に牛乳を搾り取る小屋を清潔にし、第
二に使用する所の器具等を清淨にする事は何より
最初に注意すべきことである、
2、生乳は搾り取つたま丶、長らく放置してはなら
ぬ、乾度成るたけ早く、攝氏の十度か又は十五度
位に冷却して置かねばならぬ、尤も之を手取早く
するには、之を淺い器具に入れて河へ浸すか、或
は錻葉を張つた小い箱に氷を入れて此中へ浸ける
も、至極良い方法です
3、夏季などは、時々乳汁が恰も大理石の片塊のや
うに凝まつて、爲に流動物たる特性を失ふことが
ある、斯樣なことは、縦んば夏季でなくとも平生か
ら注意して豫防の方法を講じて置かねばならぬの

である、乃ち乳の凝結するのは、夏季に於て殊更ら多いのであるが、強ち夏季にばかり限らないのである、

而して之を豫防するには酸素を通すので、左樣すれば乳酸の發生を豫防することが出來るのであるその乳酸さへ發生しなければ、大抵は乳汁の凝まると云ふことは無いものである、この目的を達せんがために、米國では鉄葉の篩で濾すのであるが、その篩は稍隔離した小孔を穿けてある、此中に乳を入れて凡そ一米突の高さから滴下せしめて乳器に集めるのである、乳器に集むるときは、牛乳は點滴となつて能く空氣を吸收することが出來るのであるが、總體斯樣な操作は、必ず畜舍を離れることが遠い清潔の室で爲さねば、乳汁は惡臭に感じ易い性質の物であるから注意しないと變質の患がある、

4、乳汁は又酸味の生ずることがあるから、之を防ぐに力を注がねばならぬのである、



乳汁の酸味を防ぐには種々の藥品を使用する、今試みに其名を示せば硼酸、水揚酸は普通多く用ゐらるゝもので、取り分け硼酸は防腐性が強い藥ですから、乳味の劣變するのを防ぐに、至つて良いのである、或試驗によれば、一キログラムの生乳に一グラムの硼酸を交ぜたものが、十二度乃至十三度の温度で五日經つてもまだ、酸性の反應を呈して居つたとのことである、又外の試驗では一キログラムの乳に二十グラムの硼酸を混ぜて、十五度乃至十八度の温度で、二十日その儘にして置いたが、生乳と少しも異はらなかつたと云ふことである、

併しながらこの硼酸は毒性のものであるから、乳汁に混せるにも克く注意して、餘り澤山に入れないやうに心掛けて居らないと、大した間違を引起すことがある、

而して乳汁の一リツトルに硼酸二グラムを交せるときは、數日位保存することが容易で、硼酸一グ

ラム乃至一グラム半は、十二度の温度にて一キログラムの乳汁を一週間保存するには十分である、萬一温度が高ければ一グラム半乃至二グラムで十分である、

硼砂はその力は硼酸に比すれば稍弱いばかりでなく、之を多く用うるときはアルカリ性のため、恰も石鹼のやうな忌むべき味をつけるのである、

水揚酸は酒の防腐劑として世間に多く用ゐられて居る薬であつて、而して水揚酸は又乳汁の酸敗を防ぐことが出來るのである、乳汁一リットルに、二五グラムを加ふれば、二日間位は決して異狀を來すことは無い、

5、夏は特更乳汁は腐り易いから、必ず一度煮沸すれば、乳酸の發生を防ぎ且つ黴菌の芽胞を殺し、又乳の表面に蛋白質の薄層が出來るから、空氣中より芽胞の浸入を防遏するの効がある、

6、乳汁の凝まるのは乳酸の出來る爲である、故に炭酸曹達または重炭酸曹達か、或は炭酸石灰等の炭酸鹽類を加へて中性とすれば、この患を十分に防ぎ止めることが出來るのである、併ながら是等の薬品は、防腐劑としては毫厘も効能が無いのであれば、乳酸の發生を止る事が出來ないばかりでなく、却て之を促進する事が毎々あるのである、蓋し酸類は、黴菌類には有害であるから、少しばかり乳酸の出來た、後はいはゞ、醱酵は微弱であるけれども之に炭酸曹達を加へて中性とするときは、益々黴菌の繁殖を助けて醱酵を勵ますやうなことがある、であるから炭酸鹽の用は、たゞ酸を中和して凝固を防ぐのみに止まるものであると、斯う承知して居れば宜い、

これ等前述の酸類の中で生乳を保存するには、重炭酸曹達が最も宜いのである、それは何故かと云ふに、過剩の炭酸を放ち、この炭酸は黴菌に有害であるからである、乳汁が萬一酸味を帶びたるときは炭酸曹達を入れるが良いのである、と云ふのは斯は容易に乳酸と化合するからである、

# 支那料理

嘉悦孝子

私は本誌第七號より支那料理を揭げ來りたるが、是は決して所謂流行を趁うとか、又は新奇を衒ふと云ふが如き好事の心に驅られしものに非ずして、之には少しく理由のある事で、その所因は別に耳新らしい事では無い、知らるゝ如く、世の中が日に月に進み、年一年と人口が增殖すると同時に、吾人の生活は益々困難の度を高め來るは、今更めて統計を示すまでもなく諸姉の眼前に睹つゝある所の事實なるが、去りとて一方に於て之と對して收入の度が高まつたかと云ふに左程でない、

然らば比較的この少額の收入を以て、日一日と物價の昂騰して行く世の中に處して、假りに餘裕がないにしても、如何にせば收支相償はしむる事が出來るであらうかとは、お互ひに吾人ともに日夜苦心しつゝある焦眉の問題である、如何に世智辛世の中で



も、約めて云へば人間と云ふものは飲食せずして生命を保つと云ふことは出來ない、併し如何に生命を繋がねばならぬ、その半面には物價が高いと云つて草の根や木の皮を常食とすることは出來ない、必らず飲食物には、第一衞生上に適するもの第二滋養分に富むもの、この二つの要素を備へたものを擇ばねばならぬ、けれども既に今日世上に知られたる或種の滋養品と稱ふるものは、現時我國の生活程度に照すときは、概ね中流以上の家庭に適應するものにして、迚も中產以下のものゝ口腹に入ることは幾んど稀と云はねばならぬ、一月に一度や二度では衞生にも滋養にも得る所は少ない、

依つて少額の收入を以て比較的衞生および滋養上に有益なる物を撰びて、その生活の困難を排することが出來るならば、實に吾人お互ひの幸福であらうと考へし結果、彼の西洋料理は中々入費の嵩むのみならず人々によつて好き嫌ひがある、之に反して支那料理は餘り我國の人々には好き嫌ひの差が前者に

比べて尠ないやうに思はれる、のみならず其原料たる豚肉または鯨肉の如きも、その價が甚だ廉くして鯨の白肉は當時の市價で百目十四五錢である、之は一例に過ぎざれども、すべて原料は安價で而かも滋養に富んで居る

是の故に、同じ支那料理とは云ひながら、私の講話は成るべく我國人の口腹に適するやうに調和したるものを掲ぐる胸算であるが、間々純粹のものを載することもある、兎に角以上の理由なれば、人の憂に先だちて憂ふるの諸姉は、一日も早く共に之を實行せられん事を望むなり、



## 米粉肉

糯米を洗ひ、これを焙烙にて煎り、擂鉢にて擂りて粉となし、水嚢にてふるひ置き、更に肉を適宜四角位に切りて、之を醬油に生姜をおろして少しく加へたる中に浸しおくこと凡そ五分間にして取り出し糯米の粉にて能くくるみ、肉の周圍の斑のなきやう粉をつけ、茶碗蒸の茶碗に五六片を入れ、外にスープと鶏卵とを入れてよく攪きまぜ、醬油と鹽とを少し入れて味をつけ、之を前の茶碗に約七分目ぐらゐまで入れ、蒸籠にかけて凡そ三十分間蒸し、出來上らば、茶碗の蓋をなし、暖かなる中に出すなり。

### 醤肉

五人前として、豚肉(股の肉をよしとす)百匁位を丸のまゝ煮たつた湯をたつぷりとして、その中に入れて約一時間程茹で、その茹でたる汁五勺程を鍋の中に殘しおき、餘は悉く他の器に取りて蓄へおき、その殘したる汁の中に醤油を三勺程を入れ、更に香ひをつけるために、葱を丸のまゝ五寸位に切りたるもの二三本と、生姜の皮を剝きたる丸のまゝのもの二つばかりを入れ、よく肉に浸むまで煮たる後、薄く切りて皿に盛り、西洋がらしを練つて少しく附け合はせる。

### 揚白菜

キャベツを一枚〳〵に取りはなし、煮たつた湯に鹽を少し入れ、その中にキャベツを投れ、ザット茹で、外に取り出して冷しおき。

豚肉をよく打くか、或は挽肉になし、葱と生姜とを微塵に切り、之を肉の中に入れ、醤油を少しばかりの胡麻油とを入れて克く攪きまぜ、キャベツの葉を、小なれば二つ位、大なれば三つ四つ位に切り、何れも硬き部分は切りすて、それにて肉を包み、兩端を折りて巻きおさめる。

肉を包む分量は、拇指の大さ位を適度とし、長さ一寸五分位に巻きて、之を鍋か丼の如きものに入れスープをたつぷり注ぎ、醤油と胡椒にて味をつけ、蒸籠にかけて凡そ三十分間程蒸し、之を三つ位づゝ小丼に盛り、汁も入れて出す。

### 春捲

鷄卵(三人前に二個位の割)を鉢か丼の中にこわして能く攪きまぜ、メリケン粉を中匙一杯ほど、水にてドロ〳〵に溶き、こわした鷄卵と一緒に混和し、フライパン(之は西洋鐵鍋なり)か、又は支那鍋(是は一個凡そ一圓位で、これが一つあれば支那料理は何んでも出來る、至極重寶なるものなり)にて拵へるが正式なれど、若しフライパンや支那鍋のない家庭にては、たゞの鷄卵焼鍋を用ゐても宜し、その何れを問はず、表面に油をしき、之に前の鷄卵を少し

入れ、圓滿に搖りながら、厚くならざるやう成るべく薄く燒き、すぐ裏がへして、一寸片方を焙りて外にあげ、鷄卵を悉く此くして數枚を燒き終らば、更に左の手續に移りて。

一、豚肉を薄く切り、それを更に重ねて千切に切る。

二、キャベツの葉を一枚〳〵にほごし、煮たつた湯に鹽を一つまみ入れてチョット茹で、上げて再び千切に切つて水氣をしぼり。

三、葱の白き所を二つに割り、細く千切に切る。

右の如く調へおき、油をフライ鍋に入れ、前の肉を入れてヂリ〳〵と熬り、杓子にて始終かきませながら、醬油を少し注し、葱を入れてよくませ、最後に茹でたるキャベツを入れて、杓子にて攪き交せながら煮る、是等が煮えたる頃を見計ひ、スープを少し入れて加減を試み、皿に上げおく。

最初に燒きたる鷄卵をひろげ、皿にあげたるものを細長く入れ、グル〳〵と捲きて中央に至らば、兩端を少し折り、メリケン粉のドロ〳〵に溶きたるものを指にてなすりつけて捲きおさめ、その捲きおさめの所をメリケン粉にて付け置く（のりまき鮨の兩端を折りまげたやうな物）

### 清湯江搖柱（チンタンジャンヨーチュー）

乾したる貝の柱を軟らかになるまで茹で、細かにほごして其まゝ汁に浸しおくこと凡そ二三時間にして、更に鍋にスープ（一人前に五勺足らずの割）を入れて火にかけ、右の貝の柱を汁と共に入れ、鹽（茶椀盛の味位）と醬油を少し入れ、胡椒にて味をつけ次に鷄卵（一人前に半個）を別の器に割つてよくませその貝の柱が煮えたつて居る所に、まんべんなく流しこむこと、丁度日本料理の玉子とぢのやうにす。鷄卵は直ちに煮えるものなれば、入れてすぐ火より下し、茶椀に盛つて出す、貝の柱は市中何れの乾物店にても販賣す。

### 伴鷄絲（メンチースー）

上等の鷄肉を切らずして、そのまゝ煮たつた湯の

中に入れて茄で、茄だらば外に取り出し、一寸位の長さにして細かに指にて裂く、また庖丁にて薄くそぎ、小口より細く切るもよし。

外に鷄卵五個を（鷄肉百目として）白味と黄味とを別々に分けてよく攪きまぜ、兩方とも水と鹽とを少しづゝ入れて混和し、黄味を丼の如きものに入れて蒸籠にかけ、その蒸し上りたる時、直ちにその上に白味を入れて再び蒸籠にかけ、蒸しあがると、白味は眞白になる、之を外に出して前の如く細くせん切に切る。

兩方とも切れたら一緒にまぜ、西洋がらしを酢にてとき、醬油と鹽とを少し加へて味をつけ、之にてまぜ合せ皿に盛る。

また鷄肉の代りに豚肉にても宜し、豚肉百目を二つ三つ位に大切りなし、湯の煮たつた所に入れて茄で、試みに箸をさして中より赤い血が出なくなれば茄だりたるなり、それを細くせん切になして、前と同じやうにするなり。

### 燒醸魚

豚肉を細かに打くか又は挽肉となし、葱と生姜を微塵に切りたるものを入れ、醬油を少し加へて克くまぜせる。

魚（魚は白き身の魚なら何魚でもよし、鯛など大によし）長さ一寸五分か二寸程に薄くそぎ、その上に薄く鹽をふり（好みにより胡椒を少しふりかけるもよし）それにて前の肉を少し取り分けて包み、メリケン粉を鷄卵にて溶き、鹽少しを加へ、此中に包みし肉を入れて、ころもの能く附くやうにして、ラード（豚の脂）のよく煮たつた所に入れて揚げる。

## 家庭に對する要求

島崎登久子

何事も實際と理論と相伴ふと云ふことは難いものでありますが、殊に現時の女子を見するに概ね理想のみが高くて實行が之に伴はないやうに思はれるのであります、明治の御代の有難いことには、交通

の便が開けましたのと、到る處に學校が設けられましたのと、尙は一つは女子が如何なる遠方までも出ることが出來るやうになりましたものですから、この東京などへは太郎作の娘も次郎兵衛の娘も自由に遊學を爲ることを得るやうになりました、之は誠に結構なことでありますが、サテ又半面より之を觀ますると、太郎作の娘も遣つたから自己の娘も行らねはならぬと云ふやうな、一種の競爭心より娘を遊學せしむるの傾きがあるやうに見受けますが、之は大いに敎育の目的を父兄が誤つて居るのではありますまいか、熟考すべき事であらうと思ふのであります

そこで子女が幸にして父兄の許を得て東京へ遊學に出て來る時分には、みな其相應の目的を懷て出京するにも拘はらず、少し東京の砂風に吹るゝや否や忽ち鄕里を出る時の意志を變じて、學士または軍人等の妻女と爲りたいものであると云ふやうな慾望を起すのであります、併し其望みは惡くは無し嘉すべきでありますが、その結果に鑑むるときは大いに嘆ずべきであります、何せなれば、學士と云うても、初め理科、法科、文科、醫科、工科、農科と斯の六科に入學すべき人員に限りがあるのでありますから、每年卒業して出る人員も豫想せらるゝのであります、軍人に海陸の別はありますが、是また人員に限りがありますから、限りなく日々に殖え來る所の女生の望を滿足せしむると云ふことは出來ないのであります。

一體是等は當初鄕關を踏み出す時の考へを打忘れて、漫りに女子は氏なくして玉の輿に乘ると云ふ浮雲氣なる雲の峯に望みを屬するの過ちではありますまいか、廣き世界には今尙ほ往々この俚諺の實現せらるゝ事がありますから、未だ意志の固まらない妙齡の女子達の眼に映ずる所より、遂には此くの如き空望を夢みるのであらうと思はれますが、全體この俚諺は其半面に於て女子の意志が薄弱である、換言すれば、女子は依賴心が多い、男子に依らざれば衣食する事が出來ぬと云ふことを表白するもので、女

子の立場から云ふときは、この輕侮の言に對しては宜しく寃を雪ぐの覺悟が無くてはならぬのである、それにも管はらず、尙ほ且つ浮雲の峯を夢みて、自から品位を卑うするばかりでは無い。

時に流行を趁うと云ひまして、頭髮は額より三寸も向へ突出し、顏面や衿に剝げるほど脂粉を施し、俳優または藝妓等の扮裝を爲るものがある、中には少し氣取つて令孃風などを眞似るものもあるが、如何に頭髮はハイカラにして腰に海老茶の袴を纏ひ、顏面等に脂粉を施したればとて、折角身體の大部分を覆ふ所の衣服は如何と見るに手織りの田舍縞では釣合が取れないではありませんか、併し此手織りの田舍縞は父母の溫き手に依つて造られた大切のもので、決して笑ふべき筈のものでは無い、私は之を貶すのでは無い、何うか父母の膝下で其田舍縞を着て居た時の心を持ち續けて、都會の浮華に流れぬやう願はしいのであります。

然るに一般女子に有勝ちの虛榮心は、中々永くその質素の風を持ち續けさせやうとはせず、半年乃至一年、甚しきは半年をも待たずして何時とは無しに都會に於ける華奢の惡風に感化さるゝと共に、前述の如き空望を生ずる所より、所謂木に竹を接だやうな風姿をしてまでも他の歡心を買うと腐心するのでありますが、實に是等は笑ふと云ふよりも寧ろ憫むべきものではありますまいか、それも只此くの如くにして止めば良いのでありますが、若し自己の空望を充たす事が出來ないと敎師になるなどゝ云ふ考へを起すものが尠なくない、併し敎師に爲ると云ふことは惡くは無い、けれども失望の結果と云ふに至りては感服が出來ません、斯樣な敎師が何うして國民を指導する資格がありませう、のみならず何れの父兄が初めより子女を敎師と爲さんがために遊學させるものがありませうや、尤も稀には不幸その他の事情のために敎師とする異例も無いでは無いが、その少數の異例者を以て多數一般を律するとは出來ません、即ち普通一般の希望は將來主婦として完全に

其任務に堪へ得るの資格を具備せしめんが爲に遊學せしめるのであらうと考へるのであります、或は私の斯考案は間違つて居るか知りませんが、兎に角女子の教育を以て任ずる方々の一考を煩はすべき事であらうと思ふのであります。

一體女子が學藝を修むるは何の爲であるかと云ひますれば、專門家となる方々を除く外は、一般に他日主婦となりて實務に適應するために修業するのであらうと考へますが、現今の學藝を修めた人々を觀まするに、口の頭で御飯を焚いたり裁縫をしたり爲さらうとせらるゝやうに見受ますが、之は少しお考が違ひは致しますまいか、と云ふものは、素學問は所要に從つて應用すべきものでこそあれ、學問そのもので家庭を整理する事が出來るものではあるまいと思ふのであります、否、出來るものではありませぬ。

斯樣な考を懷いて居る女子が他へ嫁しますれば、奢侈はしたい我儘はしたいと云ふやうな惰性を持て居りますから、成るべく姑や小姑などの無い家を望むのであります、若しも姑や小姑のある處へ嫁きますと、何うも折合が附かぬ、從つて舅姑を嫌忌すると云ふことになりますが、本來より申しますれば世の中は日々に進んで行くので、その進んで行く世の中で教育を受けたものであれば、舅姑よりは智識が進んで居るべき筈である、然るに事實は大いに之と反比例を爲して居るが故に、嫁と姑との間が折合ぬのであります、尤も若い嫁は或智識は年老の姑より進んで居るに相違ない、けれども家庭の主婦たるの資格に於て缺けて居るのであります、ソコデ姑や小姑が煙くてならぬ邪魔になる、奢侈や我儘が出來ぬ所より、良人を勸めて親と別居するとか、又は隱居させると云ふやうな相談をする、之は決して私の想像説では無い屢實見する所の確證があるのでござゐますが、果して之は教育の不完全に基づくものであるか、又は外に何等かの原因があるものか、孰れにしても憂ふべき事ではござゐますまいか

# 乳兒脚氣の話

在郷軍醫 高橋房次

病、疇昔は四百四病であらゆる妙麗機關の異常を説明し盡したが、今は中々病名も増加したが其の中でも乳兒脚氣症などは、實に明治醫史の第一頁を埋むべきものであると思ふ、此の乳兒脚氣症の存在を卒先して喚叫したは誰れあらう、明治現代の兒科醫中のオーソリーチーたる弘田博士である、頃ろは確か明治二十四年頃ろかと記臆す。

脚氣と云ふ病が既に魔物である、本態を中々秘して發かさしめぬ、爲めに中毒説も黴菌説も窒素説も各々相等の堡壘を有して居る、其の漠然たる脚氣が産出する乳兒脚氣は何は一層の魔物である、我等は乳兒脚氣の小兒を診斷する度毎に弘田博士の偉勳を賛賞して止まざるなり、此の乳兒脚氣の存在を知らなかッた時代には是れ等の患兒をば消化不良症とか一種の脳症狀位にして不條理の處置の下にドシドシ冥



府へ轉送したらうと思ふと寒心に耐えないので、定めし蓋世の英雄不羈の豪傑の卵が無意味の内に死したらうと思ふ、やい必ず天才の小兒を數多く死したに相違ない。

乳兒脚氣とは如何なる徵候があるかと云ふに諸君にお分り易く申すと、顏色が蒼白色となり表情に缺欠し不活發に陷り勇氣沈銷と云ふ顏貌を來し、何となく呼吸が促迫し、啼泣し易くなり、乳を吐き營養か衰へ聲音が嘶嗄して如何にも重患らしくなり、次第に粘膜のチアノーゼ便通秘結浮腫等を來すもので、檢脈すれば頻數となり、聽診すれば心悸が著しく亢進を認むるもので、所謂脚氣と同一の症狀を呈するもので、適當の手當により治療効驗あるも一朝誤ると不幸小兒は心臟痲痺で永眠に陷るものであります豫後は恰當の處置によりて解決せらるゝも幼少頃不良で滿一年も經過したる小兒だと中々死亡するものでない、恰當の處置とは脚氣乳の禁斷である、絶體的の禁斷を要するものである、もし主治醫或は顧問

醫の旨導を守らず可憐の愛情に眩みて内々にても授乳したが最後豫後は暗黑と言はざるを得ぬ、乳兒脚氣に對して單純の藥劑療法に依賴したなら此れ亦疑はしいものである。

乳兒脚氣、事實は簡單である、然れども醫師には頭痛のする場合が甚だ多い、小兒の機嫌が惡いから診察して下さいとの賴みにより規の如く各部各官の診察をなした、すると什麼も乳兒脚氣に近似して居る症狀だ、乳はと尋ぬると母體授乳との事により、母體を診察すると格別の病的がない、足もだるく無い、食氣も進む、便通も尋常だ、動悸もしないとの事、せめて病的とすると脈搏の少し多い位だ一診の下に脚氣と斷ずる事が出來ない、而し小兒は確かに乳兒脚氣の症狀だ、迷はざるを得ない、授乳禁斷は簡單に斷行する勇氣を缺く事がある、併し私は常にかゝる時には兎に角に母乳を禁斷せしめる母體には充分つらい事であらう、すると患者は日増に快方に向ふ母初め家族の者は成程と首肯する、其の内に不思議にも（事實不思議でもなんでもない）母體は足が痺れます、少し道を歩むと動悸が强いなど〻訴へ遂に完全の脚氣症を起す事が多々ある、して見ると五尺の母體を犯す前に小兒は既に



業に中毒の症狀を發現したもので、此の事は僕一人に非ず多くの兒科醫の遭遇する事であるとの事だ。私は夏期より秋期に亘りて脚氣病の多く發すると乳兒脚氣は遲く發見すれば遲い程大なる不幸である事に思ひ浮んで茲に本誌によりて世に警告する譯である、諸君は何んでも吐乳、尿利減少、呻吟、啼泣、聲音嘶嗄、便秘等の病狀に觸れたなら、母に於て健康狀態であると自信するにもよい、小兒の診察のみに安んぜず母體自身の診察を乞ふべきものである事を念頭に置かれんことを希望す、殊に過去に於て或は現在に於て脚氣に罹り居りたる時は直ちに醫師の導示を受くべきものであります。

母體が脚氣であらばよし輕症にしろ母體は授乳禁斷を以て小兒に對する責めを盡したとは言はれぬ、授乳禁斷と共に輕易の脚氣症にても自ら治療すべきである、何んとなれば一日も早く治癒して再び愛兒を膝に抱き源泉混々として盡きざる善良の母乳を授くるを計ると共に、苟且にも近來の學說の如く黴菌に因する傳染病とすれば一刻も速かに加療して他に傳染するを防がねばならぬと思ふ、次は授乳禁斷に續いて來る問題は、小兒養育の方法にて、乳母を需むる事が出來たなら難事はないが、さなくば善良なる牛乳によりて營養を計るべきもので、鄙僻の寒村に至りては善良は否不良の牛乳すら需める事が出來ない、斯る場合には一歩を讓りて煉乳によりて營養保育を送らねばならぬ、世は文明だの進歩だのと叫ぶが、生れたばかりの小兒に米をくりて汁となしドシドシ與へて天賦の壽命を人工的に短縮して居る家庭がある、どうか諸姉の力によりて育兒の方法を普及したき希望であります。

◉國香會女子部　榊原伯爵夫人を會長とせる同會は毎月一回研究會を開き、會員三十餘名に達したれば來十月一日より同二十六日迄、第一回展覽會を上野博覽會第二號館跡に開かんと、目下女流諸家の出品を促しつゝあり

# 保姆の撰擇

文學士　山本無極

我國では古より小兒を育てるのに、乳母を傭ふ人が決して少なく無いが、しかし此乳母と云ふものが本當に撰ばうとすると中々得られるものでは無い、例へば、身體が健全であれば性質が良くないとか、又心が良ければ身體が健全でないとか、或は乳の出る分量が少ないとか、若くは其乳母の出産時と、託すべき嬰兒の出生時との差が甚だしいとか、その他種々なる障碍があるものであれば、成るべくは乳母を傭ひ入るゝことは避けたいのである去ながら、母親ばかりで手の屆かぬと云ふ人々では、小兒の世話をする者を傭ひ入れることに爲るが宜いのである、

固より母親が手づから小兒を育てると云ふことは正當であるは勿論であるが、或は職業上の關係、又は家庭の情況等に因つて、さう一樣にも行かぬものであるから、或場合には如何しても保姆を傭ひ入るゝの必要が生ずるものである、併し保姆を傭ふたからと云つて、母親たるものは小兒を其に委せ切つて一向に小兒の事は關はぬと云ふやうな譯には行かぬものである矢張り母親たる者は保姆の長となつて、兒守女を監督して、その小兒の育て方には十分注意をしなければならぬのである、いはゞ小兒は親にとつては大切なる寶物である、それを如何して他人の手に委せ切つて、少しも顧ないと云ふやうな事があつて宜いものであらうか、これは別に更めて是非を論ずるまでゞはあるまいと思ふのである、

それで其兒守女の心、身體、性行に就ては、如何に之を撰擇したものであらうかと云ふに、試みに其要項を列記して見やう、最も之は單に保姆のみでは無くして、乳母の場合にも必要の資格であることは云ふまでも無いのである、若し之を乳母であるとすれば、尚ほ此外に乳汁の質および分量等に關する醫師の鑑定、乳兒の出生時と、乳母の出産時との差違等を識別する事などの必要が生ずるのである、而し

て今、保姆に缺ぐべからざる要件、即ち資格には、之が精神上と體質上との兩面があるので、まづ精神上の資格を云へば、第一保姆たるものは、小兒好きでなければならぬ、これは勿論のことであるが、この外に兒守女は氣が長くして辛抱強くなければならぬのである、世間には隨分妙なもので、女子として餘り小兒を好まぬものが少なく無い、また小兒好きでも、直ちに腹を立てる者も多い、それで忌や〱小兒の世話を爲ると云ふものや、腹立ちつぽいものは、決して良く小兒を育てることは出來ないのみならず第一に幾ら骨を折つても、其樣な女子には小兒が馴染まないので爲方がないものである、

乃で若し強て小兒をそんな保姆に馴染ませやうとすると、それが爲に、小兒の神經を害することが甚しいので、遂には小兒が妙にいぢれ易く、また意地張つたものに爲つて仕舞ふのである、これは甚だ悲しむべき結果と云はねばならぬ、

全體小兒を育てると云ふは、單に乳を與へ又は滋養物を與へて、胃の腑の側から、その身體を強壯にするのみでは行かぬので、それと同時に極く穩かな極く優しい言語、最も穩かな最も情のある愛の心を以て、その小兒の心を和らげて育てあげねばならぬのである、是の故に、保姆がどれほど小兒の世話を爲るのに氣を付けて居るにもせよ、その子守にして小兒を扱ふのに穩でなく、又小兒に對する言語が優しく無かつたとすれば、小兒の健康はそれが爲に大いに害を被つて發育が宜しく無いのである、

そこで兒守女が天性小兒好であるや否や、又勘忍強きや否やと云ふことに就ては、まづ之だけの影響があるのであるから、保姆を傭ひ入るゝ人はその女が親切で小兒好な優しいものであると云ふ事を十分に認定した上で、之を傭ひ入れるやうにせねばならぬのである、而して前述の親切であること、小兒好であると、優しい事などが、始終變らずに居るやうな女で無くては困るのである、例へば、或時は非常に親切で優しく小兒を扱ふかと思へば、また或時は

隨分手荒く小兒を遇すると云ふ風で、折々その氣向の變り易い女は、全く保姆たるの資格は無いのである、この外保姆に備はるゝ位の女は、何うも相應に教育もあり身分もあると云ふ譯には行かないので、時としては主人との折合が良く無いと、別に意地の惡いもので無くとも、小兒に酷に當ると云ふやうなのは決して少なくない、これ等は其女が天性惡意のある者でない限り、主人の方でも傭人の取扱ひ振を良くしてやるやうにするのが得策である、

次に大切な事は、この保姆たる者は、如何なる場合とても虛僞を語らぬと云ふことを盟はねばならねもので、この虛僞を云はぬと云ふことは、小兒を育てるには最も肝要のことである、敢て兒守に限らぬが殊に兒守は決して小兒に對して虛僞を云つてはならぬ、これは極く明白なことで別に贅言を費すまでもない、知れ切つた事であるが、併し少し考へて見ると、我々が自ら日々に小兒に向つて虛僞を云つて居るのである、之が甚しく害を小兒の心に及すべきもので、たとひ一遍たりとも小兒を欺かすと、その次からは小兒が決して其人の言ふことを信じないやうになつて仕舞ふ、よく有ることであるが、母親が遠方へ出く行く時に、留守をさせる小兒に向つて、チョイト裏の庭を歩て來るから、待つておいでよなどと、此く云ひ置て出て行くことがある、さうすると小兒は其言を信じて待つて居るにも係はらず、母親は固より遠方へ行きしものなれば、なか〳〵歸つて來ない、稍もすれば夜半に戻るやうなことがある是に於て小兒は瞞されたと云ふことを覺る、そこで今度は實際裏の庭へ母親が出ることがあつても、溫順に待つて居ない、復欺されるのであると思ふ所より、附纏つたり或は泣たり怒つたりして、容易に其言を信じないことになる、又母親が外出の歸りには何か好い土産物を買つて來ると云ひながら、一物をも買つて來ないから、小兒は其外出の際に於ける母親の言を當にして居たものが失望する、そこで之も二度目から瞞しが利かぬと云ふやうになる、斯樣な

例は實に多いのである、之は縱んば母親は云はないとしても、兒守女などは屡斯樣なことを云つて聞かすものであるから餘程注意して左樣いふことの無いやうに、兒守女を訓へて置かねばならぬのである

併し是等の虛僞は惡意の無いものである、けれども若しも惡意のある不正直な兒守女を傭つて置いたが爲に、その性行が小兒に感染した例は甚だ少なくないのである、所謂お辨茶羅の誤魔化し上手の兒守女のために、小兒が矢張り目先口頭の誤魔化しが上手になることは恐るべきことである、一例を擧ぐれば、某家に於て甚しく表裏のある乳母を傭うて置いた所が、或時小兒は祖母の許へ行つて菓子を乞ふとお前はお腹が惡いといふことなれば、進せる事は出來ないと云つて斷られた、さうすると小兒の云ふには、お母さんは見てお出がないから、何とか誤魔化して置けば宜くはないかと答へたのである、これが四才位の良家の小兒の言語である、そこで祖母なる人は、諄々として人は虛僞を語り又は誤魔化すなどと云ふ行を爲すべきもので無いと云ふことを說き聞かされたと云ふことを聞いたが、所謂染むるにまかす白糸のやうなる純潔無垢の心をもつて居る小兒に不正な兒守女や又は乳母を附けおく事の危險は、此一事でも明らかに解ること丶信ずるのである、不正な保姆の惡い性行が、小兒に及ぼす惡感化は大略此くの如くである。

之に次ぐ所の正直に話をせぬ兒守女のために、非常な不幸な事件が起つた例が、また他の多くの方面に少なくないのである、例へば、兒守女が不注意のために乳母車を顚覆させ、小兒が石の上に落ちたるに、兒守女は自分の粗忽を叱責せらるゝことを畏れて隱し居たるが爲に、手當が後れ、小兒は遂に其が因となつて病を發して死んだと云ふやうなことは、しば〳〵耳にする事であるが、兎角我國の習慣として、人前を取繕ふことが隨分甚しいのであるから過失も失策も正直に主人の前に包み隱さず話をして謝すべき所は十分に謝すると云ふやうな公明な心を

持つて居るものは、傭人などの中にも多く無いのである、

左れば保姆の撰擇には、この點によく〳〵注意すると共に、傭ひ入れの際は固より、傭使中でも、止むを得ざる場合の怪我等は、たとへ母親が伴れて居ても起るものなれば若しも小兒が怪我過ちを爲たと云ふ際には、速かに母親なり又は家人なりに告げるやうにせよと懇々言ひ含めて置く必要あるのである

之は少し極端のやうであるが、兒守女にして萬一盗を働くやうな女は、如何なる場合とても、直ちに解傭するが宜いのである、若し知つて其儘に放任



して置くならば、輙もすれば小兒に其惡質が感染するの虞がある、尤も兒守女が家内のものへ手を掛けるやうなのは直ちに分るから、まだしも始末が宜いけれども家内では正直らしく爲て居て、外に出でたる時、他家でばかり惡事を爲すものがあるので、主人たるものは十分に注意を要するのである若し其を知りつゝ家内の情況等で解傭しなかつた爲に、小兒に何時か其惡性が染み込んで、之が矯正に非常な苦辛をせられた實例は中々少なくない、是に由つて見るも、保姆は之を傭ふ初めに撰擇の必要があると同時に、傭使中とても其性行には

始終小兒の母親たる者が油斷なく注意して居らねばならぬのである、

# 料理及菓子製造の實驗

富田豊春

## いんげん佃煮

隱元さゝげ及青唐芥子、古生姜、三品共に細く切り、醬油を少し入れて暫時煮、其液汁を絞り、更に醬油を煮立て、再び能く煮、平らな器に入れて冷し侚深き器に移し、三日程經過して食す、

△注意　最前煮た液汁の絞りが足らぬと黴を生ず永く貯へるには、七日程過ぎて、再三醬油を煮立て其中へ入れて能く煮、如上の通り冷し、瓶或は壜に入、貯へるべし。

## 蠶豆の甘納豆

乾した蠶豆一升へ普通火鉢に出來る生灰を大匙一杯、水八合程にて暫時煮、皮が剝げるを見計ひ、擂鉢に入れて、手先にて揉みて、皮をよく剝ぎ、水にて洗ひ、露を切り、白砂糖にて煮結、平な器に入れて、ザラメ砂糖を掛ける

## トマトの砂糖漬

トマト（西洋赤茄子）を蕚の方より、熱湯をかけ、上皮を剝き、レモン油を僅少加へ、白砂糖をかけて器に入れて、氷を以て冷し置き食すべし。

## 玉蜀黍の食法（五種）

玉蜀黍は、普通醬油の附燒が通例であるが（一）煠て、實を剝し、白砂糖を掛けて、食すれば、茶菓子になる、（二）煠たのを食鹽をつけて食すれば、ビール抔の相手に妙である、（三）煠て酢に暫時漬置き、實を剝し鹽燒肴抔の附合に用ゆ、（四）熟した實を剝て油にて揚げ食鹽をかけて食す、（五）是も極く能熟した實を剝りて、三日程日向に乾し、臼にて搗き、米の粉と合せ、（唐黍の粉七合、米の粉三合）熱湯にて煉り、普通の團子より少し平みの大形に製して蒸し、串にさして燒き醬油をつけて食すべし。

## 富士山に產出する食品

富士登山が年々流行して、今年は絶頂へ郵便局が設置され、紀念として登山者が差出す郵便スタンプで當局者は御繁昌、之も政府を肥すのであるから、結構な譯だが、修學或は探險なれば今少し利益な考を持つてもらひたい、予は富士の話を、本誌七月號に出して置きしが、富士の周圍を回遊して修得した食品を、二三左に紹介せん、

### 澤蟹の佃煮

富士の麓に(土地里言根方といふ)淸き水の流れる澤に、發生する澤蟹は、親が小指の腹位で、子は豆粒程水色で實に美麗である、夫を採取して、醬油を煮立置き、其中へ投入して、急ぎ鍋蓋をなし、强火にて煮、漸々とろ火にして、暫く煮結め、蜂蜜を少し入れて暫時煮ると、紅色になり實に美はしく、加之良き風味である、

△注意　搔廻すと足や鋏が落るから、煮笊を用ゆべし

### 濱梨の梅干、幷ジヤム

是も富士の麓に生ずる果實で、里言濱梨と稱す、形は南天の實の大粒位、四五月頃赤く熟したのを採助して、鹽漬となし、普通梅干の液汁(俗稱梅酸)に再び漬置き、一ヶ月も經過して出す極小さい小梅干の如し、又如上採取した實を笊に入れて、熱湯をかけて暫く置き、白砂糖を煮立て、前の實を入れ漸々に煮詰め、時々搔廻して練りジヤムとす。

### 富士川紫菜

是も富士川の上流柴川に發生す、岩に附着する紫菜で、靜岡市中で多く販賣す、一枚が東京の乾海苔に比較すれば四枚がけ位なり、之を水に浸して解し入はい豆腐の汁に加へて食する、甘味あり香氣もよし又菜の浸し物へ交てもよろし。

### 狐めし

油わげを割きて、中の豆腐を掻き除け、皮を極く細く切り熱湯をかけ、上油を去り、少し鹽からく味を付けて煮、別に生がら茶めし(本誌四月號參照)に焚き、前に煮置きたる油揚を交合せて食すべし。

### 豚めし

豚の腸へ豚肉を繰りに掛けて結め、三四寸位にして蒸し、乾燥せしもの、支那食品販賣店にあり、米一升を普通水加減をなし、其上へ前の肉を一個載せて炊き上げ、器に移す際、肉を細まかに解し混せ食すべし

### カレイライス

ライスカレイともいふ、之は西洋料理が本分であるが、予は折衷實驗を左に記す、葱を極く薄く細に(そばやの役味の如く)切り、バタ或はヘットにてもよし、鍋へ引きて、强火にて煮切り、前の細かき葱を入れて熬り、狐色に成るを度とし、別にメリケン粉を牛乳にて解きて、前の熬りたる葱を交せ、よく練りて煮る、之にて種は出來る、中へ加入る身は、鷄肉、或は海老、野菜は、にんじん、玉葱、椎茸、松茸、筍等、何れも細かに、庖丁して何れも鹽にて味を付けて煮、前に製し置きし種も一所に鍋に入れて牛ソップにてゆるめ、葡萄酒を少し加へ、カレイ粉を入れて混せ、炊立のめしを器に盛り、其上へかけて食すべし。

### 麥めし

麥めしは水田の乏しき山間の僻村では常食であるが東京や又繁華の市街では、ゑませるといふ事が非常に面倒に思ふ、それ故挽割麥を專ら使用した物だが、近頃は押割麥を販賣から重寶である、常食や養生に食用するには別として、料理に使用するには米八合、麥二合の割にて焚き、山の芋のとろゝ掛けて食するが尤も常用である

▽附言　予が養生に食用したのは、麥一合をよく煮て牛乳一合五勺にて再び粥にされたり

# 蔬菜の促成法

理學士 田中東洋

珍らしき初物を食すれば七十五日生きのびるとは何時の頃より云ひ慣はしたるものであるか、その事は今詳かでないが、期節に先だちて人工的補温によりて發芽を促がし成育するの方法は古くより行はれたものである、

そこで本邦にて從來促成栽培をしたのは、東京近郊では砂村大島村、或は市川新田村等が最も盛んであつて、また駿河の久能および三保村、京都の聖護院岡崎村、大阪の今宮等は何れも其名が高いのであるけれども、全く人工的溫度の保護を與ふるのは各地ともに稚苗の時に止まつて居たのであるが、今を去ること五十餘年前に砂村は現今の如き設備を爲し爾來今日に至つたのであるが、如何も科學の進歩したる今日より觀るときは不適當であつて、大に改良すべき點が少なくないのである、

何故なれば、從來の溫床では稍早時に促成し得るだけであつて、迚も極寒の候ではその結蓏を見難い故に從來の促成品は、珍品として市場に稱譽せられたのである、けれども今日の如き霜天雪地、四時何時でも任意に促成し得る溫床の施行を見るやうに爲つては、到底これと競爭して利益を得ることは出來ないのである、左れば從來施行せらるゝ溫床の設置法を略述して、聊か之が改良の方法を說て見やう、

從來各地にて施行する溫床は、多少の巧拙はあるが、概ね其釀熱に使用する原料は、市場の塵芥又は單に藁を用うるのみで、砂村の如きは東京市中より蒐集したる塵芥の新鮮のものを用うるのである、而して溫床の構造は、地上に巾四尺、高さ二尺五寸乃至三尺、長さは適宜として周圍を藁又は炭の空俵等にて粗末に圍つて、その中に右の種々雜多の廢物よりなれる塵芥を、二尺乃至二尺五寸の厚さに重積しよく一樣に蹈均し、適宜の濕氣を與へて上に腐壤を六七寸に盛りて、床上には油紙障子を蔽ひて床内の

温度を飛散しないやうにし、且つ陽光をも導引するの装置とし、その周圍は嚴重に圍を設け、殊に西北の二方面は高さ一丈位として外装をなして寒風を防ぎ、而して後その温床に適温の生ずるのを待つて、下種又は移植するのである、尤も時としては温度の高温を生ずる事がある、けれども七八日を經れば大抵鎭定するが、普通は二日乃至三日目に適温を生ずるのである、けれども三週間も經てば漸次温度が減殺するから、茄子の如きは六七回も温床を新設せねばならぬのである、

今之を改良したいと云ふは、從來の温床に比して第一藁圍と油紙障子に換ふるに、木框と玻璃障子とを以てし、第二從來は地上に高設したが、今は木框のみを地上に露はして、發熱物の原料並に植土とも地表以下に埋めて堆くして低く作ること、第三には又發熱の原料は、從來使用したるが如き、塵芥又は單に藁のみを用ゐずして、馬糞寢藁および木葉の混和物を使用するのである、

而してその利害關係は如何と云ふに、前にも云へる如く、例へば茄子を促成するにも温床を六七回も取り換へねばならぬとすれば、藁や油紙および空俵等の値段は若干でも無として、その手暇間は如何であらうか、成る程、木框に玻璃障子を装置するには一時に纏つた金錢が掛るか知らぬが、その代り一度作つて置けば容易に壞れるものではない、ツマリ度々藁や俵を換へる費用を積つて見れば、此方が餘程安あがりなのである、且つ保温の安全なること一二月の比にても種々の蔬菜を開花結實せしめ得るのでも解かる、之に反して從來のものでは、その頃は僅に稚苗を護育するに過ぎぬのである、左ればその得失は云ふまでも無いが、玻璃障子は光線の照射が十分であつて、從つて作物の生育が良好で、殊に結蓏の着色宜しきものである、是といふも畢竟は、木框玻璃障子の装置は床内の保温が完全であるのみならず、徒らに飛散するの憂ひなく、且つ寒冷の外氣に觸るゝことが尠ないからである、

次に温床の高設と低設とは如何なる得失があるかと云ふに、温床の醸熱物は、之を地上に堆積して高設すると、之に反して地上に埋塡して低設するとは温度の發生持續上に甚大なる關係があるので、從來の如き高設温床は、その設置每に周りの圍を作るの手數を要する、けれども低設温床は、一度その木框に符合せしめて地を穿ちさへすれば、温床設置に臨み、隨時その上に木框を裝架して、その框內に醸熱物並に植土を堆積するのみの事である、又高設は床底なる醸熱物內に空氣の貫透し易いから一時に高熱を生じ、又忽ちにして減却するの憂がある、要するに低設温床の利は、第一温度の持續が永い事、第二補熱を附與するに便利なること、第三に温床新設の都度、藁や俵の圍等を設くるの手數を省けること第四床地の温度が常に一樣なること、第四に寒風に觸接すること少なきこと等がその重なるものである此く比較對照したならば、云ふまでも無く低設の高設に優ることは萬々である、

醸熱原料の撰擇如何は、直ちに蔬菜の肥瘠に大影響を及ぼすものであれば、少しく此に說明を試みやう、從來砂村等にて使用する醸熱物は、前述の如く東京市中より蒐集したる塵芥であつて、このものは種々雜多の物が集つて居るので、從つて乾濕が一樣でない、而してその初めは非常に暴熱を生ずる、けれども忽ちにして其醱酵は全く盡滅するのである、故にこの塵芥を使用したる温床は、温床設置後一週間內外は温度劇甚にして、下種若くは栽植し能はざることあるも、普通二週間內外にして忽ち床温減却するが故に、之に栽植したる作物は其生を保つ事が出來ないやうに爲るものである是の故に何種の作物を促成するにも、二週乃至三週每に新床に移植せねばならぬのである、尤も稚苗の間に於ては、此の如く二三週間每に頻繁移植を行ふことは、作物をして矮短頑健の成育を成さしむるの術として、促成栽培上の秘術にするものなれば、たとへ温度の永く持續する温床に在りても、二三週間目には大低の作物は

移植を行ふものである、それ故稚苗の間は塵芥を以て設置したる温床にても、又よく成育せしむる事が出來る、けれども開花結實中は成るべく移植せぬが良い、是の故に塵芥にて高設したる從來の如き温床は、三月以前にありて高温を要する蔬菜は、到底促成する事は出來ぬのである、即ち從來砂村地方にては、二月下旬若くは三月の頃にありては、漸く隱元を促成したのみで、茄子の如きは其最も早しと稱するものも、四月下旬若くは五月上旬でなければ出ぬのである、蓋し隱元の如きは攝氏の十六度乃至十八度の低温にて結實し、且つ發芽の後七八十日にしてその嫩莢を採收し得るやうに爲る、けれども茄子の如きは攝氏の二十四度乃至二十六度の高温を要するのである、左れば發芽の後百二三十日を經なければ、その嫩蓏を採取する事は出來ないのである、故に其結果の頃は氣候が温暖であつて、温床は僅に夜間の防寒と多少の温度を補足すれば可い時候に爲らねば其結果を見ることが出來ぬのである、從つて利潤も薄いのである、

殊に塵芥の發熱は短期であつて、一二月の頃は僅に稚苗を護育するのみで結蓏せしむる事は出來ぬのである、而してその價はと云へば餘り安くないので一坪約一圓であると云ふ、之に反して寢藁と馬糞とに二割乃至三割の木葉を配合したる釀熱物を使用するときは、その價の如きも前者の約三分の二强であつて、その床温を持續することは七八週間と云ふ、幾んど二倍以上の永きを保つのである、

即ち從來の法に因りて一床を新設するには、少なくとも一人乃至一人半を其部度に要するのであるが木框玻璃障子の裝置は之を要せぬ、故に費用の點よりいふもはた作物發育上の關係よりも、温床の釀熱物の一の可及的醱酵の度の永きに渡るものを貴ぶので、この目的を達するは廐肥を最適當とするのである、

以上は單に蔬菜の促成のみでは無い、花卉の類にも之を應用し得るのである、




# 男女交際と宴會

文學博士　井上哲次郎

一躰男女交際の最も能く行はれやうと云ふ爲には私の考では、先づ宴會の改良をやらなければならぬ、宴會が男女の交際を爲すに最も重大なるものであるからのことである、男女交際の改良が出來て居らぬのは宴會の改良が出來て居らぬからである、宴會の改良をすれば、其結果として男女交際の改良が自然に出來るのである、夫に又女子の教育が備つて來れば愈々男女の交際が出來なければならぬ、何故此宴會と云ふものを左樣に重大視するかと云へば、今日までの宴會は寧ろ男女の交際を妨ぐる道具になつて居る、貴婦人と紳士との交際が旨く出來ないやうになつて居る、と云ふは座敷へお膳をズッと並べる、其處へ一人づゝ座わる、それで向ふと話をしやうとしても話が出來ぬ、大變隔たりがある、丁度話が出來ないやうにお膳が並べてある、夫では男女の交際が出來やう筈がない、況して男女を別々にしては尚更交際は出來ない、さうして大勢になると大抵料理屋で以てやる、送別會とか歡迎會とか云ふと料理屋の二階を借りてやる、さうして例の如く大勢ズッとお膳を並べて其處で酒を飲んで物を食べて居るけれども向ふの人とは話が出來ぬ、話をすれば其處に酌に來る女と話す外はない、醜業婦が前にザラッと並ぶ、夫で醜業婦と話をすることになる、向ふの客は又向ふで醜業婦と相對して居る、さう云ふ宴會では迚も貴婦人と紳士との交際が出來やう筈がない

さうして食べるにも又不都合である、日本ではお膳を平面に並べる、それで塵埃が食物の中に這入る、さうして向ふへ行く時には人のお膳の上を跨げて行く、其處に美味物がありても平氣でそれを跨げて行く、實に無禮な話で、また食べて居る人も跨げられて平氣で居る實にえらい人達である、さう云ふ宴會は西洋にはありません、西洋の彼の皿の上を跨げたら怪しからぬことである、日本では跨げる人も食べる人も平氣である、實に驚き入つたる宴會である、夫から少し食べやうとすると、向ふの人がやつて來て杯を献す、それから献酬を始める、献酬が始まると食べることは出來ない、献酬しつゝ話をするそれで何時迄も食べることが出來ぬ、夫から日本の宴席では長く居ると遂には喧嘩になる、私抔は夫故に大抵半ばで歸る『酒は微醉に飲み、花は半開に看る』とは此事でありませう、半ばで歸るのが一番好い、擲られる氣遣がない、座が亂れぬ中に歸るから尙更食べることが出來ぬ不都合なる宴會、實に怪しからぬ宴會、日本の宴會はさう云ふやうな工合に話の出來ぬやうに出來て居るから、遂には三三五五に分れて來て、此方へ聚合つて話を始める、彼方にも亦三四人、向ふにも亦三四人といふ工合に仕舞には座が亂れて來て、英雄割據の有樣で話を始める、さう云ふ宴會と云ふものがあるものぢやない、前述の社會の弊風と申したのは實に此宴會に原因して居る此原因から起つて居る結果をいへば、第一醜業婦と知合になる、夫から必ず種々なる弊害が起る、別に高尙なる宴會があまり無い處からして料理屋の二階で見つともない宴會をやつて醜業婦を呼んで居る、だからどうもいけない、宴會は幾らもあるけれども高尙なる宴會が少くない、夫で紳士は段々醜業婦に馴れ、貴婦人は紳士と立派な交際をする機會が殆んどない、送別會であらうが歡迎會であらうが、何々會であらうが貴婦人が紳士と共に相會して宴會をやるならば立派な愉快なる宴會が爲し遂げらるゝ、夫をやらぬから、貴婦人は交際が段々不慣になる、貴

婦人は家に置き去りされて夫の方は料理屋の二階で右様の宴會に臨んで居るから、貴婦人は交際が次第に疎くなる譯である、それであるから一日も早く宴會の改良を謀らなければいけない、宴會の改良が行はれると男女交際の道が餘程高尚になる、凡て男女交際の最も善く行はれるのは即ち宴會である、宴會が實に其中心となる、總ての交際の最も愉快なる所は此宴會にあるのであるから、其宴會を今迄の様なことにして、男女間の交際が到底立派に行く筈はない夫で私は此宴會を改良することを社會改良の第一の條件と致すのである、夫で今後は段々宴會を西洋風にするのが最も必要である、宴會は矢張テーブルを置いて西洋風の宴會を開くが善い、さうして料理は必ずしも西洋料理に限らぬ、日本料理で差支ない、お膳をテーブルの上に並べて差支ない、必ず低いお膳を平面に並べて食べる必要はない、さう云ふことをするよりも矢張お膳をテーブルの上に上げて西洋のやうにすれば話が出來て大變面白い、醜業婦抔は決して食卓に寄付けてはならぬ宴會の時に給仕人と話をすることは西洋では無禮として居る、ところが日本では給仕人と話すのが主なることになつて居る、給仕人は後からいろ／＼な食



物を持つて來たり、酒を酌いだりして周圍を廻つて居れば好い、紳士と貴婦人とは物を食べつゝ話をして居る、其間に高尙なる交際が行はれるのである、夫でさう云ふ工合にやつた結果はどうであるかといふに結果は大變善い、やつて見る所が誠に愉快に交際が出來る、西洋と少しも變らぬやうにやれる、唯何時迄も昔のやうにやると云ふことはいかぬ、絶えず進歩して行かねばならぬ、

## 服裝の改良

東京美術學校長　正木直彥

服裝の改良といふ事に就ては、近年大分世間で喧しく論ぜらるゝやうであるが、この服裝の改良と云ふ問題も、所謂女學生に適用すべきものと他は廣く世間一般に適用すべきものとの二つに分るゝので、その女學生に對する即ち女子が學校へ通ふ時代に於けるものは、彼の男學生の如く或種の制服を定むるは兎に角別問題として、近時唱導せらるゝが如き服裝の改良と云ふことに就ては、予は全然不贊成である、

凡そ物の改良と云ふことは自然淘汰の結果に出づるもので、服裝の改良も亦この原則を漏るゝものでは無い、左れば性急に一部の者が直ちに改良々々と大聲疾呼しても、中々さう行くものでは無い、如何しても自然淘汰の氣運を待つより外はあるまいと思ふのである、

一體物には總て調和といふことが大切である、この調和といふものが保たれずして、非常に横が廣いとか、又は竪が長過ぎるといふ風であるときは、縱んば吾人の惡感といふまでゝは無とも、一種忌むべく厭ふべきの感を惹起さしむるものであつて、決して快感などを與ふるものでは無い、

近時女子の間に行はるゝ海老茶袴であるが、あの袴も今は上下を通じて用ゐねばならぬかの樣に流行して居る、之も尙だ肩揚のある中は、その肩揚の縫

目があるから、その縫目より兩袖に至る部分と襟元より袴に至る部分と、而して下部は袴といふ樣になつて、大いに調和が保たれてゐるから見格好も良く且つ愛敬もあるが、

既に肩揚の取れたのが、之を着くるを見る時は、前から見ても左樣であるが、殊に背後より見た時は予は其不快さに堪へぬのである、何せなれば、その肩揚の縫目が取れて仕舞ふから、脊より兩袖に至る部分が漠然として少しも變化が無い、のみならず袴腰より上の部分は、それより以下の部分に比ぶれば縦の尺が詰つて横にのみ廣がつて居る、それ故に其不格好さ加減といふものは無い、彼の西洋の婦人服は、腰より以下が長いけれども、尚ほ肩の縫目が上つて居るのと、脊の兩脇に縫目のある等にて能く調和が保たれてゐるから、別に格好は惡くないが、肩揚の取れた和服に海老茶袴といふ扮裝ほど厭ふべきものは無い、故に予は之を見る毎に嘔吐を催さんばかりである、

左れど是また時の流行で、たとひ予と同意見のものがあつて彼是云つて見ても、中々容易に之を覆すと云ふことは難いので、自然淘汰を待つより外、人爲を以て如何ともする事は出來ないのである、而も是等の風が上流の社會に勢を逞うして居るのであるから、上の好む所下之に從ふとやら、斯くも不自然なる調和のなき不格好をして迄も時好を趁はねばならぬとは、サテモ流行の勢力と云ふものは恐ろしいものである、

然らば前述の如き不自然は、如何に之を調和すべきやと云ふに、予は從來の幅廣き女帶を用うるを以て適當であると答ふるに躊躇しない、最も東京の女子は西京の女子に較ぶれば、餘程衣服の着扱が上手である、西京邊の女子は、帶の上下ともに脊筋を眞直にする、けれども東京の女子は、帶より上の脊筋は眞直に通つて居る、けれどもそれより下は前を合せる時に、下前を緊く牽て合せるから、自然帶より下の脊筋は少しく右へ傾くので、恰も帶より下は裾

が擴がつて腰の部分が緊つて居て、朝顔の花瓣を倒に爲たやうで見格好良く、腰の部分は帶の廣いために、袴に反して脊中の部分を狹めるから、その邊の調和が誠に克く保たれるのである、殊に頭髮などは日本風の髷の方が照應が良い、併し處女時代は束髮類も可なるものである、

一體我國では男女に係はらず夢中になるのは時の流行である、例へば、女子の服裝として海老茶色の袴が流行し始めたとなると、學校用は別として、誰も彼も之を着けざれば時行に後るゝかのやうな感を爲して、之を新調して着誇るの風が盛んで、少しも自已に似付く似付かぬといふやうな事には頓着しない、左れば廂髮が流行するからと云つて、自分の面貌の如何をも問はずして濫りに之に傚ふものがある、之は途上屢々目睹する所で、中には隨分噴飯に堪へんのがある、之と同じく服裝も、各自の地位職業等の如何に由りても相違があるのであるが、先づ第一は自已の身體の格好より割出して往かねば調和を保つことは出來ないのである、如何に馬士にも衣裳と云ふとても、狼に衣といふ諺の如く、その大きさ計りではなくて其色合等が、自已の身體と釣合の取れない時は甚だ醜いものである、左れば、如何に嶄新なる時好に後れまいと焦心にもせよ能く自已の輪廓を描きて即ち面貌容色および身體の肥瘠等に應じて粧飾を施さなければ、折角の苦心も水泡に屬するのみならず却つて人の嗤笑を招くの因ともなるのである何んと戒愼すべきの事ではあるまいか、

而して服裝、別言すれば粧飾は頓て奢侈に趣くもので、奢侈に趣けば自然高價の物品を要するといふ事になるのである、元來孰れの國を問はず、女子は虛榮心に富んで居る。この虛榮心に驅られて粧飾を競ふの念を生ずる、この競爭の念は知らず／＼奢侈に誘くのである、例へば、一足の下駄の表を織るに一反の羽二重を費し、從て其鼻緒には繻珍とか蜀紅の錦をすげると云ふ風に贅澤になつて、爲に五十五圓を拂つたと云ふ奢侈に陷るものがある、裝飾は此

くまで奢侈を極めねばならぬものであらうか、五十餘圓あれば我國の生活程度では、優に中産の一ヶ月を支ふに足るのである、縱ひ中産一ヶ月の生計費を一足の履物のために犧牲とするも、尚ほ綽々として餘裕ある富豪にもせよ、國民が競うて奢侈に趨ると云ふことはやがて是亡國の兆として頗ぶる戒懼すべき事である、

固より裝飾は高價の物を要求するであらう、けれども高價の物でなければ裝飾にならないと云ふ道理も發見せられぬ、如何に高貴の物を着けたればとて前陳の如く自己と調和が保たれぬ時には、所謂闇夜の錦衣で一向に引立たぬ之に反して、例へば、羽二重の代りにキヤラコの足袋を穿かうとも、その足袋の白と鼻緒の色と出合ひ、且つ少し位雨に逢つても足袋の染らぬものを擇ぶと云ふやうに釣合を保つことに注意せねばならぬのである、

概して今の女子には色の配合または照應などの感念が薄い、故に前述の如く流行と云へば一も二となく之に雷同するのである、依つて斯の色の感念に就ては、學校に於て今日より以上の教育を授けねばならぬものと思ふのである、

昔時の女子は、別に特殊な是等敎育を受けたでも無いが、色の配合または照應などゝ云ふことに就ては中々眼識が高かつたので、例へば、衣服の地色が黒ッぽい時には、帶の色は白茶又は赤ッぽいものを締るとか、若しまた衣服が赤ッぽい時は、帶の地色は青竹または鶸色を擇ぶといふか如く、餘程今日よりは色の感念には富んで居たのである、是の故に今日の女子たるものは大いに斯趣味を解するやうに努めて貰ひたい、苟も之を解するやうになれば、一種の忌むべく厭ふべきものゝ流行を根絶すると同時に所謂優美なる服裝を得るに至ることゝ信ずる、左れば其改良は且らく自然の潮流に任せおきて、それより一歩手前の用意が肝腎である、

# 結納に就て

鳩山春子

前號に結婚の事に就て少しく述べましたから、此にはそれと關聯した結納のことをお話し致しませう申すまでもなく結納は双方より婚約を結んだ印に取遣をするのでありますが是まで日本の仕來りでは、男子より女子に贈りますもの丶方が澤山で、女子の方よりはホンのお返しをするに過ぎないと云ふ有樣でありますが、是は成るべく前號に申し述べました如く、矢張り之を平等にする方が宜からうと思ふのであります、啻に之を平等にするばかりではありません、從來は勿論今日も何ほ互ひに贈答する物を見まするに、一切無汰になるもの丶みでは有りませんけれども其多くは裝飾的に屬するものか、左なくば消耗品に屬するものばかりでありまして、この神聖なる結婚を永遠に紀念すると云ふやうな物は無いやうに見受けるのであります、



之に關して西洋では、その婚約の整ひました時には、その標識として寶石の類が入つた指環を贈答しいよ〳〵結婚の式を擧ぐる時には圓い指環の內面に互に自己の頭文字を彫りつけて贈答するのが例となつて居ります、而して此の後の指環は所謂循環環の端なきが如く偕老の契りを圓滿ならしめんとの意を寓するとともに、永くその神聖なる結婚を紀念するのであります、これは大いに倣ふべきことであると考へるのであります、

併し私しはその神聖なる結婚を紀念するには、是非とも指輪でなければならぬと申すのではありません何なりとも然るべき品物を撰んで紀念したいものだと思ふのであります、西洋と我國では生活の程度も違ひますから、誰も彼も寶石入や金の指輪などを贈答すると云ふことは、事情の許す方は構ひません、けれども左樣でない方は、それがために迷惑を感ずるやうな事がありましては、折角神聖なる結婚を瀆すのであります、

それ故に何と云つて一定しませんでも、舊來のやうな一時の裝飾的や消耗品に屬するものを廢めて、一も二もなく西洋化するのではありませんが、成るべくこの神聖を紀念するものに換へたならば、將來永く且つ朝夕に夫妻間に於ける直接間接の利益と云ふよりも、相互の融和緝睦に多大なる貢献をなすとであらうと考へて居るのであります、何うか指輪のやうな朝夕互ひに肌身を離さないものを擇びて結納となさるゝ事を望むのであります(文責在記者)

## 支那婦人觀

坂本箕山

支那の婦人の社會的位置は、表面上些の權力を有しないが、家族間に於ては著しく權力を有してゐる夫は外に在つて働いても妻は働かない、使丁にも女性を用ひず男子を用ひて居る、富家には女の使丁を置くも男子は之を使ふことが出來ない、炊事は富家にては厨夫あつて之をなし、貧家では男子これをなし、妻女は裁縫をなすに過ぎない、織物の產地にても男耕女織の狀が見らるゝ、尤も滿洲にては夫婦共稼ぎで、婦人の野に出でて働くのを見た、其他の婦人の職業は造花、刺繡、製靴などの外はない、

支那では女の兒が生れると帨(佩巾のこと)といふものを作つて被らす、二ケ月目に瓦磚を取つて握らし、其健全の發育を祝ふ、十年を經た後は、容易に外に出さぬ、出る時は其面を蔽ふ、夜間に出ることがあれば、必らず燭を執るのである、故に屋外にて婦人を見ることは少ない、家に入るも婦人室は別にあつて、其家の妻君でも會ふことは出來ない、餘程親しき間柄とならねば、妻君と言葉を交へることは難いのである、男子の客に女の出ることなく、假令來客なる男子が其家の婦人を見ても知らぬ振をして、外方を見なければならぬ、決して日本の如く細君の顏を見て、直に天氣の挨拶などして、話し掛けてはならぬのである、

從來支那婦人に行はれてゐる纏足は、中部支那の漢人の風習であるから、領外の廣東人又は滿洲人は之をなさぬ、滿洲婦人は高履を踏み、外八文字に歩いて居る、漢婦人の纏足は七八歳の頃から木綿で足を包み、之を纏脚布といふ、其包み方は足の先を固く巻きしめ、足を發育せぬやうに注意す、七八歳以上の婦人の外出せぬのは之が爲であらう、遠路を行くには必ず轎に乘る、室内の歩行にも僕婢に助けられて行く、纏足の外觀は鳶口形の尖頭を有し、靴は赤緑白にて彩られてある、喪中には灰白色の靴を穿くのである。

漢人の美人觀は康熙初年の人で、艶文學の泰斗と云はれた李笠翁といふ人の書いたものに、女子を相するものは、上には頭を看、下には脚を看よ』とある、脚の小いのを貴ぶの風は明朝以前より盛んであつたと見ゆ、一説には纏足は南唐より始まるとある周相國千金を擲て一麗人を購ふた、其名を抱小咀といふ、以て其脚の小さくて歩けない事が知らるゝであらう、而も支那にて婦人の足の小さいのは、蘭州と大同府だと云はれてある、此地方の婦人の足は小くして、長さ二寸だといふ、又燕の婦人より晉の婦人の方が足が柔かであるさうな、

此纏足の事たる自然を害ふ宜からぬ風習であるから、西太后は嚴禁せられた、故に近來餘程其風は改つては來たが、未だ〲多く纏足して居るのを見るのである、然れども漸次此風習は廢たるであらう、殊に近來は室内閉居の支那婦人が、外部に向つて活動し始めた樣で、天津、北京などでは、支那婦人の演説會など催され、大に矯風改善の氣を皷吹して居る、殊に慈善事業などに婦人が盡力する事となつた過日も北京で中國婦人會が江北飢饉救濟のため募金をした時などは、風雪甚しき時に、路頭に起立し慘狀の圖を賣り、同情心に訴へたのは勇ましい働きであつた、又一日天津に曲馬の藝を見るに、支那婦人二名は黒白の馬に跨り、砂を蹴て驅せ、馬背各種の藝を演じた、其活潑壯快は彼の歩くことさへ自由

ならぬ支那婦人の一面は、亦斯の如くであるかと感じたのである、且つ近時支那にては、女子敎育が漸く盛んになつて來た、北京にも四五の女學堂があり天津にも二三の女學堂があり、其他各地に設けられつゝある、日本婦人の敎師として、之が經營に任じ、敎授薫陶に努められ居る人も中々に多い其熱心勤勉の効果空しからず、支那女子の智識は次第に啓發進捗し、諸弊また漸次除去せられて居る、其步調の如きも、此等女學生は活潑となり、其姿勢も正格に改まりつゝある樣に見らるゝ、就中技藝、音樂、體操日本語等成績至つて宜しい樣である、



次に支那婦人の道德に就ては、孔子の敎訓にて多年涵養せられてあるので、孝道、夫婦道、朋友道、師弟道より三從四德の訓などは守ること甚だ堅い、此等の社會的秩序は定まつて居るので、家內に風波の起ることは至つて少ないのである、殊に節操の念厚く、從つて男女間の關係の如きも、餘り多く紊れて居らぬ樣に見ゆ其賣聲賣肉の徒輩に至つては、素より論外である、其良人が數人の妾を蓄ふる事に對しての妻女の態度は、日本婦人の如く強く良人を責め、又自ら苦痛を感ずる樣の事なきは、嫉妬を戒めることの社會的制裁の强いのと

一般の風習が蓄妾を惡視せず、寧ろ妾の多きを名譽とし、應對の際も貴下は何人の妻を有せりやと問ふことが交際上被問者に對して、敬意を表する所以となつて居り、妻なるものは單數のものでなく、複數のものであつて、制限的のものでなくして無制限的のものとせられてあるからであらう、故に一家内に數人の妾が居り、正妻と同棲し、よく相交り、更に風波が起らず、正妻を太太と云ひ、妾を伊太太と云つて、圓滿に家庭を作つて居る、之れ實に感ずべきであるか、不思議であるか、婦人の無氣力であるのか、何れにしても此風習は宜からぬ事であれば、支那の社會改良家は先づ此點を矯正し、婦人の節操を守る如く、男子も亦節操を守るやう、社會道德を改善せられたいものと、玆に希望を述べて置く、

序でながら玆に少しく出產の事を述べやう、姙婦は七八箇月位を經過すれば、例の炕の上に起居せしめず、必らず土間に床を造りて起居せしめるのが常である、丌は姙婦が上下して顚倒するの恐れがある故である、愈々分娩時に至ると、產婦の室を薄暗くして直に產婆二人を招きて之を取扱はしめ、家族なりとも產室には入ることを許さない、一人の產婆は背部より產婦の腰部を抱き、一人は正面より產婦の兩手を己れの肩に抱き占めさせて產ましむるのである、產兒は土製の容器に入れ、直に湯にて洗ふ、產兒の臍帶は、產婦の拇指の爪にて切斷し、切口には布片を燒きたる其灰を撒布し、紙に糊をつけて膏藥張のやうに四五日間貼用し置く、又產婦の健康體に復するのは一ヶ月目である、此出產時は別室に家族や親族のもの集り、吉凶如何を注意す、產婆が目出度分娩と告ぐるや、大に馳走をして祝ふ、殊に男子生れば桑弧蓬矢を取りて天地四方を射りて祝ふ、產婆の收入は現金にて受取り、中以下は約六十錢、中以上は二圓位とのことである、近來北京、天津には日本人の產婆が居れば、支那人の此等日本產婆を雇ふものも多いとのことである。

# 女子交際の第一義

農學士　星野天知

人たるものは文野に關はらず索居すべき性質のものでは無い、必らず群居を好むものである、既に群接を好むとすれば、從つて交際といふものが生じて來る、尤もその樣式は人智の進否に由つて異なるけれども、兩々三々相對するときは必らず其間に交際が行はるゝので、之を個人間の交際と稱するのである、その大いなるものは云ふまでも無く國家と國家との交際であつて、之を規定するには國際法と云ふものがある、併し其、廟堂の諸公等が截裁すべき事で、敎育家などの餘り深く立入るべきことでは無い、所謂これが大體に通じて居れば良いのである、左れば、後進を導きて其嚮ふべき所を知らしめると同時に、堅く子弟の腦裏に國家の基礎を築くを以つて任とする所の敎育家たるものは、その直接と間接とを問はず、刻下我國の個人間に於て行はるゝ所の交際の樣式に滿足を表するであらうか、恐らくは慊らぬであらうと思ふのである、倘し之に慊焉たらずとせば進んで之が改善を圖る等は敎育家の任務と云はねばならぬ、否、任務である、

予も亦聊か之に就ては衷心戚々たるものが尠くならぬので、既往十數年間頗ぶる首を惱ましつゝあるのであるが、男子と女子と云ふが如き異性間の交際、男子と男子、女子と女子と云ふやうに同性個人間に於けるものゝ中、女子と女子との同性間に行はるゝ交際の要義に於て一の浩歎すべき事實を發見したのである、即ち手蹟の粗笨なると書翰文の漫散なることの二つである、

この二者の廢殘は言語に絶えて居るのであるが、その前者すなはち手蹟の粗笨は、強ち現今の子女のみを咎むることは出來ないのである、何せなれば、吾文部省は今尙ほ習字の一科に限りては數年以前の規定を墨守せられて、一週僅に一時間課せらるゝのみで、餘り重きを置かれぬやうに考へる、のみなら

ず其僅少なる時間の約九分通りは、概ね楷書や行書のみで、終りの一分に於て草書擬や假名文字などを習はしむるのであるから、手蹟の美事に爲れやう筈がない、併し衆に卓れたものは格別、尋常一様の人に取つては無理からぬのである、

元來我國には古來より一種の女子書翰文字と文章とも云ふべきものがあつて、維新以前迄は謂ゆる寺子屋または家庭に於て之を敎へ來つたもので、その中には隨分見るべきものがあるのみでは無い、尙ほ現存して居るものは澤山ある、それらの手蹟と云ひ文章と云ひ實に美事なものである、之に反して、當時何所其所の學校の卒業生など云ふもの丶書翰を見れば、その拙劣は雲泥の相違をなして居る、

尤も現今の學校敎育は前にも述ぶるが如く、習字の時間の僅少なるに比して、他に修むべき學科が夥多であるから、その出來ないのは固より責むべきでは無い、これ當路者の一考を煩はすべき事として他日に讓り、兎に角これが應急の方法を講ずるのが必要である、

現今の如く時々、刻々に社會が推移して複雜となるに從て、交際も亦日に增して頻繁となるは、火を睹るより明らかなる事實である、この適切なる事實の傔介として相互交際の使命を全うするものは書翰である、而して書翰の彼方に達して先づ第一に人格の如何を想はしむるものは手蹟である、文章は寧ろ第二である、その手蹟が謂ゆる鹿角菜の行列とか又は金釘流といふ風であつたならば、頗ぶる人格の上に影響することが少なからぬのである、書を以つて姓名を記すに足ると云ふことは、男女に拘はらず昔日戰國時代の口吻であれば、移して之を今日の文明社會に適用することは出來ないのである、況して女子は男子と異なりて女子たるの特性を發揮すべき流麗なる文字を以つて書翰を認めて欲しい、如何にも佶倔なるものは文章の暢達を埋却するの虞があるから避けたい、否、除きたいものである、

乃で當時は之が必要に迫られ、その都度自から此

苦き事實に逢着する所より、縱んば上手でなくとも普通に之が出來なくては不自由である、不便である、愧づべきであると云ふことを反省自覺せし結果、彼方此方の習字の先生に就て學ぶものが日に月に殖て來たやうであるが、誠に欣ぶべき現象と云はねばならぬ、

右に就ては、予も亦十數年前に之が荒廢の甚しいのを慨嘆はして見たが、偖如何にして之が復興を圖るべきやと云ふに至つて頗ぶる惑ふたのである、而して數日熟考の極、先づ自から之を修め、厚く積んで而して後薄く徐々に之を施すに如かずと云ふことに想到したのである、素より自已は是より先多少文字の趣味を有して居たから、爾來彼所に學び此所に修め、或は遠く贄を京都の某書博士の門に執りて研鑽すること茲に數年、その間松方伯の如き大いに予が說を賛して紹介の勞を執らるゝあり、此の如くにして所有名門大家を推敲し、時に奥義秘傳を受くるに二百乃至三百金を慳しまなかつたのである、而も其奥義秘傳を受くるに方りては、諸家ともに誓約を爲さしむるのである、



左れば一たび其奧義秘傳と稱するものを受けたる者は、その料金を納めなければ決して傳授さるゝものでは無い、のみならずその傳授に數段の階級があ

る、その階級に由つて料金にも差等が附せられてあるのである、故に皆傳と云ふまでには、少なからぬ時日と學資とを要するので、中々容易の事ではない、

尤も專門の書家になるものは、固より其を以て身を立つるの具となすものなれば、多少の時日と資力とを費すべきは勿論である、けれども尋常の人が其樣に時日や資力を掛ける事は出來ないのである、出來得る限り僅少の時と金とで成功させねばならぬのである、

依つて予は苟も一たび誓約したものを破ると云ふことは人生の義でないことを知ると同時に、如何にして之が速達の法を講ずべきやと云ふことに心を潜むることが幾んど三星霜の餘に渉つた後、聊か自得する所があつた、因つて之を己れが知れる人々の子女等に試みた所が僅かに十八回にして成績を著はすことを得たのである、今尚ほ予が篋底に夫等女子の未だ予が法を授けざる以前と、已に授けたる以後との手蹟を藏して居るが、その進歩の度の速かなるには女子自身に驚くばかりである、のみならず予も亦滿足を表するのである、

爾來大方に向つて之を試むるに未だ曾て一回も過たぬのである、之は予が自負の捏造ではない、最もその人の性質の利鈍によりては必らず十八回の短期を以つて成績を擧ぐると云ふことは出來ない、けれども尚ほ之に重ぬること六回、合計二十四回の練習を經れば、餘程の惡筆にあらざる限りは尋常一樣の成績を擧ぐることは今日までの經驗に依つて斷言が出來るのである、之に就ての實例は多々あるが今は省略しておく、

予が此く短期の練習に依つて速達せしむると云ふても、敢て奇法とか又は妙術とか云ふものゝあるのでは無い、前陳の如く、予は書家の門に入りて秘傳口訣と稱するものを得たるの後、社會國家の爲には誓約の一部を公開するも敢て愆ちには非ざるべしと自信し、之を基礎となして、尚ほ彼と此とを取捨折

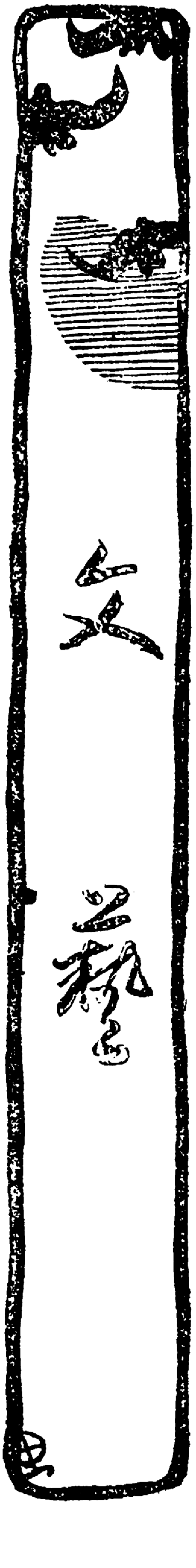
衷し或は脫體換骨して聊か得たのである、

　元來文字の心髓は禪學の視法と同じく、心を以つて傳ふべきもので、決して形を以つて得べきものではない、併し其は一通り出來た上の研究法である、先づ普通は第一筆法、第二筆法の應用、第三結體、第四聯絡、第五配行、第六配列、第七書翰法、第八はがき法、以上の八項を順次、一週間に一時間半乃至二時間づゝ二十四回の練習を積めば出來るのである、年齢は十五歳以上二十四五歳までの者が最も進步が早いのである、願くば世の女子たる者は貴賤を問はず等しく之が練習を望むのである、之は予が一家の私事のために希望するのでは無くして、女子の人格上、更に廣い意味に於て云へば、國家の體面上之を修むべきを勸告するのである、

　殊に日本の假名文字は日本特有のものであつて、決して支那の文字では無い、而して克く我國女子の性格と相竢つて融合美化されてあるのである、西人某は曾て云へるやう、日本人は技藝の一として卑しむとも、寧ろ餘り重きを置かざる所の日本の假名文字は實に美術の絕頂であると讃歎せし如く、進んでは之を美術の絕頂に達せしめんことを熱望して居るのである、其は將來の事に屬するのであるが、世の諺にも書すなはち文字の巧拙は克く其人の性格を彰はすと云へば、强ち巧妙でなくとも、普通尋常には書かれんことを切望して止まんのである、

## 薯料理の講習

福島縣二本松町林末子（五十七）は、今より十三年前馬鈴薯を原料に用ひて、飯菓子醬油味噌酒等種々の飲食物を拵へ出す事を工風し、七年前より鄕里を初め、宮城岩手秋田諸縣下及び其他各地の婦人會を廻り、右の新案料理法を口傳し居れるが、今其製法の一例を擧げんに、假りに薯飯を拵へんとせば、先づ生薯を細かに截り、薯の本質を失ふ程に、水中に、浸け置き、再び之を能く乾かしたる上、原料に加へて炊く可し、又菓子類ならば薯をくだ〳〵に煮て餡下地となし、前同樣薯の氣を失ふ程、水中に浸けたる後、菓子の原料を加へ燒く共、蒸す共お好次第に鹽梅し得るといふ風にて、製法も至極面白く、風味も結構なれば、此程愛國婦人會福島支部長平岡夏子外數氏は、末子の歸縣を幸ひ、總員數約六十名の講習會を福島公會堂に開き、三日間末子の口傳を聞きたりといふ、




# 雁のこゑ〳〵

侯爵　鍋島直大

秋眺望

谷水のすめるがごとき青ぞらを
　なきゆく雁のこゑのさやけさ

庭秋草

七草のはなさく庭に出て見れば
　かぜひやゝかになりにける哉

聞雁

暁のねざめのどかにきこゆなり
　のきはの山を越ゆるかりがね

山家秋雨

草も木もあめふるごとに色づきて
　わが山ざとのあきぞたのしき

秋山路

けはしきも忘れてのぼる山みちは
　先にもみぢのあればなりけり

庭上月

雨の音のたえたる窓を明けてみれば
　つきになりたる庭のあさぢふ

深夜月

秋の夜のふけゆくまゝに雲はれて
　月はます〳〵てり増りけり

林中月

松すぎのしげるはやしはもる月の
　ひかり一しほさやけかりけり

月明らかなる夜友來り

ともし火は光りなきまでてる月に
浮れいでゝや君は來つらん

雨中虫

なく虫の聲たえ〳〵にきこゆなり
雨夜ふけたる庭のくさむら

# 寫眞術實驗談

井伊直方

## 定着液

現像後使用すべき定着液は酸性ならざるべからず酸性定着液の特色は、膜面に存する總ての有害物を除去し、兼て又膜をしめかたむるため、水洗中剝膜するの憂なし、乾燥又極めて速なり、故に乾燥のむらを生ずる事なく、虫類又は塵埃の附着の跡を殘す等の障害なく、原板を安全且つ美的に仕上ることを得るの利益あり、之加酸性定着液を永く空氣中に放置するも黃色を呈せず、反覆其使用に耐へ經濟上又利益なしとせず、其處法を擧れば左の如し

| | | |
|---|---|---|
| 甲 | 水 | 三〇〇、〇〇センチ |
| | 氷醋酸 | 二〇、六〇センチ |
| | 無水亞硫酸曹達 | 四三、二六グラム |
| | 粉末明礬 | |
| 乙 | 水 | 二〇〇〇、〇〇センチ |
| | 灰ボー | 五〇〇、〇〇センチ |

右甲乙二液を混合す、

氷醋酸に代ゆるに異性重亞硫酸加里を用ふるも可也、この場合には左の處法に由るべし

| | |
|---|---|
| 水 | 六五〇、センチ |
| 灰ボー | 一六〇、グラム |
| 異性重亞硫酸加里 | 二〇、グラム |
| 明礬(數時間經過後加ふべし) | 三、グラム |

## 補力及減力法

原板の補力及減力は極めて必要のものにして、寫眞術上不可離至大の關係を有す、何となれば我々素人寫眞家の撮影する所の物體は千差萬別、殆ん

ど無限の範圍に渡り、從つて其光線も又一樣ならず故に數百の原板を作る內には、或は濃きに過ぎたる板或は淡きに失したる板を生ずることなしとせず、若し夫れ等不完全の板を直ちに廢物として放棄するは無益なると同時に又遺憾なきにあらず、此時に當り濃きものは之を減力し淡きものは之を補力し以て佳良なる原板を得ること最必要なりとす、加之或塲合には補力を唯一の方法として撮影現象をなし以て完全なる原板を得ることなり、例之極めて古き褪色の甚しき寫眞を複寫する塲合の如き必ず補力法を用ひざれば到底滿足なる寫眞は得難きものなり、今左に其概略を述べんとす、

補力に二法あり、第一法は陽明部を比較的强く補力し、第二法は全體を一樣に補力す、其處方左の如し。

第一法

| | | |
|---|---|---|
| 甲 | 水 | 一〇〇、センチ |
| | 昇汞 | 二、グラム |
| | 臭素加里 | 二、グラム |
| 乙 | 水 | 一〇〇、センチ |
| | 亞硫酸曹達 | 一〇、グラム |



第二法

| | | |
|---|---|---|
| 甲 | 蒸溜水 | 一〇〇、センチ |
| | 消酸ウラニユーム | 一、グラム |
| 乙 | 蒸溜水 | 一〇〇、センチ |
| | 赤血鹽 | 一、グラム |

第一、第二共に甲液は漂白劑にして乙液は還元劑なり、故に補力せんとする板を十分水に浸し、膜面の濕りたる後甲液を以て漂白し、所望の濃度に至らばよく水洗し、後乙液を以て還元し流水にて能く洗滌すべし、若し未だ補力の足らざる時は更に繰返し同一の方法に由り補力すべし、然らは極めて淡き板と雖、畵像の現はれ居る以上は、所望の濃度に補力する事を得べし、

減力にも又二法あり、第一法は陽明部を比較的强く減力し、第二法は全體を一樣に減力す、其處方左

の如し。

第一法

| | |
|---|---|
| 水 | 五〇〇、センチ |
| 過硫酸アンモニア | 一〇、グラム |
| 強硫酸 | 五、滴 |

第二法

| | |
|---|---|
| 赤血鹽一割液 | 一〇、乃至五、センチ |
| 灰ポー四倍液 | 一〇、センチ |

第二法は全體を減力するを以てかぶりを除くため用ゆる事を得、此場合現像定着後直に行ふなれば灰ポーを要せず、單に赤血鹽の一割液に浸せば十分かぶりを除去する事を得るなり、

然れども、減力法は補力法に比し、其取扱極めて六ケ敷や、もすれば畫面の主要なる半調色の部分迄も減殺し、爲に却て趣味を沒却するの恐あり、故に減力液は可成稀薄なるものを用ゐ、徐々に減力するを最も安全なりとす、

右の外補力減力の中間にわりて寧ろ補力ともいふべき陰影部のみを多く現出する法あり、其處方左の如し。

| | |
|---|---|
| 水 | 一二〇、〇センチ |
| 重クローム酸加里 | 一、〇グラム |
| 明礬 | 四、五グラム |
| 鹽酸 | 四、〇センチ |

右液を使用する時は重クローム酸のため黄色を呈すれども酸性鹽類に浸す時は忽に除去せらるべし。

先に原板のかぶりを驅除することに付き一言したれども、尚ほ少しく此點に付き二三の注意を述べんとす。

凡そ原板には影の深淺に從ひ深き處は透明に夫より次第に色づき陽明部は全く黒色となるものなり、此の如く蔭の中に濃度の階級ありて初めて趣味を加ふ此階級を『グラデーション』と稱す、此グラデーションョン無き板は殆んど印畫として視るの價値なく沒趣味の寫眞と云はざるべからず、故に畫像中透明たる

べき最も暗き部分に灰色を帶ぶる時は即ちかぶりたる板にして其最も甚しきものは、全部黑色となり、殆んど畫像を見分け難きものあり、此かぶりを生ずる原因を探究するに寫度の誤の外、多くは左の諸點に歸因するが如し。

一、暗箱の不完全なるため光線を引く事
一、取枠殊に製枠の如き合せ目より光線を引く事、
一、引蓋より光線を引く事、
一、鏡玉の胴金の塗り剝離し爲に光線反射する事
一、鏡玉に塵埃附着する事
一、鏡玉に溫氣を帶びたる時
一、速直玉の如き絞りの工合より生ずる事
一、被布を用ゐずして取枠の引ぶたを引きたる時、
一、鏡玉に光線の直射する時
一、乾板を取枠に入るゝ際光線に感じたる事



一、乾板を木製の取枠中に一週間(冬季乾燥の時)又は二三日(夏季)以上入れ置きたる時
一、アルコール等の蒸發に合ふ時(例之調製間なき取枠を使用せる場合)

右列擧したるものを約言せば乾板が光線に感ずるか、又は濕氣を受けたる時かぶりを生ずるものといふべし、此かぶりを除くには、先に述べたるファーマー氏の減力法即過硫酸アンモニアを以てするの外なし、然れども尚ほ此に藥液に由りかぶりを生ずる事あり、例之アルカリー物を極度以上增加するか又は現像液が攝氏二十五度以上の溫度に昇る時はかぶりを生ずるが如し、但しハイドロキノン、アイコノゲンは、其例外とす)而して此藥かぶりは種々の色を呈し沒食酸の如き黃色を帶ぶ、之を除去するの法は明礬の飽和液百センチの中に鹽酸三センチを加へ、其液中に浸すにあり、若し尚ほ色の去らざる場合には左の液中に五分間浸す時は必ず除去する事を得るなり。

| | |
|---|---|
| 水 | 六〇〇、センチ |
| 硫酸鐵 | 九〇、グレイン |
| 枸櫞酸 | 三〇、グレイン |
| 明礬 | 三〇、グレイン |

右の外銀のかぶりと稱するものあり、之は乾板の裡面より見て白くなりをる塲合を云ひ、永く現像したる時起るものにして銀の細分子なる故何等の障害なきも、外見上醜きを以て、之を除かんとせば、普通の赤血鹽減力液を二三倍に稀釋して之に浸すべし

### 原板膜を剝離する法

乾板はガラスにして極めて破損し易きものなるを以て、或は誤て之を損傷する事なしとせず、此塲合若し膜の破れざる限りは剝離法を行ひ膜だけ他のガラスに之を轉寫する事を得ば、大切の原板も永く保存せられ、得易からざる傑作も棄つるの遺憾なく大なる利益を得べく、又原板をセルムに代用せんとする塲合の如き大なる便利を感ずる事少からず、今左に其方法の概略述べんとす、



剝離の法に二法あり、一は膜を厚くしヒルムの如くなすもの、一は他のガラスに轉寫するもの之れなり、後者は二倍の大きさまでに引伸すことを得れども、塲合には更に補力を要す、二者共に膜を剝離す

る法と同一なれども只前者の異る點は膜を離す前、『ホーマリン』の一割液に浸し『ホーマリン』の臭氣去るを度とし、引上げ乾燥後左の處法に由れる『ゼラチン液』を熱き内膜面に流布し可成水平に板を保て回轉しながらむらなき樣乾燥すべし、而して後剝離法を行ひ膜をはがし、他のガラス板に張り置かば乾燥後自然に其ガラス面より離れヒルムの如くなるべし、右ゼラチン液の調合は正確を要す、其處法左の如し。

| | |
|---|---|
| 水 | 四五〇、センチ |
| グリスリン | 一五、乃至二〇、センチ |
| 氷醋酸 | 五センチ |
| ゼラチン | 一〇〇、グラム |

此液を作り三十分間放置し後湯煎になし冷へざる内膜上に塗布すべし

膜を剝離するには左の二液を作る事を要す

| | | |
|---|---|---|
| 甲 | 水 | 二〇〇、センチ |
| | 苛性曹達 | 三、乃至五、グラム |
| | ホーマリン | 四、センチ |
| 乙 | 水 | 三〇〇、センチ |
| | 鹽酸 | 一〇、乃至五、センチ |

先づ剝がさんと欲する原板を甲液に五分間浸し、後水洗し乙液に入るゝ時は五分間計りにして膜は浮上るを以て、其一端を持て徐々と膜を卷剝がすべし而して全く離れ終りたれば他にバフトに移し、水洗すべし、此時膜を引伸ばさゞる時は直にホーマリンを水中に加へ以て其膜をしめかたむるを要す、若しホーマリンを加へざれば膜は次第に膨脹し二倍大まで伸長せらるべし、而して張らんとする他のガラス板は能く磨きたる後ゴム半グラムをベンヂン二百倍液に溶かし、其のガラス面に引き、水中にて剝がしたる膜をはりつけ後布を當て其上をルーラーにて平にこすり十分密着したる後自然に乾燥すべし、此法たる甚だ簡單なれども、熟練せざれば失錯を招き易く、やゝもすれば膜を切斷するの恐あり極めて注意を要す、

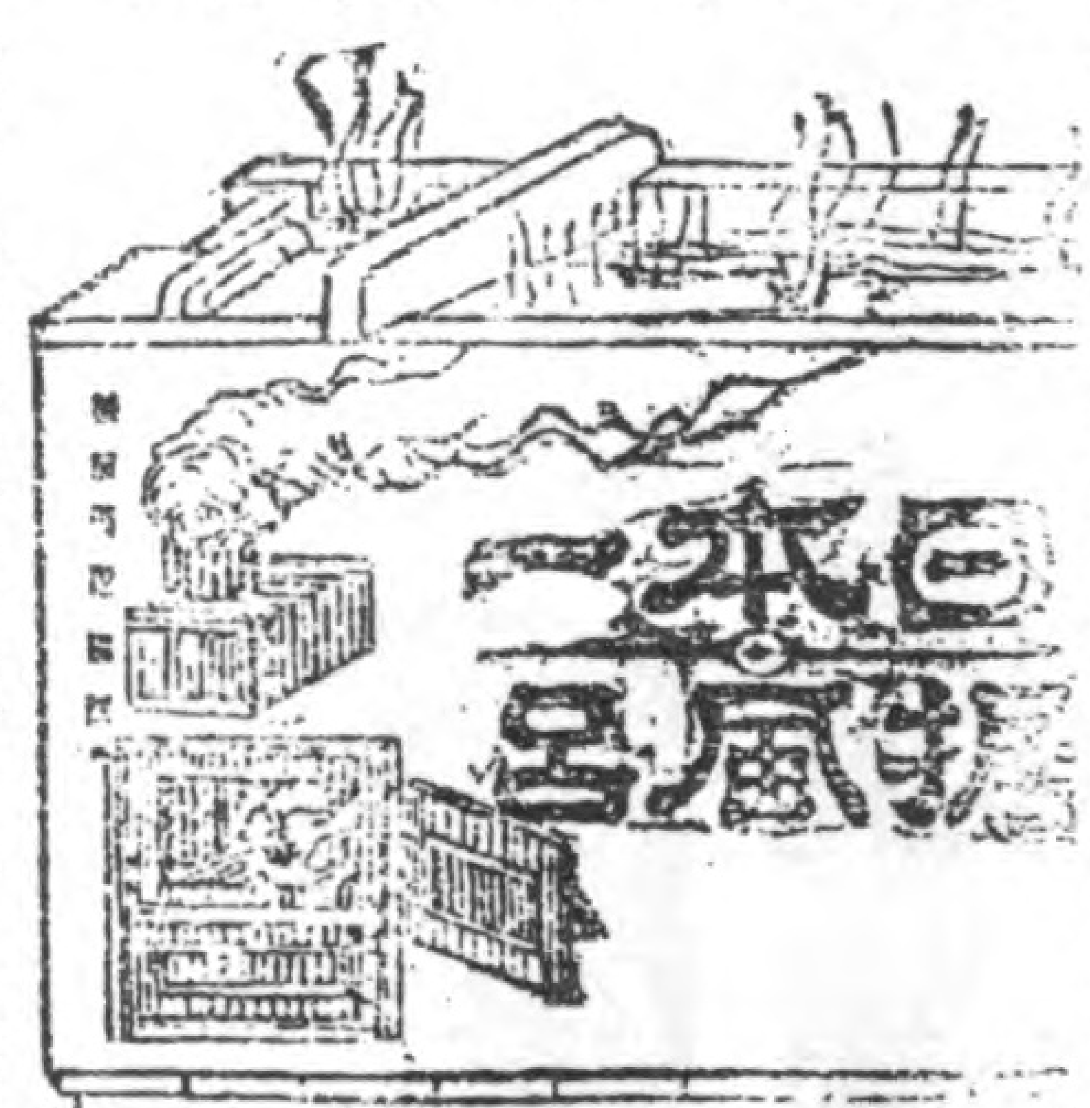


妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀　河村愛子

# 陸海軍御用

實用輕便鐵製傘置臺にして後方捻留に仕込あれば取はづし自在なり

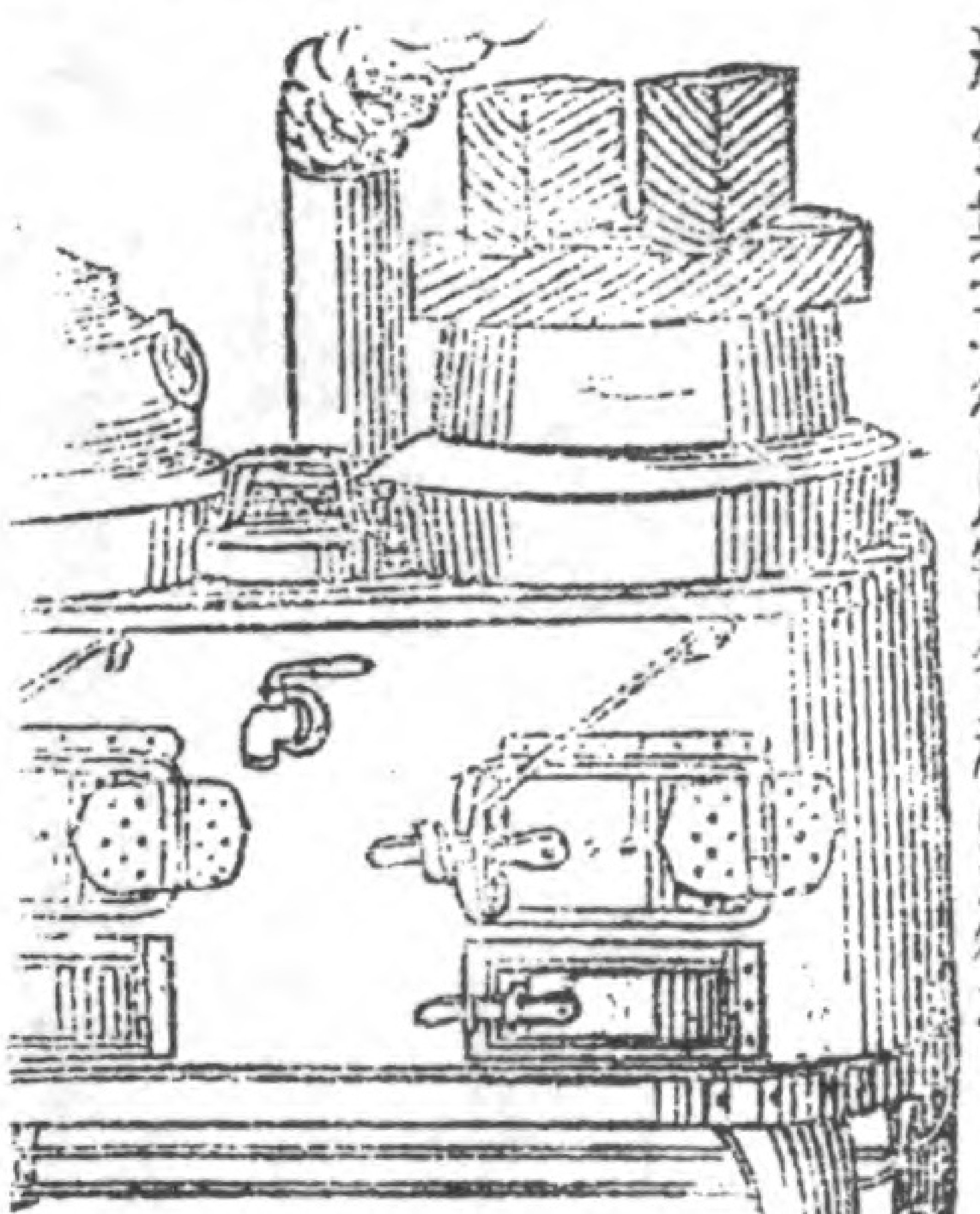


總檜木製並ニ人入銅製改良新石炭燃早沸釜付上り湯付種々其他何人入にても出來合之有り又桶風呂もわり改良早沸釜に改ても廉價に販賣仕候



定價一組　一圓卅錢

總銅製五德用竈各種出來有



（定價表郵券二錢送れ送附す）

元祖製造販賣所　東京日本橋區通油町　石川商店　電話浪花（一四一六番）

東京高等師範學校教授 文學士 松本孝次郎著

# 家庭に於ける兒童教育

總クロース 菊版二百頁 定價五拾五錢 郵稅八錢

本書は**兒童教育専攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學説**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を説述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次

◉第一家庭に於ける德育 ◉第二家庭に於て起り易き弊害 ◉第三兒童の賞罰 ◉第四遊戯の價値 ◉第五兒童文學 ◉第六兒童と自立心 ◉第七感情教育 ◉第八家庭と園藝 ◉第九兒童と言語 ◉第十兒童と圖書 ◉第十一青年教育の注意 ◉第十二男女の兒童 ◉第十三小兒室の構造及設備

**發行所** 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社**

關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**

# 竹柏漫吟

佐々木信綱

高き樹にひぐらし鳴きて山かげの
　小道をぐらきりんどうの花

わが世うれし人の世たのしわが歌を
　知る人君のひとり世にあり

古里の清水かれたりわれも老いぬ
　昔のかげをいづこにか見む

狂へりとのゝしれよ人笑へ人
　夫すてしわれ子もすてしわれ

しばしだにながらふまじく思ふ世を
　月のひかりの胸にやさしき

學びやの昔の門の柳かげ
　わが子友の子むれてあそべる

よき人が人すませたる寮の庭
　芙蓉艶なり雨にしをれて

池のほとりそゞろ心地の夕やみを
　ほのかにかほる白き藻の花

白がねの鬚かきなでゝ家あるじ
　ながむる庭の白萩の花

苫舟の夕げの烟水に折れて
　百舌がねさむき岸の竹むら

# 流轉

大塚楠緒子

海にきのふの風ありや空にきのふの雲ありや
水は流れてゆく迹遠く花は萎れて息をやめぬ
銀箔剝げて落ち散れる蝶の片羽を拾ひ上げ
ことし歎きと知りそめし生れて若き詩人が
始めて眉を動かさば杜鵑青葉に答へむか
一朝の富のうたかたと消ゆる夕べを敎へ見よ
齡はすべて埋もれむそれ果敢なさの五十年
赤かるか否灰のいろ若かるか否老の聲
熱なりや否氷なり光なりいな曇なり

海に昨日の風を探り空に昨日の雲を何時か見むと』

## 折にふれて

阿部優子

つみとりて捨つる道こそなかりけれ
　はらへどつもる塵の世のうさ
さま〳〵の人の心をしをりにて
　からき世わたる道をしらばや
神のいます世にもあらねばおのづから
　ひとのまことはしらるべきかな
たどるべき道はしりつゝ子のやみに
　まよふも親のこゝろなるらむ
人みなのこゝろのこまにむちうちて
　すゝみゆく世におくれざらなむ

## 詩歌上の植物

竹内蘆笛

かう言ふやうな題目は、甚だ不穩當であるにちがひないと、自分もひそかに思ふけれど、日本在來の詩歌なるものが、何もかも束縛して居つた性質からして、自分はかういふ題目を捕へたのである、尤も現今の新體詩人や、新派歌人等が、盛んに各種の自然界に配合して、新しい動植物を歌うて居るのも、無論其の歌詞、歌調が自由であるからだらうと思ふ、實に今迄の日本の和歌、即ち舊派調の和歌は、格調を和歌の生命として居つたので、自から或種の植物のみ歌はれ來たのも無理はないのである、

が、何れにせよ、歌は自然の聲である、而してもしも折にふれ、この高潔なる自然景の、其或物に觸れた時、高潔なる思想の生じて、心ある歌の胸に湧き出づるは、又必然の事で、而も斯る時吾人の思想上に變化を――所謂詩趣的觀念を與へるのは、殊に

植物の賜物を以て著しいと思ふ。
夫は、譬へ動物を唱ふにせよ、舊派の和歌の常として、大抵植物が添へてある——鴫、雁、松虫さては小鹿といふやうに、これ皆舊派和歌にとつては、詩材の最良たるものではあらうが、前言ふ通りで、川添柳とか、薄とか蘆とか又は紅葉とか青草とか必ず植物が引合ひに出される、つまり植物は動物より自然界をたすけるし、且又日本在來の詩歌では、特に動物なら動物、岩石なら岩石と云ふやうに解剖的とか主觀的とか、其の他にも特殊の思想格が少く、大概觀察的の叙景詩か、さもなくば單調の叙情詩に限られて居たやうであつた、又その上初學者に困難であつたには相違ないと思ふ、つまり植物には氣候風土に依りて相違があり、生態發育の關係等も亦人目を引くに足り、且つこれに依つて境遇の標準が取り易いし、從つて其特徴も正しかつたから、詠者には最も都合のよいのであらうと思ふ、一體、和歌と云ふものは、吾人の詩的感情を三十一文字の中に綴つたもので、格と云ひ、調と云ふことは、殊に舊派の歌の方で喧しい、『春を惜みの花や散るらむ』とか『朝日この影うら〳〵と浦安の』といふやう、調のためには想にも文字にも全く顧みないで（記者曰く、想を顧みずして出來る歌ありとも覺えず、而して調のわしきもの亦歌にはあらず、一種の短文なり現時の新派と稱する歌の多くは、自らも解けぬ謎の變調短文とも云ふべきもの也）遂には想があまり輕くなつて來たので漢字に紛らはしい、水仙とか、鳳仙花とか、又は銀杏樹のやうな植物は、又あまり用ゐられなかつたやうである。

つまり本邦の和歌も是迄に三つの時代を經過して來た、即ち彼の萬葉集の顯はれた王朝時代、それから次いで古今集、新古今集等、夫等に伴うた勅選歌集の顯はれた平安朝時代、下つて香川桂園派の世を風靡した大江戸時代と、細別すれば限りがありませんが、自分は玆でこの三つに大別して見ると、現今の舊派和歌は多く其流を、古今集の邊から汲んで居

る、故に其の軟弱で單調な欠點のあることも思はなければならない、萬葉はそこに行くと全く重味があつた、勿論思想も雄大で、手答へがある、現今の新派の和歌や新體詩の如き、皆、範を萬葉に取る（記者曰く、而して遂せざること獨萬里なれど）のもそれからなのであります。

つまり、古今集時代の歌中で、最も盛んに用ゐられた植物は、春が櫻で、秋が紅葉、花と云へば櫻か梅の他にはないものだと思つて居たらしい、（記者曰まさか）これは非常な謬見であるだらうと思ふ、無論其他にも山吹とか唐松とか、乃至萩、桔梗、卯の花と云ふやうに僅少な植物が常に一定の地勢、氣象の法則にあてはめられて居つたので、詩歌上に於て、植物はまるで牢屋にでも禁錮されたやう、いやはや情ない有樣に居つた、であるから自己の思想を其の植物なり、動物なりに移して、比喩的或は諷刺的に述べるやうな、さういふ大文字の和歌が少なかつたのも、實際或物のため支配されて居たからであらうと思ふ。

この擬人的の詩歌の如き、近來新派の和歌等に屢々見えるが、外國などでは最も勢力のあるもので、ゲーテの公孫樹の賦――これはつい先頃の雜誌で見て覺えて居るが、一寸面白い樣である、つまり銀杏の葉の先端が二つに裂けたのを心として、愛情の一致に譬へたものである。

公孫樹の如き、日本の和歌では今迄類のなかつたのであるが、凡て何植物でも、一寸した特長を捕へて、これを擬人的詩想で顯はすのは、この日本の短歌等で最も適して居ると思ふ。

花は植物の生態上欠ぐべからざるものであるが、それと同時に花は詩歌上に於ても亦重要なる位置に居るものである。

夫れ故花の色彩等に依つても、白色は清淨潔白を意味し、赤色は眞心を現はし、綠色は清涼又は希望、黄色は老年或は熱心、黒色は惡心を代表し、又悲に用ゆる等、色その者の性質以外にも、擬人的詩

歌は用ひられて居る、これは近頃の新派和歌に見受けられて居るやうである。

前にも云ふ通り日本在來の和歌では、其植物が甚だ制限されて居つた、既に支那の如きでさへ詩經を始めとして、花暦百詠、詠物詩選と云ふやうに、花木に就いての形容風致等が詳しく研究せられてあつた、然るに我國では、平安朝時代以後、詠歌の道は全く公卿の手に渡つて、その指南役の如きも、世々世襲の風習があつたがため、其道に久しう從事した人の外は、研究する事も出來なかつたのである。

しかし自分は、江湖の作歌諸君に、何でも新しい植物を唱へと云ふのではない、殊に初心家が新に馳せ奇を衒ふて作つた作物には、其のあまりに無頓着なために、吾人は困みの増すのみか、時には滑稽に陥つたものさへ往々見受けることがある、

これ等は確かに注意すべき點であると思ふ、唯吾人の日常に觸れて居るもので、詩化されないものがいくらもある、かういふのこそ眞に諸君の詠吟を望んで居るのであります、

まだ云ふことはいくらもあるが、作歌上の學說も又改めてお話したいと思つて居る。

## いか釣

石榑千亦

日は西に落ちて迫戸となる惠山の岬の燒山の頂のみ光りしに、それさへ漸々に薄うなりて、雲か霞か紫だちたる中につゝまれはてし、こゝ下風呂の夏の夕、

むらさきの雲につゝまれて波の上に
惠山の岬はまくらつくらむ

北の海の名だゝる大潮の潮路をよけて、はるかあなたに煙たてゝ走りし船は、今や金華山の沖わたりに、檣の上、室の上と、燈火つくるに忙はしからむ磯ちかくこなたを下りし船は、辨天島のわたりより迫戸を橫ぎりて函館に入り、小蒸汽に迎へられて、

海山のけしきある室に打くつろぎ、夕餐したゝむるものもやあらむ、

北に行くこと五里にして大間、南にゆくこと三里にして大畑、こなたかなたの野路にむつれ遊びし蝶の、今はなめらかなる芝生、所せきまでに咲にはへる草花の中に、露のやどりをもとむらむ、夜の王はやう〳〵薄きよりはじめて、厚き〳〵黒きふすまをひきめぐらし、わづかにそれかと打たどらるゝやうに、山また山の眠につくさま靜かなり、たゞ海のみはほの白う見渡されて、夜も休まず岸によする波の音、されど今宵はいとしづかに眠たげなり、さるにても何のひゞき、俄に一時におこりて身をつくよ、

一間、一間半、三間とはあらぬ小舟に、二人のり三人のれるが幾十幾百といはず、亂れいづるいかつりの舟、冬のはじめつかた、木枯の風に吹ちらさるゝ木の葉もかくやとぞおもはるゝまで、その櫓拍子、それにのれる海士が呼聲いさましく岩につきたる廣布と共に、打ゆり打あげ、打おろす波間を、竪にたつかと見ゆるまで打ゆられつゝ、一人が立ちて櫓をくれば、一人がゐて早く釣糸などとゝのへつゝゆく、まことに疊の上にあるが如く、潮も波もしらぬさまなり、

水鳥の波に羽うつうな原を
をさなはらから小舟競漕ぐ

大きなる岩尖れる岩など岸より遠く連りいでたる、聳えたてる、その間毎に、あるは二つ三つ、あるは十二十と並びゆくかげ薄黒う、遂に〳〵櫓も見えずなりて、舟さへ豆のやうになりて、彼の奥にくれゆくは、なほ後より後よりつゞけり、

短かく眞直なる針逆しまに並べて、栗の中くりたるやうなる釣具に、おもりつけて餌もなきを幾つとなく投入るれば、またゝくひまに幸の山をなすとか舟のかたち見えずなりて、いづこ[illegible]消え失せぬるよと行方をまもりをれば、一つともり二つともりむら〳〵とゝもりて忽ちに波をやく漁火の影、

天と水と一つにくれし中空に
動ける星やあまのいさり火

二百つれたるもあらん、五百つれたるもあらん、七百つれたるもあらん、あるはまだつれざるもあらん、つれたる早きか、つれざる遅きか、ともし火のかげ動きてこなたより來るあり、なほかなたにたゞよふあり、やう〳〵に動き〳〵て、出づる時にことならぬいさましきよび聲、櫓の音、一段〳〵と近よるけはひ、遂には里をゆすり山をも動かす、

さちや多きさちやすくなき波をやきし
かたみにのこる漁火のかげ



磯に立ちてまてる人は走りて家につぐ、提灯ともして、妻もゆく、子もゆく、父もゆく、母も、物もふと聲高にのれど音もなし

さち舟待つと濱にゆきけむ

山なせる烏賊舟の中に名ある脊子をこよひもまつと濱にたもとふ

かへりくる漁火五つ沖にのこる漁火七つ脊子かふねいづれ

陸なりし人に打まかせおきて、釣人水手は手拭肩に、いそぎ山に湧ける温泉あびにゆくなり、そのなまぐさき敵にも温泉はたやすく打勝ちて、幾百千の

人をあらひきよめて、いつも〳〵も新らしきが如く、湯舟はもとの湯舟にて湧出づる音宛ら凱歌の如し、

　幸ふねはうるはし妻にまかせおきて
　　岡のいで湯をあみにゆくかな

いくつ釣りぬ〳〵といかつりの
　　さちほこりあひぬ夜半のいで湯に

たぎちいづる出湯の山のいづこより
　　つめたき清き水がわくらむ

山なせる烏賊桶に入れて、とり〴〵におひもてゆく、こと〴〵くおひもてゆけば、直ちに丸く圍みて腹をさき足をさきて、家のまはりといはず、濱ばたといはず、柱をたて繩を幾重にもひきたるにかけつらね恰も白き壁の塀など築きたらむが如く、忽ちに作りなす烏賊の壘、仇がよすらむ闇となりし海に對ひて夜目にもそれとしるし、

　いかつりになせばゆかしていかほしに
　　われはいとなくてあふ由もなし

いかほしの母を助けて文つかひに
　　たのみなれたる子らのより來ぬ

## 松しま

下田歌子

今宵しもこゝにやどりて思ふこと
　　みちたる月のかけを見しかな

照る月に影をひたして松島や
　　をしまの磯は波もさわがす

帆ばしらの上にかゝりてあやふげに
　　見ゆる月さへおもしろきかな

鹽がまのみ垣のぼりて汗にあえし
　　ころも手寒くなれる夜半かな

棹させる程なき浦の見渡しも
　　月夜はとほしをちの鹽竈

松の色も波に黒みてまがきしま
　　いづれを影とわかれさりけり

夕げたく煙も消えて鹽がまの
　　浦の松はら月ふけにけり

からろおす音に交りて鹽がまの

まがきの島に水鷄なくなり

# 野の聲

高橋山風

## 夏の野

野べもまた濤たつ洋の
　はるかなる潮路に似たり
蒼空の影うごかして
　緑こき草葉風あり

○

君が手の導きなくば
　指しぬべき行方もわかず
あとつけし跡を慕へば
　ひとすぢに涙おはしや

○

時は今熱き盛りを
　いづれにぞ避けてゆくらむ
たゞひとり歩みなやみて
　ともすればわれこそ迷へ

○

嬉しきやうたふを聽けば
　望みある船つきの歌
さらば〳〵力めてゆかむ
　賴むべき蔭もなつ野と思はなくに

## 小窓の花

去歳わが撒きし朝がほの
　ことしも園に二葉して
朝な夕なに水うてば
　日にけに蔓も生い延びて
　　緑も濃くなりにけり
星のひかりの露さえて
　風には雲の色見ゆる
ゆふべの蕾けさの花
　咲きてはしぼみ萎みては
　　さくも新らしきのふけふ
ことにたらひし古里の
　古井のそばの古き家

この身世にふる歳々に
　眺むる花はさはなれど
　　花待つ頃のいつはあれど
おのがたぐひとうかれ來て
　月のひかりに飛ふ蝶の
影くろ〳〵と射す夕や
　破れし小窓の宵ごとに
　　あすの盛りぞしのばるゝ

---

## 朝顔

中山幸子

わが宿のまがきにさける朝がほに
　いとめづらしき花ぞありける
くれなゐにしろむらさきも皆咲て
　いとうるはしき朝がほのはな
ひとりのみめづるぞおしき朝顔を
　みやこの人に見せんとぞ思ふ



しづが家のあれしまがきも朝顔の
　さかりを見れば美くしきかな
日むきよき垣根にうゑし朝がほは
　よそよりさきに咲初めにけり
朝な〳〵咲くあさがほの花見むと
　をさな子さへも早くおきたり
しづが家の軒ばも見えず朝かほの
　咲きみだれたる垣にうもれて
朝な〳〵咲く朝がほのこゝろして
　われもつとめてとく起きにけり
いとつよき花にこそあれ朝がほは
　暑さいとはでさきまさりつゝ
朝な〳〵千代へむ竹のそでがきに
　しばしひもとく朝がほのはな
けふもまた露よりさきに起出でゝ
　さく朝がほのはなをまたなむ
朝がほの花をめでつゝあさな〳〵
　しのゝめごろに起出でにけり




# 星

## 上

渡邊霞亭

一月の中二十日までは留守で、殘る十日を樂しい面白い懷しい日にして居る可憐の女が居る、かれは平田丸の航海長をして、常に太西洋を往來して居る鎌田春久の妻芳子である

家は相摸の鎌倉で、新建ではあるけれども狹くは無い、殊に二階からは一面に西の野山を見晴らして、日當も極めて好い、一月の中樂しい面白い十日をさし引いて、後の二十日は多く此二階座敷で生計て居る、階下とは異つて何彼につけて不便ではあるけれども、芳子は何うしても此座敷より他へ移らぬのである、それは氣の欝し心の結ぼれた時、颯と障子を開いて西の天を見る、雲の動く處、日の動く處、涼しい風の吹く處は、即て良人が幾多の人の生命財産を載せて、帆檣靜に波を破る太西洋の方角であらうかと思ふと、直に心が晴れるからである、氣の欝屈が拭ふやうに爲るからである……實に芳子が二十日の間、慰安の料として居るのは、彼の雲、彼の夕日、彼の淸しい風である、此家に此見晴らしが無かつたら、芳子は狂人になつて居たかも知れぬ

彼女が幾多の不便を忍んで、此二階座敷を他へ移らうとせぬ、心の中は察するに餘りありだ家には一人の老婢を使つて居る、名はお松といつて、是が至極まめ〳〵しい

『御新造さまへ、旦那さまは何時お歸りでございますの』

と云て刺し掛けた足袋の裏を持つて來る

『もう五日寢たらばお歸りになるのよ』

『左樣でございますか、私旦那のお歸りを待ちかねますよ』旦那の話さへして居れば、芳子は何時も機嫌が好い、お松婆さんは疾から此呼吸を飲みこんで居るので、間さへあれば『旦那々々』と話しかける

『さう、何故だらうねえ、旦那がお歸りになつちや、忙しくつて不可ないだらう』

と笑ひ掛けた口元に何んとも云へぬ愛嬌がある、さうさ、年は二十一二でも有らうか、艶の好い髮を根の高い丸髷に結つて、緋鹿子の手柄を掛けて居る、其樣が極めて初々しい

『御新造さまや、又お話を聞きませうね、旦那樣のお越しになつて居る海の上のお話を……』

怒れる海、凄しき海、猛獸の如く吠ゆる暴き浪、萬兵の襲ふが如く動く恐ろしき浪、さしもの大陸を動かすやうに、漂はすやうに、打寄する太西洋の暴き恐ろしき浪、良人が航海してあらん間は、風ありても動くな、鏡のやうに靜なれ、疊を敷きたるやうに穩なれ、少くも我心のやうに優しく柔かなれと、芳子は念じて居らん時も無い、その心の念願を時々お松婆さんに話して聞せる、婆さん亦それを殊の外面白がる

『私はねえ、小さな薔薇の花に、なよ〳〵と音もなく吹く靜な風があるだらう、他人は彼を優しい者のやうに被仰るけれど、私それさへ胸を刺されるやうに思ふのよ』

から何故でございます』

『だつてお前、海の上では何んなに甚く吹いて居るかも知れやしないもの、だから私何時でも風に頼んで居るのよ、吹くのは好いけれども、春といふ字をお忘れでないつて、春の風は眞個に和かでいゝからね』

『御有理で居らつしやいますねえ』

『旦那も能く爾う被仰やるぢやないか、大きな島、大きな淺瀬、太西洋といふ處に起る霧、それはね黄色で煙のやうに降るんだつさ、どんな船夫でも機關手でも、その霧に脳まされないものは無いつてね』

『へゝえ、恐ろしい霧でございますね』

『それからまだ恐ろしいのがあるのよ、今云つた大きな島ね、大きな淺瀬ね、それが皆蟲の寄り集つて居るのだつて………恐しいぢやないか、太西洋を横斷するものは、何日も是に遣られるさうでね』

『へゝえ、蟲が………嫌でございますね』

『何故そんな事になるかといふとね、蟲の集つて居るとは知らないから、夫を避けやうと思つて、眞個の暗礁に乗り上げたりすることがあるさうだよ』

『恐ろしうございますことねえ』

『最も馴れたお方はそんな事も無いさうだけれど、夫でも何うかすると仕損じる事があるさうだよ、船に乗つて居る人はね、自分を信じねばならない職務だけれど、中には自信力の強くない人もある、それが一番危險たつてね、だから旦那も爾う云つてるね、信ずる事、我身を信ずる事、我身を信ずる方向に向つて、決して他を顧みないのが航海長の命だつて………』

それから芳子が良人に聞いた詞であるといつて、お松婆さんに話した中に、斯ういふ一語があつた、黄色

なる霧い西も東も北も南も、日も月も明に見えぬ深い霧、これが最も恐るべく、最も危險なる暗礁の多い處で起るのだ、航海長は最も遲い速力で、此間を行く、此時の神といふものは全く神のやうである、欲もなければ戀も無い、妻も無ければ家も無い、只我身自身が神になつて、一船の運命を守るのである、霧の間で聽く滊笛の音は、何うしても忘れることの出來ん物凄い響きである、それを思ふと何時でも身が硬うなる』

云ひ終つて芳子は西の障子をさらりと開けて

『私の良人は此恐ろしい太西洋を橫斷する航海長である、怒れる海、凄じき浪、どうか私の良人を守つてくれよ

あはれ、海の神よ、海の神よ、私の夫は今航海中であるに……』

## 中

海を世界とし、船を家として、海上幾千海里の太西洋を航行する航海夫の身には、始終『板一重下は地獄』の危險が伴ふて居る、今日は無事の報知を得ても、明日の命は圖れぬ、決して濃き霧、黃色き霧、恐るべき暗礁、淺瀨とも島とも見紛ふべき蟲の集合物に、絕えず安全を失はれて居るのであるから、何日も家を出づる時を、永別のつもりで居る、女房が一瞬の間も安心せず、良人のことばかり案じ暮らして居るのも强ち無理はないのである

處が鎌田春久の乘て居た平田丸は、荒き浪と蟲の集合物との爲めに誤られて、太西洋の眞只中で難破した夫は去年の十二月上旬の事であつた

此難破船の報は早くも東京朝日新聞に由て、可憐なる女房の眼に映じた、夫れは左の如き簡短な記事であ

つた
十一月二十一日英國倫敦を解纜したる平田丸は十二月四日無人島沖に於て難船したり、乘組員の多くは水底の藻屑となり、搭載貨物も、悉く沈沒したるが、乘組員中の三名のみ僅に波に押し流されて無人島近くに漂流し居たるを、獨國郵船の爲めに救ひ上げられたりといふ、されど姓名は確ならず、多分水夫ならんとの噂なり

これを讀み終りし時の女房の顏は、宛ら死人の如くに見えた、ぶる〳〵と慄ふ手から、讀みさした新聞は舞ひ落ちる、何日もは懷しく可憐く心强く思つて、切めてもの思ひ遣りに、眺めて居た西の天が、急に恨めしうなつて來る、雲や、天や、遠くに霞む山や、皆良人の命を奪つた惡人の如くに思はれる

然しまだ其處に一點の頼みの無いではない、どうして此三人の中の一人が、我良人であるやうにと天に祈つた、神に祈つた、少しも早く三人の姓名が知りたいとは思つたが、又幾分の恐れが無いでもない、もし三人の姓名が知れた曉に、その中の一人が良人で無かつた時は、今生きて居る我身が何んとなるであらう

翌日の新聞は、生存者三人の姓名を傳へたけれど、鎌田某の名は見當らぬ、もし見落しではあるまいかと思つて幾度と無く取調べて見たけれで良人の名前は出て居らん、すると多くの乘組員と共に海底の藻屑に爲つたのか、良人は海へ沈んだのか、常に噂に聞いて居た荒き浪、怒れる海、それが良人を殺したのか、われを天地の間に頼る處の無い心細い女にして除けたのか、考えて見ると恨めしい

『御新造さまや、旦那さまはもうお歸りでございませうかね』

お松はまだ理を知らんので、例のやうに女房の機嫌を取るべく出かけて來た

その姿を見るか否、芳子はハッと云つて泣き出した、悲嘆の情極つて思はず聲を擧げたのである

『あれ、御新造さまや、何うなされたのでござります』

お松は例に無い圖であるから、驚いて聲をかける、芳子は新聞の上へ平伏して、容易には顔をも擧げん

『御新造さまや、お腹でも痛みますか、お醫者さまを呼んで參りませうか』

芳子は絞り出したやうな聲で

『どうしやうねえ、た、た、大變なことが起つたのだよ』

『え、た、た、大變が起りましたの』

『アヽ、大變が起つたのだよ、だ、旦那さまが………』と云ひかけて息を機ませる

『だ、旦那さまが………ど、何うなさつたのでござります』

『難船したんだよ、どうしやう、どうしやうねえ』

と今にもお松に縋り付きさうなさま

『え、、難船、まあ飛んでもない』

『命の助かつたものが三人しきゃ無い、その中に旦那さまのお名が見えんのよ』

『えヽ見えませんの』

『見えないのよ、だから私………』

もう詞を續けることも出來ん、お松は主人の災危を悲むよりは、芳子の心を思ひ遣つて、思はず知らず泣き出した

『婆や、私はね、横濱へ行て來るよ』

『あれ横濱へ行らしやるの』

「後を頼むよ、直歸つて來るからね」

芳子の悲しみは頂上にまで達したのである、何して、家を出て、どうして汽車に乘て、どうして横濱の海岸へ着たのかも夢中である

忙然として何時も良人を見送つた磯邊に立つて、雲ばかりの天を眺めて居る、浪は靜かで、海は眠るやうであるが、良人の姿は何處にも見えん、良人を載せて幾度も出入をした、見覺えのある、舟も見えん

その日は暮れる、翌日になる、翌日も暮れる、その又翌日になるけれど、芳子は鎌倉へ歸らうともせぬ、歸るにも力が無いのである、歸つて良人の紀念の品を見るには忍びんからである

日を經るに從つて、沈沒者、損害高などの報は續々と傳はりて來るけれど、良人の消息は少しも知れぬ、生存者の中に姓名を認めんばかりでは無い、溺死者の中にも又その名が無いのである

良人の身は天に去つたのであらうか、良人の魂は天國へ去つて、小さい星となつたであらうか

## 下

芳子は良人を慕ふ餘り遂に鎌倉の家を疊んで横濱へ移轉つて了つたのである、それは良人が航海の都度に別れを告げた、淋しい景色の好い磯邊に立つて責めての心を慰めやうとしたからである

月日は段々嵩んで來るが、良人からは消息が無い、何處を尋ねるといふ處もなければ、誰に樣子を聞かうといふ人も無い、仕方が無いから悄然として天を仰いで、良人は正しく天の人と爲つたのだ、あの潔白で心切で、さうして優しい心を持て居た、良人は正しく天の人となつたのである、良人は到底下界の人では無いかも知れぬ

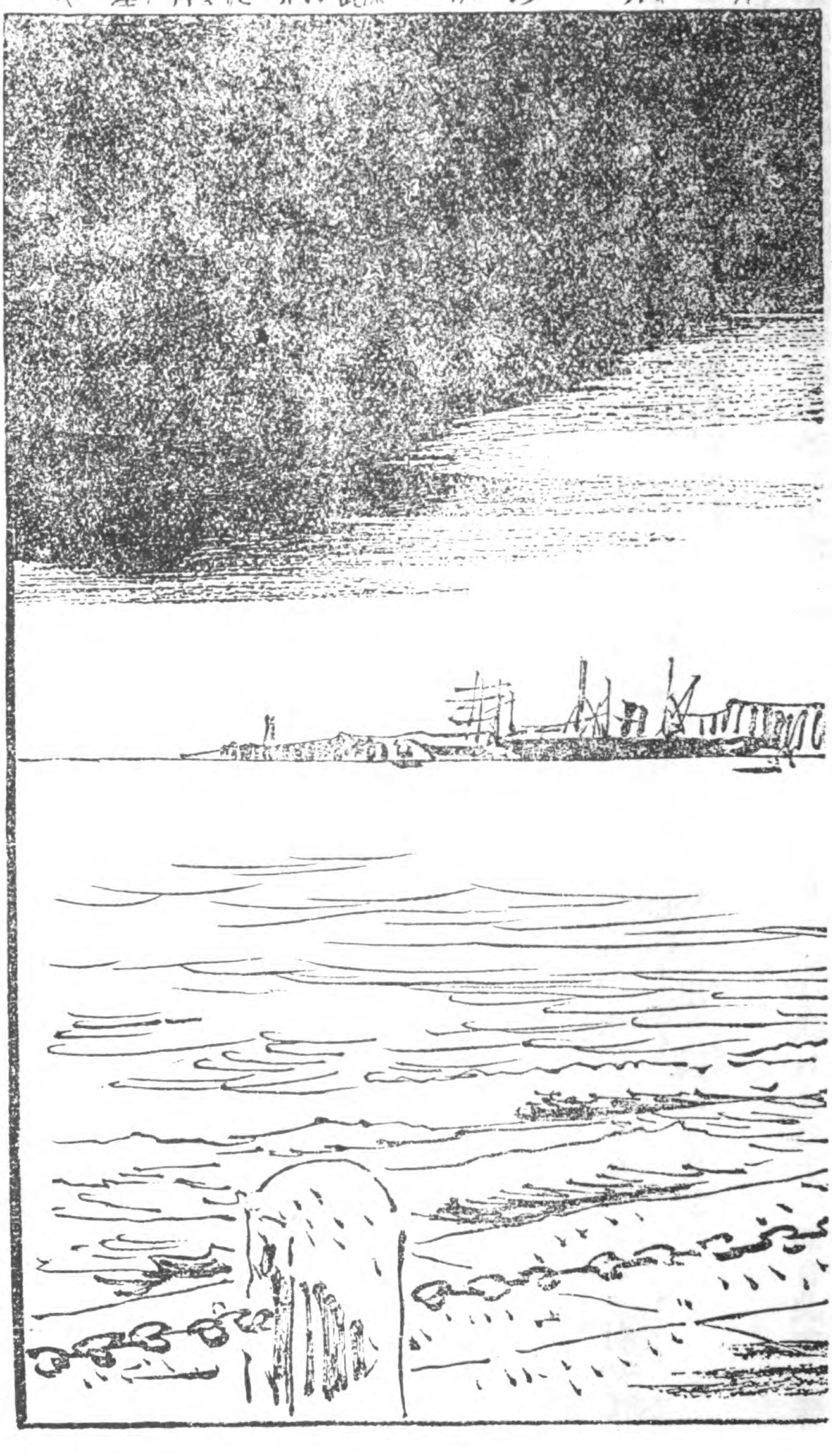
彼の星であらうか、この星であらうか、赤く光る星、彼が良人の魂であらうか、青く光る星、彼が良人の

住み給ふ國であらうか

芳子は來る夜も〳〵、例の磯邊に佇んで天を仰いでは嘆息した、我身も良人の妻である、心は潔く、行爲は正しく、慈善善行を旨として、假にも惡い事をした覺えは無い、夫を何故同じ天國へ伴れて行っては下さらんのだらう、私一人を後に殘して、何故自分ばかりお行きなされたのであらう、此濁つた世の中に暮らしてさへ、良人と家を同うすれば樂しい、況して天國で手を携へて、淸い美しい樂園を逍遙した



其樂しみ、その歡びは何んなであらう處が西北の方面に當つて、一月ばかりの間、微も動かぬ星がある、而も此星は此憐れな女の心を吊ふやうに照して居た月と共に動く星思ひ出したやうに走る星、淡く銀河を流るゝ星、明く曉に殘る星、天に輝く星の數々は、何れも皆移動する、月の動くが如く、日の移るが如く、多少運動せぬ星は無い、けれど此二個の小さき星はいつも同じ處で光り輝やいて居るのであつた



芳子は不圖此星を信仰し初めた、この星が良人の魂であらうと信じた、此星のある間は良人の靈魂も絶えず我心を照らして居るに異ひないと思つて、遂には自分の家の椽側へ、良人の好んだ酒、良人の好んだ果物を供へて、良人の冥福を祈るべく、彼の小さい星を祀つたのである

年は暮れんとしても、星の地位は少しも動かぬ、年は新らしく替つても、又動きさうな筈が無い

ある寒き夜の事であつた、門の戸をほと〳〵と叩いて

『芳子、芳子』

と呼ぶものがある、芳子はまだ寢所にも入らず、寒燈を守つて居る、聞けば聞くほど、その聲が良人のやうな

夢では無いかと思つて、聞き直して見ると

『芳子、私だよ、私が歸つたよ』

云ふのは確にそれ、今は疑ふ處も無い、表の間へ轉び出て

『あなた、お歸り遊ばしたの』

と云つて鎖鑰へ手を掛けた

『どうも寒くつて不可ん、早く開けてくんな』

戸を開けるのを待ち離ねて、男はずッと裡へ入る、芳子は何んとも云はず、氷のやうな手に縋り付いて

『お歸り遊ばせ、善くお歸り遊ばせ、わ、私どんなにお待ち申したか知れません』

良人は縋り付かれた手を振り放さうともせず

『お前、善く健康で居てくれたね』

『はい、あなたのお歸りを待て居たのでございます』

『さうか、私も此世で再びお前に逢へるのでは無かつたけれど、不思議に命を助けられて、昨日此方へ着いたんだ』

『おやまア、左樣でございますか、奥にはお火もございます、さア此方へお出で遊ばしませ」

一たん縋り付いた手をそのまゝ引いて、奥の座敷へ案内する、奥には芳子が嗜みの梅の一枝、馥郁と香りを放つて、床の間に薫つて居る

『今日は紀元節だね』

『はい、二月十一日でございます』

『芽出度いね』

『はい、こんな……こんなお芽出度い紀元節は生れてから初めてゞございますわ』

『さア久し振りに一はい貰はう』

『只今お進げ申しますよ』

と云つて持つて來たのは、彼の星に供へてあつた神酒であつた

芳子はその酒を暖めながら、小さい星の物語りをして聞かせた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

その後此航海長は、幾百度と無く太西洋を横行したけれど、一度も仕損じは無かつたといふ、彼は女房の發見した星の力で、善く方針を定めたからであつた

この小さな星は、太西洋上の船夫を守る處の海の神である、小さき星、小さき星、あはれ良人思ひの芳子の爲に發見せられた小さき星、汝は海の神である、汝は海の神である

（完）

# 雜錄

## 水を清むる方法

理學士　田中東洋

この水を清むる方法といふは、約めて見れば、水中に含有する所の黴菌その他の生物は、如何にして之を殺すべきか、或は不潔物は如何にして之を少なくし若くは之を除くべきかと云ふに在るのです、

サテ水は一の滋養物であるは勿論、また一の嗜好品であつて、我々の飲食物には之を缺くことが出來ない、のみならず我々の身躰細胞が生存して居るには、必ず一定の水分を含んで無くてはならぬのである、即ち水分の含量と密接の關係があるので、吾人は日々尿或は大便、若くば肺臟皮膚の呼吸に依つて、多量の水分を排泄するのである、而して此の排泄する水分の一少部分は、即ち飲食物の分解に伴つて水素が酸化して水を作るのであるが、その多分は飲食物に含有して居る水分で、其を呼吸せねばならぬのである、

そこで如何なる程度まで此の水分が吾人に必要であるかに就ては、之を動物試驗に徴して見るに、飢餓に於ては、身體の全脂肪分は無くなつて仕舞ひ、蛋白質は過半無くなるのである、然らば水分は何の位かと云へば、全身體の水分を假りに百と見積れば、約そ五分の一、之を減ずれば渇死するのである、

水は營養物のみでは無い、用水として家事上萬般に使ひ、或は物質の溶解物となり、或は身體並に衣服、家具、若くば家屋、家屋の周圍の清潔法にも緊要なる物である、總て此清潔法は、多量の水を給す

る事が出來なければ、廣く行はれるものでは無い、是の故に水は人生須臾も缺くべからざるものである若し此の水が無ければ吾ノは生存が出來ない、左れば國の文野に拘はらず、人が一定の土地に住居するには必ず水の在る處を撰ぶのである、

此く水は吾人の生存と相竢つて重要なる者であるが飲料水は兎角種々の病毒を含有して居ると云ふ事は疑ふべからざる事實であればその中に在る所の病毒を除かねばならぬは勿論、又その中にある黴菌は、成るべく之を少なくし、或は之を殺して水を清めると云ふことは、衛生上實に重要な事である、




水の殺菌消毒法には種々あるが、是の容易く出來るのは水を煮立てるので、我々が日々鐵瓶又は藥鑵で湯を沸かすのは即ち黴菌の多數を殺すに在るので、水は攝氏の百度に熱して五分間煮れば、その中の黴菌は大抵死で仕舞ふが、斯うすると中に含んで居る、瓦斯、炭酸、空氣等が發散して、水の美味を失ふ所より、茶や珈琲で味をつけて其缺を補ふのである、而して此水を煮沸する器械は種々ありて、殊に西洋には、一度煮沸したる水を冷して、再び水に瓦斯を吸收させる装置になつて居る器械もある、今日は日本にも澤山來て居る、

次に之を清むるには凍らしても宜い、水が凍れば其質を清むる作用がある、と云ふは、例へば、北極などへ行つた人の經驗した所に依れば、この北極近傍では水を得やうとしても無い、氷は得られるのであるから、之を取つて分析して見れば、その中には海水の鹽分が至つて少ない、殆んど純良の水に成つて居る、黴菌は其氷の中から排除せられて、餘程少なくなつて居る、之は人造氷に就て黴菌を調べて見ても、或は化學的の結氷を調べて見ても、氷となる前後に依て餘程の差がある、知らるゝ如く、人造の氷は、冷て液體の中へ大きな鐵の函に水を入れて其を冷すのである、さうすると最初に凍つた所の部分は、硝子のやうに透明であるが、最後に凍つた所は不透明である、ソコデ最初に凍つた所を調べて見ると、その中には甚だ黴菌が少ないが、後に凍つた所を調べると、最初の所よりは何十倍と云ふ程に多いのである、故に氷を用うるとき或は療治用に使ふ時は透明の部分を擇び用ゐねばならぬのである、



第三には蒸溜法であるが、之は海水を飲料に供せねばならぬ場合に於て往々之を用うるのである、併しタヾ此蒸溜水を得たのみでは、十分飲料に供する目的を達することが出來ないのである、何故かと云ふに、その蒸溜する際に、海水中に含める食鹽、或はコロールマク子シヤ、或は石灰、アルカリー、硫酸、殊にコロールマク子シヤは沈澱して、硫酸は揮發して蒸溜水に混じて來るのである、その他海水に包含して居るアンモニヤなどの臭氣、或は魚類の臭を呈するので、是等を除く爲には、先づ最初に海水を一大器物に取り、それに石灰を交ぜて少し温めるときは、其海水中に含める黴菌は死し、マグネシヤは沈澱すれば、之を蒸溜すれば善良なるものが得られるのである、併し生温い蒸溜水を用うることは隨分困難である、何故と云ふに、屢生温い蒸溜水は用うれば嘔氣を發して來る、故に蒸溜水は冷して後、再び之を振れば空氣を含むのである、然らざれば再び小石又は大理石等で漉して、一定の空氣と鹽類と

を含有せしめて用うるのである、併し此蒸溜水を調べて見ると、斯くして拵へた蒸溜水でも、通常市中で販賣して居るものでも、決して黴菌が無ではない、矢張黴菌は多數含んで居る、と云ふのは、その器械の全部を消毒する事が難いのであるから、その爲に黴菌が中に入つて居るが、別に害を爲す程のものでは無い。

次は電氣を用うるのであるが、之は水道の鐵管の一部分に一定の裝置を爲して、其所に强い電氣を通ずるのである、即ち水が其所を通過する際に、その電流の爲に水中に在る所の黴菌が殺さるゝのである固よりその部分は普通の管では不可である、乃ち普通鐵管の間に一定の裝置をして、隔離して電流を通ずるのである、

次は器械的の濾過法で、之には種々あるが、大別すれば、第一が砂漉である、多數の人民が住で居る都會であるとか又は市と云ふやうな所では、給水するには固より大仕掛にせねば爲らぬのである、彼の東京の淀橋の水道は、一方に大きな貯水池がある、其所に多摩川の水を引て溜る、それから濾す池に入つて行き、次に淨水池に集まり、その水を諸方へ供給するのであるが、その構造は、まづ池の一番下の方には煉瓦、或は其位の大きさの石を敷き、その上は小石の稍大きいもの、それから小石と云ふやうな工合に、漸々層を拵へて、一番上の所に砂の層がある、此層は一番厚いので六サンチメートルから十二サンチメートル位ある、此所へ水が來て漉されて溜り、次で淨水池に入るので、この砂は云ふまでも無く濾過作用である、この爲に著しく黴菌の數を減じて來るので、今濾した水と否らざるものとを比較するれば例へば一立方サンチメートルの水に、まだ濾さない場合には數萬乃至數十萬の黴菌が居るが、既に濾したものには五十乃至百で、若し二百居れば不良と云ふことに爲つて居る、現今東京市の水道の水は、一立方サンチメートルに僅か黴菌の數は十か二十位であると云ふことです、

併しながら未ださう云ふ水道の無い所では、他の方法で水を淸めて居る、即ち砂漉にする、タヾ一家の用に供するものは、桶の中へ砂を入れて漉して居る、或は小人數で用ふる爲に拵へた種々の水濾器械があつて、その數は隨分多いので、中には石炭の粉を用ゐ、或は木炭を用ゐ、又は陶器製のものなどを用ゐますが、それらに依つても十分に黴菌を濾し取て仕舞ふ事は難いのである、

また川の底の土を取り、之を燒て拵へた水濾器械がある、是は行軍などに用うるもので、曾て北清事變の時分に、英米の軍隊では中隊每に此器械を備へてあつたさうです、而して此器械で一時間濾せば、優に一師團の水筒に充たすだけのものを得るのださうです、

次は化學的の藥品にて淸むる方法で、之には多樣あるが、最も簡單なるは明礬で、水一合の中に明礬○、四グラムを混ずれば、少時にして沈澱物が出て下の方へ行きます、故に其上澄は淸淨な水なのである、之に次で石灰を使ふのがある、けれども手數が掛つて宜くない

同じ藥品中では、水を淸潔にすると同時に殺菌力の著しいので、オゾンを用うることが益々多くなつて來たので、それは第一オゾンは跡へ殘ると云ふ氣遣がない、その筈である．オゾンは瓦斯であれば、水に溶けた後、放任して置けば自然に揮發して行くのと、前に述べた二つの効能がある、併しオゾンは強い酸化力を有つて居るから、金又は白金を除くの外は之に接すれば酸化する、之と同じく黴菌がオゾンに接すれば容易く死んで仕舞ふのである、

このオゾンは通常外氣中にも少量は含んで居るのであつて、其分量は多少增減するが、大抵百立方メートルの空氣中に僅に二グラムである、而して外氣中に之が增すのは、暴風の時、驟雨の時、或は水分の蒸發する時等であつて、しかも空氣中に發電する時は非常に多量に出來るのである、依し現時は人爲を以て之を作るべき細密なる機械が出來て居る、

その器械の作用で水を檢査して見ると、伯林で數十回河水を實驗せしに、河水一グラムの中に、まだオゾンを働かさない時は、黴菌の數が五千七百から四萬八千も含有して居たのであるが、一たびオゾンを水に働かしめた後には、漸く一つ、多くて二十八に過なかつたと云ふことである、又同じ川の水を今度は殺菌して置て、之に虎列剌又は腸窒扶斯その他の黴菌を混じて調べて見た所が、一立方サンチメートルの中に、一萬六千から三萬九千位までの黴菌の種があつたが、之にオゾンを働かして後には、一つも病毒は發育しなかつたのである、且つ化學的に於ても、其水のオゾンで作用された後は、酸化性分は著しく減じて居たのである、のみならず水の着色及び臭氣も減じて、味が美になつたと云ふことである、故にオゾンにて水を殺菌すれば、すべて衛生上並に工業上にも無害であり、之を用ゐて殺菌した水は、砂濾のものと價が略同じであるとの事なれば、一日も早く我國にも之が設備を切望するが、是は後日の事として、前段に述べたものは必ず其時其處に應じて實行ありたいものである、

## しのぶぐさ

小川直子

### 其一、蘆分をぶね

我脊小川幸三、諱は忠篤、字は士信、幼名は三義と呼べる事もありしが、後に幸三と改め、號を靖齋といひ、加賀國石川郡鶴來村とて、今は町になりたれど、其頃は村落なりしが、爰に生れ、父は一方と稱へ、忠安といひて、醫を業とせり、妹ひとり生れしを、其時母は身まかりて、父の手にて人となれり、幸三、十三歲の時、父に向ひていひけるは、かゝる田舍にて學問せむと思ふも何の甲斐かある、遠く都に行て學ばまほしと云ひけるに、父實にもとて、其頃打日さす西の都は大君のおはします所にしあれば、いみじう尊びしたふ習ひなりけるまゝに、京師をさ

して出たゝせ、醫の家なればとて典藥太田伊豆守殿の門に入りて學ばれけるに、傍に儒道を二條家の儒者城谷仲章とて、德高く豪邁の聞えある人に隨ひ、倫理の道を修行し、また梁川星巖、賴三樹三郎、家里新太郎などいふ君だちにも交り深う、問ひみとはれみ親しみあへる程に、十八歲になりける年、將軍家鳴動せりとて、世の人大に驚き、大亂の萠しならむといひあへるを聞きて、幸三思ふやう、醫はたゞ人の病苦を救ふのみ、我願くば天のしたの病苦を治療せむものとおもひたちては束の間もいたづらに過すを惜み、やがて文もて此事を父に乞ひければ、父も乞のまに〳〵許されけり、よりて盛なる花のお江戸と世の人がいひはやす、鳥がなく東の都をさしてのぼりつゝ、ある人の導きにしたがひて、林大學頭殿の門に入り、儒道を學び、いとまある折には、劍術をも習ひ、天のしたの形勢をうかゞひつゝ、日を積み月を重ねつゝ、ひとたびは國に歸り、父に事へて暮しゝが、萬延元年又京師にのぼりぬ、其頃はしも世の中麻のごとくに亂れ、おしなべて人の心もおだやかならず、そも〳〵世の理として、久方の月も滿ては缺げ、萬の事始あれば終りなき事能はずといふが如くに、世に輝きわたりし德川將軍の權勢も、星移り物かはり、漸く衰へむとせし頃かとよ、奢を極め上をないがしろにし奉りければ、世に心ある君だちは、天のしたの政を朝廷に還し奉り給へよと、しば〳〵諫め給ひつゝ、くさ〴〵の論者出で來し上に、外國よりのねぎ事さへ打重り來て世の亂れ大方ならず、櫻田の凶聞を始めとして驚かるゝ事のみいで來にければ、人皆魂をうしなひ、肝を消ち心なき山がつも、理り知らぬ海士の子も、世を憂ひ、國を歎きて、明し暮し、一方を治め給ふ國守などはいふもさらなる事なれば、我藩主中納言の君にもさる御志はなきにしもおはさゞりけむを、ことに輔けまゐらす臣も少なくて、萬におくれがちなる事のみ多かりけり、此時宰相の君には未だ世嗣の君にておはしけるが、幼くおはしける程より、英氣强く、萬にさと

くて、いとも〳〵はやりかなる御心ざまにおはしければ、早くより尊皇の御志深くて、日夜御心を苦しめつゝ、如何せましとおもほし煩ひ給ひけるが、御父の中納言の君は、篤實温厚の君なる上に、幕府を尊ぶ御心深く、はた御母君も徳川十三代將軍の御女溶姫と稱へて、こよなく尊ばれ給ふ君なるからに、世嗣の君には萬御志の儘にもし給ふ事かたく、藩臣は擧て幕命を重んじ恭々敷かしこみつゝ、將軍ある事を知りて天皇おはします事を知らずともいはまほしげなる有さまなりき、たま〳〵下つ方の者には、福岡惣助、野口之布、瀨尾與一又は城下の町人にて淺野佐平などの輩ありけれど、これはた其身卑くければすべなくて、只打集ひては慷慨しつゝ、如何せましとかたらひて、世のさわがしさを聞くまゝに、兎かう憂ふる程に、我背幸三は、當時京師に遊びて、勤王の增荒男だちと交らひつゝ、世のため國のために、天の下の形勢を憂ふるにつけて、我藩かゝる世のさわぎをも、知らず顔なる靜けさはと歎息したりければ、强兵給食育民の策十餘條をしるし、京師の御留守居につきて藩主に奉りき。

其二、心づくし

扨しも文久二年薩長の二藩京師にのぼり、何をか奏聞し給へりとて、市中のさうどさたとふるに物なし、かゝれば幸三は此形勢をつばらに聞きいで、我藩爵高く秩祿大にして、世に並びなき大名なるに、かゝる形勢を餘所に聞き、傍に見て過ぐさせ給ふべき時かはと、心中におふるゝまゝを殘る隈なう書きつらね、急ぎ國へ歸り來て、中納言の君に奉らむとしたり、こは同じ年の閏八月の事なりき、折しも中納言の君は、此程より福岡惣助、淺野佐平などよりも、くさ〴〵の封書を奉りて、世のさわがしさをも聞給ひ、兎やせん角や謀らんとおぼしける時なりければ、忝けなくもおなじ月二日といふに、幸三を御城中へ召のぼせて御尋問あり、此日の同道人は御郡奉行金子篤太郎、指添の者は手代の太左衛門なりけり、扨御次の御杉戸迄已の時ばかりにのぼりけるに

大小姓なる人の誘引にて、御杉戸内に入り、暫しありて御用部屋といふ役三人、大横目一人、これらを始として、末席につらなれる人もあまた有て、はるかあなたに御上段の御間ともおぼしくて、金屏風たてまはし、中納言の君はいと温和なる御容貌にておはします、さて御用部屋大村君、今少し御近く進まれよと聲をかけらるゝに隨ひ、膝ずりしつゝ御上段の際迄進みよりて、つばらかに世の形勢をあげつらひ、至誠のあふるゝまゝに心の限り言葉をつくして聞えあげければ、君は御身じろきもし給はず、うみ給ふ氣色も見えず、御心を澄して聞こしめし、志といひ論といひ、感じたりとのたまひたりとぞ、此時いまだ幸三は、卑賤なる貧書生の身なりしに、其翌日より藩中の諸論趣を異にし、漸く眠りの覺行く心ちたりしとかや、猶又同じ月廿一日御馬廻衆改方奉行林源太郎殿より、手先の者をもて呼たてられしかば、其人にいざなはれて行きたりければ、林殿のたまふやう、昨日老臣よりの御談事には、御邊をしば〱御前に召され、猶くさ〲御尋問の思召はありながら、さま〲障りも有り、はた家宰の人々も、若年の者のみなれば、御馬廻頭十二人にて委細きゝとれとの仰なり、されば明後廿三日朝とく辰の時迄に、同役伊藤權五郎の舘まで來られよ、かゝる事御邊にとりては、實に名譽なり、諸士多しと云へどもかゝる御沙汰はいまだ聞かざりけるにと、いとねんごろにかたられければ、幸三は畏みつゝうべなひ歸り、さて廿三日にはあくるも遲しと起いで、衣服を正し、契りし時刻に迎への人に誘はれて、伊藤殿の舘へ行きたりけり、其日先づ玄關には、足輕やうの者兩三人扣へをり、家扶ともおぼしき者のいざなひにて、表の廣間へ通りけるに、大小姓組十二名列座ありければ、一禮を述べたるに、暫しありて御馬廻頭兼町奉行なる山崎守衛といふが出向ひ、威儀正しく會釋ありて、夫より漸々尋問に及びければ、京師の模様ども心の底を殘さず繰出し、水の流るゝ如く述べけるに、己の時より夜半すぐるころ迄になりにた

り、斯くて堀半右衛門殿いひ出らるゝには、今朝より述べられたりし事どもを、殘らず書に認め、明日奉られよとありければ、委細承りぬと暇を乞ひてぞ立歸りける、斯くて此夜は夢も結はず夜もすがら其趣意を書きつらねける程に夜もほの／＼と明けわたり鴉の聲もはなやかに聞ゆる頃しも、親友の野口之布のとぶらひ來て、彼是輔けをしつゝ、午すぐる頃封書とゝのひければ奉りぬ、かゝりければ中納言の君にもこれをよみし給ひ、大に用ひ給はんとせり、されど奥村榮道(伊豫守)おなじく内膳など稱ふる方々兎かく否み給ひて、芦わけ小舟わけがたき事多かりきとかや




かゝれど此頃より福岡惣助を初として、世の諸論だち集ひ來て、晝夜國事をかたらひつゝ慷慨する事大方ならず有ける程に、誰がいひ出せるしりうごとにか有りけん、小川幸三は諸國浪士のかたらひ者にて、國を賣るくせ者なり、かゝる者を御採用などありては、如何なる御國難をひき起さんもはかりがたしと、風評ますますに起り來たりければ當路にたてる人々は、これを信じ、遂に手鎖締にて親あづけとならんとす。

其三、露けき袖

さる程に秋の半も過行きて、夜も長月の頃かとよ、

萩ふく風も身にしみ渡り、草村ごとの虫の音は、あるかなきかに枯れゆく頃、小川の宅は金澤より四里へだゝれる鶴來村金劔宮の森蔭にて、白山おろし吹すさび、木深き峰には猿の聲物すさまじく聞え來る折しも父の一方は、老の寢覺に世を思ふ、袂露けくおぼゆるに、廿九日の夜更行くかねに枕をそばだてゝ、そゞろ淋しき心ちして、わたりを見廻しける折ふし、閨の戸がらりとあけて入來る人を見れば、大男みたりなりき、こはそも如何になに者ぞと、一方は起上り、汝等かゝる深更に案内もせで入り來るはいかなる事ぞと聲高らかに言ひければ、此みたり、私共は御郡附の足輕にて、田中恒三、河原兵太夫今一人は組方許增泉村喜兵の手代半次と申す者なるが、御令息幸三殿御樣子ありとて、君命を蒙り出役仕れるなり、御子息はいづこに居給ふぞと尋ねれば、今宵は近き渡りの友人のもとへいで行きて居らずと答ふるに、さらば早く呼び寄せ給へといふ、やがて人をはせけるに、幸三は何心なく歸り來て、此三人へ會釋しつゝ、御用は何ぞと尋ぬるに、田中のいはく、御手前義御樣子有之趣にて、手鎖締の上御親父へ御預けの身となり給ふべければ、速に御請あれといふ、御樣子とは如何なる譯にか心得がたしさりながら君命とある上はすべもなしといひもあへぬに、田中は懷より手鎖を取いでければ、一方は堪へかねて、君命とあればすべはなけれど、君命のしるしはいづれにかある、汝等ごとき者の口達にて、手鎖締とはうべなひがたし、此段奉行所と傳へられよと言ひければ、其時田中懷中より一通を取出して渡しければ、手にとり見るに、

小川一方悴　　幸　三

右之者御樣子有之、不締無樣嚴重に可相心得旨、奥村内膳殿被仰渡候に付、手元足輕を以て、手鎖締にて其許へ指預け候條、得其意、預り請書可差出候、以上

戌九月廿九日　　津田太郎兵衛

とありけるを、一方つく〴〵見て、こはいかに手かせ足かせといふ事は罪ある者こそうくべけれ、我子如何なる罪かある、もし人違ひにもやあらむ、いかにも心に落ちぬ事なりと、口をしげに云ひければ、田中いはく御親父君の身に取りてはさこそおぼすらめど、只々御様子とある上は、御上において何か思召のある事ならむ、されば氣をやわらげて、御請し給ふこそ中々によからめと、兎ざま角ざま申ければものをもいはで其の場を立ちにけり跡に幸三は君命ならば死をも辭せず、ましてかばかりの事何かは苦しうさぶらふべきと云ひけるに、やがて河原兵太夫は縄をかけて手鎖締を畢りけり、爰に一方又たちいで、こたびは幸三に向ひ、老たる親を心ともせず、縄めにかゝるはづかしめ、目のあたりに見する不孝者、不孝といふとも猶たらず、汝は平常學びたる讀書の道は、いかなる道ぞ、はた腰に帶びたる大小の劍は如何なる時のためなるか、斯かる恥辱を見するより、むしろ只今目の前にて切腹せよと聲あらゝかに脇ざしをさへ投げわたへければ、田中河原の兩人は、これは〳〵餘りの御短慮、尊君が平常の豪膽にも似ぬありさま、先づ心を鎭められよと諫めつゝ、一方を引立て次の間へ打連れける所へ、同じむらなる朋友ども村山三郎兵衞、櫻井太郎二氏酒肴をたづさへ見舞にとて問ひ來つゝ、くさ〳〵慰めけるが、此時幸三せうえうとして、父に向ひ、罪なくて配所の月を見る例古より尠からず、心の底のすゞしき身何の憂ひかさふらふべきと、數盃をかたぶけて、手には締をつけられながら、庵の中にこもりけり、其頃つれ〴〵の口ずさびに、

○

皇天照處自分明　何管微身利與名
一片丹心不抛得　誰知日本古狂生

○

天地無容狂酒生　全身動處僅雙睛
丹心求得何爲恨　唯患人間不孝名

○

和魂二字世咸同　見義不爲非此道

恨不將腰間利劍　斬西夷首投洋中
　與喝言者詩
謂奸謂党任君意　一死一生都是天
來見幽窓面縛裏　聊含温酒樂餘年
　またある時人に與へたる扇に
　題せられたる詩は
謂戰謂和任衆評　惟憂勝形不全成
千秋公論問如何　庶幾當時正此名

かゝる折柄にも野口之布などのともがらは、遠く隔たれる道をもいとはず、禁を犯して絶えず問ひ來つゝ何くれと慰め、はた國事をかたらひて、世を憂ひけり、されば此時慷慨なる唐うた、あるは我國ぶりの歌などもあまた云ひ出でられぬとかや、されどおのれは未だ嫁がざる前の事にしあれば聞かざりき今になりては口をしと思へどすべなし、此時福岡惣助は越中の國魚津といふ所にありければ、野口之布より書を贈り、雁の音づれ繁かりければ、惣助幸三の交はりは日に月に深う成り行きけりとぞ、はた野口之布幸三の冤を解かむとはからひて、行山康左衛門義國世子の君に附添ひて、國のためにいみじく心をつくす質ありければ、瀬尾與一の弟米山道生をして、行山を伴はせ、鶴來村に至り、幸三の意見を聞かせけるに、大に取るべきふしあるをもて、行山も感じければ、家に歸り封書をしたゝめ上に奉れりとぞ、其頃漸次京師の事情せまり來て、幸三の言ひける事ども皆あたりたれば、中納言の君にも大に悟り給ふことありげにおはしけりとかや。

（未完）



## この夫にして此妻あり

梶山杳丘

遠城繁子女史とは如何なる女性であるか、乞ふ少しく之を語らしめよ、

女史は舊江州彦根の藩士上原勇左衛門氏の二女であつて、夙に同藩士の遠城平右衛門氏に嫁いだのである、この平右衛門氏は後に薙髪して謙道と稱せら

れたのであるが、資性極めて純誠率直の士であつて一たび心に決すれば容易に其節を屈しないと云ふ硬骨漢であつた、而して黧面粗服で毫も邊幅を修せず一見傖父の如くであつたと云ふことである、年甫めて十五にして父の後を承けて足輕鐵砲組の班に列したが、その稟くる所が薄いから、家道は常に豐かで無かつたので、公務の餘暇製藥に從事して生計を助け、後に堀田道策および吉益東洞等の大家の門に入つて醫藥の事を究め、家に歸りしより診療を請ふものがあれば、輙く之に應じて私かに藥餌を與ふるけれども、固より醫を以て家を成すものでもなく、且つ寡慾で賑恤を好むの性癖があるから、貧困のものに逢へば喜びて施療し、敢て醫藥の料を求めないのみでは無い、時には私財を投じて周急に抵つると云ふ氣風であれば、家計は常に乏きを告るも省みぬと云ふ工合であつても、女史は此間に處しても迫らず克く良人の意を體して內助せられ、一に良人の志を濟すことに務められたから、家庭は雍々として所謂琴瑟相和して居たのである、

降つて萬延元年の三月三日、藩主大老職井伊直弼公は水戶浪士の要擊する所となつて、難に櫻田門外に遭はるゝや、在藩の士卒は之を聞て大いに驚き、晝夜兼程して江戶の邸に集まり、少壯血氣の徒は直ちに小石川の水戶邸を襲擊して其怨みを報じやうと謀つたのである、けれども在府の藩老岡本半介等の慰撫する所ありたるが爲に事なきを得た、

次で直憲公は後を襲がれ、從四位下に叙し、左近衞少將に任じ掃部頭を兼ねて京都の守護職を勤めて居られたのである、然るに幾何ならずして、京師の守護を免じ、且つ所領の中蒲生神崎の二郡を還納せしめ、次で十萬石を削封せらるゝや、氏は之を聞て謂ふやう、幕府の處置は前後反覆であつて實に切齒に堪へざる事である、是の時に當つて主家の寃を訴へ、鴻恩に報ずるは臣子の本分であれば、如何んぞ默視して居ることが出來やうぞと、私かに同僚と謀り、陳情書を懷にして、東上せんとするの前夜、女

史を招ぎて志を告げられたのである、女史は之を聞て一たびは驚かれたが、直ちに涙を揮ひ、士に貴ぶ所のものは義節なれば、幸ひに後事を顧慮する勿れとて訣別の筵を張つて其行を壯んにせられて、その夜半に生別せられたのである、當時氏は作事方元締であつたとすれば、その俸祿の程も察せらるゝのである、而も顧みて女史の身邊を窺へば、氏の七絶こそ克く其境遇を詠じて居る、即ち一男三女未成人、轗軻如卿不遇身、大義今將殉邦國、勿忘家臣是忠臣、と以て如何にその慘絶たるかを察すべきである、

平右エ門氏は訣れて江戸に到り、時の月番老中井上河内守に憑りて哀訴する所ありしに、容れざるを以て自裁せんとせしに、井上の家臣に止められて果さゞるのみならず、擅に藩を脱するの故を以て譴を蒙ぶるの厄に遇ふたのである、爾來漸く海內騷然たる事であつた、左れば舊君の冤を雪ぐの機會を得なかつたのである、而して亂の熄みたる後、家に歸り熟々主家の否運を思ひ、且つ自己の志を貫徹することが出來ぬ等、彼を思ひ此を考へ、最早この上は妻子を棄てゝ一生を先主の掃墓に委して、舊恩の萬一に報ぜんとの念を發し、遂に薙髮して緇門に投じ、清節孤忠幾んど四十年の久しき一日の如く、先主の墓側に廬を結びて掃箒の事に從ひ、明治三十四年五月七十九歲を以て遷化せられたのである、氏の孤忠清節は此の如くにして完きを得たのであるが、之をして然らしめたのは一に繁子女史の力と云はねばならぬので、而して其間に於ける女史の苦節は、是また多少現時女流の照鑑とすべき點も少なからぬので其の略傳を得たれば左に鈔出することゝした、女史は本年七十一の高齡で、令息兵造氏の孝養に恬樂せられて居るが、彼奥村五百子女史とは親父があるので、同女史が上京の折には、毎に起臥を倶にせられたさうである、傳に曰く、

繁子女史は、年纔に二十九才にして所天に生別の悲を見、次で廩祿沒收の痛に遭ひ家に財蓄の裕な

るにあらず而も膝下に六人の子女を擁す、苦心是の時より慘憺なるはなし、

人情の恃むべからざる、世事の測るべからざる、繁子は獨り心に決する所あるも、幼稚なる子女は一家の不幸と慈母の心事を解せず、已の欲する所は之を求め、他人を見ては之を羨む、繁子は毎に訓戒を加へ、陽に叱責すと雖も、心陰かに其不遇を憫み、日に暗涙を濺がざることなし、其年十二月一女を分娩す、爾來時運日に否にして、物價益騰貴し斗米金壹兩以上に値するに至る、是時に當て母子八人の口を糊するは、假令日夜賃錢を是勉むと雖も、到底一女子の得て支ふべき所にあらず、多からざるの家財を鬻ぎ、志士仁人の扶助を得て僅に露命を繫ぐのみ、此悲境に沈淪して夢寐經過すること三裘葛、明治元年出格に依り嗣子兵造の家名相續を許され俸米を賜ふ、因て少しく愁眉を伸ることを得たりと雖も家計の窮困依然として前日に減せず、憂患の餘遂に病をなす、一日突然吐血し、日に重症に赴き殆んど起たず、子女は枕頭に環坐し、常に湯藥に侍し晝夜傍らを離れず、時に故舊隣保の救援を得て僅に奉養看護を怠らず、天豈此貞烈可憐の寡孤を恤まざらんや、數月にして漸く脊を回すに至る、兵造は既に藩校に上して學に就かしめ女は鍼線を學ばしむ、繁子獨り薪水の勞を執り、或は人の爲に洗濯裁縫し、夜は孤燈の下に子女を集めて勤學せしむ、此の如くすること七八年、明治八年の春に至り家計益左す、繁子謂へらく、假令一女子と雖も所天の迹を辱かしむるは我慚る所、座して此悲痛の淵に沈まんよりは寧ろ身勞役に服し開運の時を待つに如かず、幸に兒女稍長じて其羈絆を脱するを以て、親族等に謀り、断然家を閉し他郷に出稼して、一家各自活の道を求むることに決議す、時に繁子年三十九、是より先き一女既に亡し、長女は人に嫁し、次男末女は他に行き、長男兵造は笈を負て東京に苦學す、繁子は女子二人を携て故郷を辭し、上野富岡製絲塲の工女に出願す、時に尾高忠惇塲長たり、遠城一家の忠貞を聞

き、繁子の來るを喜び、直に推して工女取締の任を託す、時に工女を使役すること六百餘人、繁子は深く尾高氏の知遇に感じ、勤務に服するに誠實と勉强とを以てし、未だ曾て一日も怠ることなし、十三年夏、製絲所内に窒扶斯病大いに流行し、勢甚だ猖獗を極めて翌年春に渉る、工女の病に臥するもの一時七十餘人、繁子をして病室看護の取締を兼ねしむ繁子は危險と勤苦とを省みず、日夜碎身看護至らざるなし、時の所長河村省記大に之を賞す、兵造學稍進む舊主井伊公學資補助の恩命あり、繁子は勞役して得る所の工錢を割て學資に充つ兵造初めて醫を大學に修むることを得たり、籠手田滋賀縣令嘗て富岡製絲所に臨み、繁子の事を聞き特に面して其貞操を賞す、十五年冬兵造は醫科大學の業を卒へ佐賀縣公立病院長に聘せられ、後東京に在て開業す、

抑繁子は堅忍不拔の節を以て、夙に辛酸を嘗め盡し、一家傾覆の日に當り、隻手七子の鞠育に任じ、他鄕に勞働すること九年の久しき能く其職を盡し、嗣子をして其志を成さしめ、所夫の淸跡を汚さず其貞其勤實に女子の龜鑑にして其夫の忠節と双美と稱すべし、茲に至て製絲所を辭し、今や東京に在て家庭團欒の樂を遂ぐることを得たり、豈至誠の天に通ずるものにあらずや、と、女史の如き眞に女丈夫たるに愧ぢざるものと云ふべきである、

## 薄倖女子の救濟法に就て

八木兼夫

世には薄倖なる女子は尠なくないが、予が今言ふ所の薄倖者は、鰥寡孤獨を總括したる廣義のものではなく、但し、或一部に於て之を含むも、最近稍女子が獨立を自覺するの結果、自ら進んで造花、刺繡等の技藝を修めんとし、或は既に修めつゝある女子等に對する狹義的のものである、

既に一技一藝を修めんとし、且つ修めつゝある者は、云ふまでも無く月々若干の學資を齎らして修業

するものなれば、何うして之を薄倖と云ふことが出來やうぞ、とは最も皮想の管見である、近時世の有識者をして顰蹙せしむるのみならず、子女を有せる地方所在の父兄をして恐怖の念を抱かしむる、所謂女學生の墮落なるものを見聞するに、多くは文學の學校に在籍のものでは無くして、技藝の學校に學ぶもの丶方に在ることは、日々新聞紙上等に散見するのみでは無い、予も亦數多の實例を認めて居る、廣き社會には予ばかりではあるまい、斯事實を目睹耳食して居らる丶方は尠なくないと思ふのである、

　何故に此く技藝を學ぶ女生に墮落が多いのであらうか、之には必らず原因のあることであるが、その原因も一二では無い、是につき予は幾回か苦き經驗を積みたるが、その中にも學資の不足と云ふことが最も女生を墮落に誘う一大原因と認むるのである、前にも云へる如く、苟も一技一藝を修得せんが爲に遊學する程のものは必らず、月々の學資を計量して父兄も許し自己も亦これを諒じて故鄕を出でしものなれば、決して之が不足を感ずると云ふが如き悲境に接するの理は萬々あるものでは無い、多くの女生中偶々此の如き境遇に陷り、その極墮落の淵に沈淪する者のあるは、畢竟限りあるの學資を浪費したるの膺懲たるに過ぎないのである、左ればその少數者の陋態を以て他の多數の者を律することは出來ないといふものあるが、予は全然斯の言を非認するものでは無いけれども、事實は大いに之と反比例をなして居るので、この半面を觀るときは頗る同情に堪へない點もあると思ふのである、その同情すべき點と云ふのは外でもない、

　彼の女子高等師範學校とか又は高等女學校とか、若くは同程度の學校の事に付ては、最早廣く世間一般に月々若干の經費を要するかと云ふことは略知られて居る、けれども技藝學校のことに關しては、最近の事である故、餘り多く經費の點等に付て知られて居ない、のみならず他の半面に於て、隣家の誰某は月々若干づ丶の薄資で某技藝學校を卒業し、何處

其所の誰々は斯く〳〵にて支えつゝありと聞く、左れば妾等も月に若干あれば差支へなかるべし、若し多少の不足を生ずるとも、その時は如何にかなるべしと云ふが如き朧氣なる考へを持ちて出京し、サテ實際に入學して見れば、在鄕の時に考へしとは大いに相違し、例へば造花の一科を修めんとするには、器具の類は最初一たび之を調ふれば、屢々之を換ふるの必要はないが、材料は日々に新たなるものを要すると云ふ工合であるから、中々思つたよりは入費が掛る、入費が嵩むと云つて材料を買はねば修業が出來ぬ、假りに材料は儉約に儉約を重ね、尙ほ忍んで之を半減にするとも、學校の月謝および下宿の賄料等は減少することは出來ぬ、左ればとて之を父兄に訴へても增額して貰ふ見込みは立たず、その見込が立たないと云つて折角の修業を廢するは殘念である、如何したもので有らうかと心を傷めて居る中に光陰は矢の如く時人を竢たずで、一月と經ち二月と過す、その時日の間に嵩みたる月々の不足額は遠慮なく學生の身心を苦しめるのである、此に至つて何とか之が補給の途を得んと、煩悶懊惱しつゝある際に周圍の惡魔は虹の如く又飴の如き舌を弄して、巧みにその弱點を利用して誘惑するので、多くは是より墮落の淵に向つて彷徨し初めるのである、

この時に際しては、素より女子は感情に脆きものなれば、縱んば男優りであると云ふものでも、この惡魔の陷穿にかゝらぬものは尠ない、況して女生等の多くは感情のみ盛んで、未だ意思の固まらない所謂妙齡のものゝみであるから、十中の九分九厘まで斯のサタンの毒手に摑み去らるゝのである、

此く詮じ來れば、當初の希望は甚だ嘉すべきであるが、終りの結果が實に惡い、若し初め半月か一月の間に於て學資に不足を告げたる若き事實に胴着した時に、早く既に意を決して故鄕に還りさへすればサタンの毒牙に觸れて畢生を葬るやうな事はあるまいに、愁じなま中踏止まつた爲に、斯の悲慘なる境遇に陷つたのであるから、毫も憐むべき點はないと

斯う無情なく云へば云ひ得るもの丶、かく多くの腐敗不健全の女子を作るに至らば、社會の幸福の爲に、國家百年の大計の爲に最も憂ふべき事ではないか、

されば己に業に奈落の底に沒了して、又救ふべからざるに至りたる者は、且らく措て問はざるも、其未だ危きに臨まざる者また臨まんとする者に向つて之が救濟の方法を講ずるは、目下女子教育上の焦眉の急務である、而も之は獨り女子教育の衝に當る者のみの問題にあらずして、一般の國民殊に先覺者の上に横はる重大問題であると思ふ、



乃で之が救濟の第一着としては、是等薄資の女生を收容して、學資を補ふの傍ら、適當なる學修を爲さしむるの方法を講ずる事は最も必要である、けれども之は中々容易の業では無ない何故なれば限りあるの資を以て、此の限りなく日々に增加する所の薄倖生を濟ふとは不可能の事に屬するからである、とは云ふもの丶今日の儘にして放任して置けば、此濁浪は倍々横溢して遂に收拾すべからざるに至るであらう、想ふて此に到れば予は自己の力の微なるを顧みるの暇が無い、依つて請ふ隗より初めよの顰に倣ふて、精神の修養を督勵して、將來家庭の主婦たるに適する者の養成に努むる決心である

# 植物の奇觀

理學士 伊藤久吉

動物が食物の如何によりて生成凋落するが如く、植物も亦この理を外れる事はないので、所謂土地の肥瘠なるものは、則ち此食餌の量の多少に因りて定まるものである、而して其要素中の最も主なるものは窒素である、故に窒素を取得する分量が宜しきに適すれば、植物の繁茂は期して待つべきものなれども、サテ此要素を取得配合することは、根本的に他の要素を取るとは異つて、決して容易の事では無いから、從つて其の方法も種々雜多で造化の妙機は眞に嘆賞の外は無いが、その中にも最も興味のある事は、植物が自身に蟲の類を巧みに捉へて此要素を吸收することである、

吾人は屢瓶子狀植物が、その瓶子狀の葉の半分程を充せる液中に、蠅の類が溺死して居るのを見掛けるが、何人も多くは偶然の出來事として、深く注



意を拂はぬのである、けれども是は決して偶然の出來事では無い、即ち其液體は巧みに蟲類を誘引して溺死せしむる効用を具へて居る、それより其植物が食餌たる窒素を取得するので此種の植物は約そ四百種もあつて、植物學上では之を食蟲植物と名けられてある、

この四百種もある中で、此妙機の構造の最も顯著なるものはブラッダーワートで、之は池中若くば緩流のやうな、水の爲に流れ出す危險の少ない水中に蕃殖する一種の根の無い水草であつて、その水中に沒して居る細密なる葉の中に球狀の係蹄を有して居るが、葉の末端に濃密なる細毛が此係蹄の入口を蓋ふて居て、而して其附近を游泳する所の小虫が、食餌を渉獵するか、若くば避難の爲に此細毛中に突進すれば、再び其出口を求めんが爲に漸次前進し、遂には全く係蹄の中に陷るのである、斯くて一旦此處に至れば精巧なる係蹄の蓋は直ちに密閉せらるゝが故に、その捕へられたる所の犧牲は、前むも退くも

全く無益であつて、遂には奔命に斃るゝに至るから植物は徐々に分析作用に依つて、是より窒素を吸收するのである、

この瓶子狀葉の植物中でも、全く其構造の異なつたものが少なく無い、即ちバーヂニアの北部に產するものは、瓶子狀葉とは謂ひながら、殆んど薔薇狀の簇叢をなして泥土の上に瀰漫して居て、その幹は至つて短かいが、葉は常に水を貯へて居るから中々重いのである、全體この水は單に雨水に過ぎないのであれば、特別の作用を有しては居らぬ、けれども虫類の本能と云ふものは、蓋し此瓶子狀のやうな孔の間に集まるを好むものと見え、自然に誘入せられて、早晩此貯水の中に溺れて植物の營養を爲すに至るのである、勿論この瓶子狀葉の頂きの邊を彩る所の眞紅その他の色も亦虫類を誘引するのみでは無い、この植物の葉には一種の蜂蜜の如きものを有して居る者もあるのである、ソコデ虫が犧牲となりて一旦貯水中に陷るときは、その葉の表面が平滑であるから、虫は再び葉の上端へ昇ることは出來ないのである、假りに昇り得たりとするも、最早奔命に勞れたる虫は、その出口を防禦する所の濃密なる細毛に妨げられて、更に水中に陷るを免るゝ事は出來ないのである、

又バーヂニアの南部に產する或物の葉は、その形狀は全く前者と異なりて、莖より二三尺高く直立して、その頂邊に眼瞼狀の蓋を有して居るが、是は虫類を密閉するの目的では無くして、雨水の充滿を防ぐ爲である、と云ふものは若し雨水が滿る時は葉を裂き蓋を破るからである、カリフオルニヤに產するものは更に一層奇妙で、その係蹄の口が至つて小さくして車蓋狀をなし、その蓋の裏面には半ば透明の斑點があつて、簇がり來る所の虫は、此斑點を空處と誤認し通過せんとして、却つて眞の入口より係蹄の中に陷る裝置になつて居るのである。故に植物學者は之を僞窓と稱してある、

食蟲植物の中で最も有名なるものは、蓋しサンヂ

ユーと名くる植物である、是は主として廣く世界の各所に蕃殖して居るからで、その數は四十種以上あるとの事である、而して合衆國の東部に產するものは、別に幹と云ふものを有せざる美麗なる小植物で、その葉は長い薔薇狀をなしたる上端に、殆んど其直徑と長さを同ふする所の三四十本の毛狀線を有して居て、その毛端には各々粘液を含有する小球で圍繞せられたる、針の頭程の大きさなる細胞點を有して居る、是等の小球は綠と紅とが錯交して居るから、日光の之に映ずる有樣は、恰も紅綠の電燈を束ねたやうである、故に蚊蠅の類は皆この美觀に依りて引寄せられ、その集まるや毛端より分泌する粘液で巧みに其手脚や羽毛を縛して仕舞ふである、若し其强力なるものなる時は、其度合に應じて數本若くば數十本の共同動作で縛して、決して逃すやうな事はないのである、一體この粘液は單に捕虜用の武器であるばかりでは無くして、それと同時に精妙なる消化液の作用を有して居るのである、



毛狀線の共同動作が液體を多量に分泌して、犧牲の捕獲を容易ならしむると同時に、消化の效力を益々大ならしむるは云ふまでも無いが、此共同動作の範圍が廣まるに從つて滋養分吸收の通路も亦益々擴大せらるゝのあでる、而して此共同働作は極めて神速であつて、例へば、一の毛に依つて捕へ得たる際に、最も其に近いものが是に共同し參加するには、僅々五秒間であるとは驚くべきでは無いか、また犧牲たる虫が分解消化せらるゝは、同じくその物の大小と其性質の硬軟等に由つて異なるけれども、如何に大いなるものでも、約そ三十分間で充分に分解消化せらるゝのである、而して愈この犧牲を消化し盡したる時は、忽ち其滓渣たる屍骸を拋擲して、毛狀線は再び舊態に復すると同時に、消化の粘液を含有せし所の毛端の細胞球は、是また直ちに舊態に復して、更に新たなる犧牲を捕ふるの用意を爲すのである、是を以て見るも造化の妙機の如何に精緻であるかを察せらるゝのである、

# 歸省雜記（一）

中川愛氷

自分の行動は、忙といふ字の説明かと思はるゝ程であつて、然も驚かさるゝは電報といふ聲である、さて發信局の郷里ならざるを見て安心するのが例であるが、これは電報ならねど、いたく驚かされたるは、兄上よりの書信にて、父君の病重し、たゞ天佑を頼むのみ、といふのであつた、父君ことし六十六歳、近年殊に多病なれば、常に恐れたる電報に接したる如く、自己の存在を無意味と思はるゝばかり、落膽したのであつた、親しき友は前後の情況を判斷して、愛媛よりの書信、既に三日を費したれば、もし變事にてもあれば、今までに電報のなきことはあらず先づ安心せよなど、慰めてくれるのであつた、去ながら御病體の尋常ならざるは、疑ふまでもない事であるから、七歳になれる長女靜枝といふを連れて、急ぎ歸省することになつた、時は七月十四日、連日の雨漸く晴れて、しかも雲のたゞずまひ、頻りに雨を促して居る、

## 大井川の渡

午後六時發車すべき新橋に急げば、驛には鈴川と大井川は汽車不通との掲示があつた、而して驛員の語る所を聞けば、川は二つとも橋に異狀なし、水さへ退けば今にも開通すべし、併し今一便待たれなば、略開通の見込は立つべしとのことであつた、急げばとて不通と知りつゝ、一時間半の待たれぬことはなしとて、次の發車時間を待つゝその甲斐あつて大井川は開通せりとの掲示が出た、されば鈴川はいかにもして越すべしとて、不通承知といふ、心細き切符を買つて乘車した、靜枝は車外の夜景をおもしろ氣に送迎して、頗る興に入つたやうであつたが、いつか眠氣さして我膝にもたれたと思ふと、はやくも夢に入つたやうである、嬉しや鈴川も無事に越したり辨當々々といふ聲も景氣よき靜岡にて、夕餉したゝめんと、靜枝をゆりおこせば、いと心地よげに眠り

て、なか／＼目を覺さんとはせぬので、夜は更けたり、汽車に乘急ぎて、夕餉はおくれたれど、ひとり箸執らんも興なしと思ひ、辨當を買損ねたるが、後の話の材料となつた、

やがて夜は二時となり、程なく大井川も越さるべしと思ふと、忽ち汽車の運轉は止つた、いかなる事かと車窓より首を出せば、その川べりとも見ゆる方は、雨の中にかゞり火たきて、たゞ事ならぬ有樣であつた、兎角する程に汽車は退却して島田驛に停車した、車中の騷ぎは一方でなかつた、驛員や車掌を相手に、そこ／＼に談判は開始せられたが、結局大井川は不通、こゝにて下車するものは下車せよ、汽車は廿分を經過すれば、新橋に退却すべしとの事で、不通承知の切符を買ひたる人の、理屈を云ふ餘地はないが、乘客が金谷驛に連絡を求めんとするに就ては、何等の便利も説明も與へられず、予の如きは、果して大井川の汽車以外に越さるゝ便の有無をすら知る能はず、此處まで來たものをといふ位な事にて下車したのである、雨はます／＼降しきり、夜はいよ／＼暗き停車場に、まだ夢心地なる靜枝と、兎にも角にも東の空のしらむまでと、西の方をのみ眺めつゝ、待つ間のあはれは一通りではない、

かくて島田驛を後にしたるは午前四時、一輛の腕車も見當らねば、雨具を求むる便利もなく、左の肩には二個の手荷物を擔ぎ、右の手には足弱の手をひきて、半里ばかりの道を來れば、名に高き街道一の大井川、浪に嚙まるゝ船には掉さす人もなく、堤には立寄るべき小屋もない、木陰にでもよれば、なほ袖ぬらす松の下露で、なか／＼この川を越さんことは容易でない、されど引返さん勇氣もなく、暫らく川を眺めて居たが、見れば見るほど、物すごい水の流れである、

半時間ばかりを過ぎて、この堤に集ひ來る三々五々、七時頃には百人ばかりの數になり、四個の船にもそれ／＼船頭が乘込んで、いつにても對岸に渡さるゝだけの準備が出來た、船は薄板にて無造作に造

られたる支那の田舟とも見るべきもので、ひと波高く上れば船は沈むべく、ひと浪激しく當れば船は碎くべく、この船にてこの川を渡り得るかの疑問も起るのであつた、

この疑問の下より、一個の船は八人の棹に操られて岸を離れた、さしもの急流も、この船に對しては價なく、船は恰も水鳥の波上を蹴つて行く如く、棹の命ずるまゝに運轉さるゝのである、これを見たる人々は思はず拍手喝采しつ、其巧妙なる手練に驚きこれならば危險なし、とて船に乘るべく先を爭ふのであつた、そは此處の一分時は、金谷發の滊車に一日の乘後れとならんも知られぬからである、されど船は客を拒んで乘せない、

島田署にては、大井川の船頭等が、行人の難儀に乘じて、不當の賃錢を貪る等のことなどありてはとの懸念より、それを取締るため、賃錢を定め、監督の爲巡査を付して、通行人に能ふだけの便利を與へんとて、それ等の準備の整ふまで、渡船を許さぬのであつた、されど一刻をも先を急ぐものゝみなれば、賃錢は望むまゝに與へん、早く渡せよなどゝ談判を開始するのもあつた、かゝる所へ一行百人ばかりの學校隊、帽章に師の字あれば、いづれかの師範學校にて、生徒を連れての遠足であらう。この一隊無遠慮にて件の船に乘込み・人々の呆るゝ中に、我等は隊伍を組みたるものにて、賃錢の交渉も面倒なく、ほゞ警察とも交渉整ひたれば、早く渡せよとの事であつた、船頭等は警察といふ聲を聞きて、委細構はず船を出さんとしたのである、斯る所へ警官も出張したが、數時間雨中に立つくしたる人々は、たゞ學生等の乘船を羨むのみであつた、何の此の川の渡りたかるべき、止み難き旅にあるからである、

予は學校隊が無禮の擧動を見るに忍びず、今や乘船中なる監督らしきものに向つて、君等は見受くる所一刻を爭ふ旅行とも覺えず、既にこゝに集まれる中には、我等の如き幼兒を伴ひたるものもあり、老人をつれたるものもあり、一刻千金の急に赴くもあ

り、寸時の爲に千歳の悔を遺す人もあらん、もし君等より後れて來ればとて、我等に先づ渡船を讓るべきに、數時間玆に雨ざらしとなりたる我等に一言の挨拶もなくして、この振舞は合點行かず、早く下船して罪を謝すべしと云つた、而も彼等は耳を空吹く風に走らして、今や船は岸を離れたのであつた、予は更に師範學校の人々とも見受くるが、君等の敎へ且つ學ぶ道德とは如何なるものかと詰つた、されど彼等は依然として勝利を誇る如き有樣であつた。取のこされた人々も流石に彼等の無禮を怒つて、彼等の耳の聾るばかり嘲罵の聲を絞つた、予は無價値の嘲罵をなすを制して、來會したる警官に、利害を説いて、彼等の船を引返さしめんことを交渉した。警官は頷いて、直ちに船頭に船を引返すべきを命じた、勢ひ學校隊は上陸せしめられた、而して道理に伏して、彼等は最後に乘船することになつた、

漸く乘船したる予は、如何に船頭等に巧妙なる手腕ありとするも、萬一の過ちなしとも限らず、予一人ならば、また助かる術もあるべし、されど幼兒を伴ひたれば、船に過ちのありし時が最期なり、と思へばなか〳〵薄氣味わるく、淺瀨に漕付けたる時は、命を拾ひたる心地がしたのであつた。さてこの川を渡ることのむづかしさは、川の中に淺瀨ありて、そこは下船して渡らねばならぬのである、この瀨僅に一尺ばかりの水なれど、水勢强くして馴れぬ足にては渡れず、船頭の脊を借らねばならぬ予の、靜枝や荷物にまで手の屆きかぬるを、わが船に乘合せし警官は、予に向つて。君早くこゝを渡り玉へ、あとはお引受け申さんとの事であつた、予は力及ばねば其厚意に任し、次の船に乘りし時、荷物は一人の船頭に、靜枝は警官の脊によつて、無事に着したのであつた、此警官は靜岡縣島田署長警部中村健次郎君で、この警部あつて、其恩を蒙りしものは、予一人に止らず、汽車不通中の大井川に、行人は少からぬ便利を得たのである、

## 金谷驛

辛うじて大井川を渡りたるが、こゝもまだ大井川の部分なるべき沙漠が、向ふのかすみて見えぬほどの道程で、をやみなき雨の道中を、例の道づれに荷物、これが急ぐ旅路にある身かと思はるゝばかりで、案じる程にもなく金谷堤に着いた、沙漠の盡くる所にも亦川ありこゝも船にて渡り、これより金谷驛となれば、金谷堤といふは予が假に付けた名である、この堤にて關所やうの見張所をしつらへ、こゝにて渡船賃の支拂をなし、途中にて間違なき注意なか〳〵行屆いたものである、




この堤へ上れば、驛の女だち、荷物擔がして下され子供負ぶさして下され、と・いふは渡りに船と、それぞれ用を命じたるが、靜枝は途中にて、路傍に人の見るを氣にして、徒歩したしと云ふ、此處まで來れば腕車の便もあれば、望むまゝに歩ませ、滊車の便利を圖りて、停車塲前の旅館に

入り、そこにて身體を拭き、衣服をとりかへて、漸く打寛いだ時は午前九時半、島田を出てより五時間餘の雨ざらしに、殊の外疲勞し、俄に空腹を覺えたれば、その仕度を待つ程もなく、西行は今發車といふ騷ぎ、又食事を仕損ねたるが、汽車には誂へたる如く間に合うたのであつた、もし大井川にて學校隊に先を越されたならば、一日多く途中にて氣を揉まねばならぬ事になるのであつた、されば予の一言によつて、此の列車の間に合ひし人々は、予に向つてお蔭さまで助かりましたと喜ばれ、思はぬ人の世話になつた予はまた、思はぬ功德をした事になつた、さて書忘れたが、大井川の渡船賃は、僅に六錢であつた、



## 新刊紹介

### 現代受驗法　　成功雜誌社編　同　發行

成功雜誌社が機を見るに拔目なきに先づ驚かざるを得ず、本書は成功の一材源として、判檢事試驗、辯護士試驗、高等文官試驗、外務書記生試驗、醫術開業試驗、文部檢定試驗に關し、各試驗委員と各方面諸名士の所說を集めたるものなり、もし如上試驗に應ずるものにして、本書を翫味し會得せば、落第の災は免るべし、而して猶且つ落第するものは、其人落第の資格を有せるものにして本書の罪にあらず　（定價三十五錢）

### 婦人問題　　堺利彥著　金尾文淵堂發行

本書は著者が女子を買被りて、あらゆる問題を提起したるものなり、否著者は買被るほど女子を知らざるものにあらず、寧ろ女子なるものを最も多く知れることを信ず、而して著者が問題にしたる何十何ヶ條は相當の理由あるあり、文章の勁妙なるが故に、面白く讀まるゝなり、去ながら遂に理屈なり、所謂木の股にもつくと云ふ理屈なり、面白く讀まるゝだけが罪ふかきなり、吾人とても女子の幸福を願はざるものにあらず、併しながら著者のは最負の引倒し也、たゞ出來ぬ相談をして女子をオダテルに過ぎず、誌友は著者の文を面白く讀むべし、其說を取らざるべきを信ず　（定價四十錢）

# 女子教育講演會

## 第壹回講演筆記

さる六月廿二日本社の催にて開會したる第一回女子教育講演會は、七月號記載の如くなか〱盛會にて、前號紙上より其筆記を掲載して、來聽せられざりし誌友諸嬢の一讀に供すること丶せり、讀みもてゆけば、講演諸先生が、諸嬢の面前に快辯をふるはる丶如き思ひあるべし、

## 折にふれたる感想（承前）

法學博士　和田垣謙三

此婦人といふものは、即ち前の鷄の話に返つて見ても、何うしても婦人といふことを忘れてはならないそれに就いて我輩は思出したが、英國に先年歿したロールドテニシルといふ有名な詩人があつた、此人は英國近世に於ける大詩人、又世界に於ける大詩人と云つても宜い、私も一度尋ねましたが、アイロフワイトといふ處に立派な家がある、生憎私の尋ねました時に先生が御不在で會へなかつたから、まづい詩を玄關に置いて歸つたことがある、此人の婦人教育に就ての詩がある、今一々それを覺えて居りませぬが、其原稿を讀んだ所で多數の御方には解らぬ、大體を言うて見ると、男女といふものは、詰り利害を一にして居るものであるけれども、婦人は奴隷の如きものに墮落するか、或は然らざれば天女の如き高尚なもので

ある、婦人といふものは身體も小さく、頭も小さく、誠に惘れ果敢ないものであつたならば、如何にして男子ばかりが獨りで先に行く、獨りで高きに登る、獨りで遠くに行くといふことが出來やうか、どうしても旅は道連れ世は情、男女互に同情を以て交はらなければならぬ、そこで婦人の教育は目下の急務であるが、併しながら婦人の特性を失はない範圍に於て教育を施せ、教育を受けろ、如何となれば婦人といふものは決して男子の未成品ではない、婦人といふものは不完全な男ではない、婦人は別なものである、婦人は婦人として完全なものである、男子は男子として完全なものである、そこでどうかするといふと、此處も足らぬ彼處も足らぬと云つて、足らぬ所を附加へて男子と同じやうにしてしまはうと云ふので、婦人を教育で以て責付けて、さうして即ち先づ目出度教育が濟んだといふ徃つて見るとまるでモウ婦人の俤も婦人の心掛も去つてしまつて、堂々たる男子と同じやうになつてしまつて居る、それでは愛想もこそも盡きてしまふ、即ち愛といふものが消えてしまふ、何故ならば、眞の愛情といふものは決して同じものが二つ落ち合ふものでない、所謂違つたものが夫婦となるのだ、全く似て居れば夫婦になる必要がない、女同志夫婦になる必要がない、全く似て居らぬから夫婦になるのだ、そこで互に異つて居つて、又其處に於て意氣が投合する、それでなくてはならぬ、併しながら又斯ういふことが一つ要る、即ち男子は男子、女子は女子としても互に幾分か學ばなければならぬ、男子といふものは女子から學ぶこともあると同時に、婦人も亦男子から學ぶ處がなければならぬ、例へば婦人は自らやさしく、男子といふものは自ら粗つぽいものだ、其やさしいといふ心根を男子が幾分か婦人から受けて宜からう、又は德義上に於て高いこと高尙なる心術上に於ても、男子は婦人から幾分かお裾分けをして貰つても宜からう、然しながらそれで婦人に成つて了つてはいけない、一朝事あるとき、卒ざ鎌倉とならば、其腕力と其權幕と其威勢といふものを失つてはい

けない、又婦人といふものも、男子に學ばなければならぬ、精神的にだ、今日の婦人といふものは、私は時々細く長くとか、太く短くとかいふことを云ふが、我輩の見る所では失禮だが今日の婦人は余程横の方が廣くなつて來る。細長主義よりも寧ろ太短主義で、脊くらべなら、横つ丁に來いといふやうな雲岳女史の仲間がなか〱多い、是は全く營養物が宜かつたり運動が宜い爲だらうと思ふ、之を衛生美といふのである、餘り細長主義でどうも柳の下に立つて居らなければ恰好が取れぬといふのでは困るから寧ろ挽臼の代りをするやうな頑丈な方が宜いかも知れぬ、それは身體のことだが身體はどうでも宜い、詰り大切なのは精神だ、精神上の廣さ、精神的の水平線がもう少し廣くならなければならぬ、四疊半に坐つて居るやうな心持では、決して五大洲は歩けない、火鉢の傍に坐つて猫と睨合つて、煙草を吸つて居たならば、迚も世界的競爭は出來ない、だからして婦人は男子から幾分か學んで、其頭、其精神の幅を廣めて貰ひたい、併ながら又婦人である以上は、



一方に母といふ務があるから、子供に對しては其注意、其愛情といふものを失つてはならない、又婦人といふものは、如何に學問が出來ても、如何に美人であつても、幾らか子供のやうな無邪氣な處がなくてはならぬ、古人が男女を問はず大人は赤子の心を失はずと言つたが、殊に婦人といふものは何處かに子供らしい無邪氣な性質が必要である、頭が如何に大きくなり、頭が如何に男になつても幾分か子供らしいやうなやさしい無邪氣な處を失つてはいけない、そこで互に宜い處を少しづゝ取る、さうして此男女といふものが相寄り相助けて、夫唱へ婦和して行かねばならぬ、さういふ意味の婦人に對するテニソンの詩がある流石は大詩人だ、又流石は一種の理想家である、又流石は英國人である、英吉利の家庭といふものは亞米利加のそれ、獨逸のそれなどとは同じ歐米と云つても、多少異にして居る、殊に近頃日本でもよくホームといふ言葉を使ふが、あれは英吉利の言葉で、外には其言葉がない、言葉のないのはどうでも宜いが、其物が寧ろ比較的に乏しい、そこで彼の英國人の好んで謳ふ所の故鄉を懷ふ歌といふものは、英吉利人の胸の眞底から出る、婦人も歌ふ、子供も歌ふ、白髮の老人も歌ふ、貴賤貧富の別なく、都も鄙も到る所、英吉利人が此歌を歌ふ、實に英吉利には類なき美はしきホームがあるのである、其中に於て婦人といふものはナカ〱大切なる要素となつて居るのである、ナカ〱隅には引込んで居られない、さうして男子は天下の事で以て自分の頭腦が張切れやうとする、いざとなれば屍を馬革に裹むといふやうな譯で、戰場に赴く以上は家を忘れ身を忘れて、君國のために盡さなければならぬ、けれども幸にして凱旋する時は其日の仕事を終へて家に歸る、其時婦人が所夫の顏を見て、我が所夫は今日は是丈の心配をした、今日は是丈の働きをした、實に滿足であると、其顏を見、其話を聞いて十分にそれを慰藉し、同情を寄せて良人を助けて行く、其處に於て眞のホームといふものは出來るであらう、

我輩は曾て、婦人は女蘿なりと云つたことがある、女蘿といふものは日本でいふと蔦蘿見たやうなものだあれが女性的のもので、支那では女蘿と云ひます、山に行くと雄松雌松、雄竹雌竹、雄梅雌梅、—雄梅雌梅といふものはないね、そこで男子といふものは、日本で云へば雄松だ、堂々として天にも屆かんばかりに聳えて居る、實に大變なものだ、處がどうかすると、此松はポキンと折れる、其處に雷が落ちるとか、或は大風が吹くとポキンと折れるやうなことがあつて、其態はあはれなものだ、處が隨分山奥に行くと、其松に絡らんで居るものがあるが、あれは何でせう、即ちグリーパといふ一種の蔦が巻付て居る、松は常磐木で、春夏秋冬、四季其色を變へない、其代り稍々單調だ、然るに秋になるといふと、松に絡みついて居る、其蔦が所謂紅葉して其青い所に持つて來て、或は黄に、或は紅に彩をつける、松は益々綠に見える松ばかりでは少し不細工に見えるけれども、其れあるが爲に、誠に美術上一種の趣味が加はる、そこで一朝暴風雨があるとか、雷が落ちて來た時には益々堅く、其蔦葛が絡みついて、丁度兵隊が戰場で怪我した時に、看護人が繃帶して卷くやうに、即ち身體に絡み着いて居るから、枝が折れても離れずにくつ着いてゐる、其態が却て風流で、即ち夫婦の關係も是と同じであつて、一朝事有つて所夫が戰に出て負傷する、或は戰ばかりでない、商賣で株の上り下りで損をするのも一種の負傷だ、さういふ塲合に氣の弱い者は、華嚴の瀧に往つたり、或は腹を切つたりするから、妻君がそれを慰藉する、七度轉げて八度目に起きるといふことがある、あなた男子ではありませぬか、斯んなことで負けてはいけませぬ、私が傍に着いて居りますと、やつて御覽なさい、或は角力でもさうだ、梅ケ谷と常陸山の取組になると、梅ケ谷の女房があなた負けてはいけませぬ、若し負けたら角力を廢めておしまひなさい、神に願を掛け、神樣に約束をする、神とかみさんだ、女房に勵まされて土俵に出る、サー來た、ナーニ負けるものかといふので精神が滿身に

入つて居る、それだから天下一の常陸山の如きも首尾克くやられたではないか、是は議論ではない事實である、だから婦人といふものは、自分が土俵に出ないけれども、所謂雌鷄助けて雄鷄時を作る、雌鷄が助けて雄鷄が勝利の凱歌を謳ふことが出來る、其處に至つて男子は願くは雄松の如くあれ、而して婦人たるものは宜しく女蘿の如くあれといふのは、何んと一種の味ふべきことではありませぬか、而して蔦葛といふものは、決して一本立で出來るものでない、何か木があつて、其木に依つて中には隨分一丈でも二丈でも往く、動もすると山奥の谷底に何も便るものがないから無理に一本立になつて居る松があるが、其恰好が惡い、風が吹けば誠に危ない、それが不幸にして、或は自分の便りにして居つた木が枯れてしまつたといふ場合は、女蘿が操を立てゝ、決して外の木には着かぬと云つて、さうして亡き夫、昔の夫を懷うて、獨り立つて居るのがある、即ち是が前に云ふた『けふのみと見るに涙の增すかゞみ』といふ歌を詠んだ婦人の如き境涯に陷つたのであらう、是は變則です、誠に是は憫れむべき話だ、それを本則と心得て、どうも男子はいかぬ、妾の亭主とすべきものはない、あんな男は感服せぬ、妾は獨立主義であるなどゝ獨身主義と獨立主義と間違つてはいけない、自分は獨りで立つた積りで好い氣になつて居るけれども、葛が獨りぼつちで危なさうにヒヨロ〳〵して居るのは見つともないものだ、

　そこで初めに歸つて婦人といふものは、內助者である、男子といふものは外に出て立ち働くものである、即ち婦人は男子に負けるやうであるけれども、負けるは勝つといふこともある、又家に隱れて居るやうであるけれども、隱れたるより現はるゝはなし、實に婦人は柔であるけれども、柔よく剛を制すといふこともあるだ、して見れば婦人たるものが、男子に向つて競爭心を起したり、藩閥打破だとか、女權擴張だとか、甚しきは、女尊男卑が原則だのと、そんなことを云つてはいけない、婦人は何所までも婦人といふ

ことを記憶して、さうして其範圍内に於て、十分に運動の出來る、活動の出來る樣にしなければならない。

話は大層長くなつたが、和田垣は自分極めの議論だ、時勢後れの議論だ、東洋的の議論だ、今日のハイカラの説ではない、彼は新智識がない、五ヶ條の御誓文には廣く世界に智識を求むるといふことがあるが和田垣先生は智識を世界に求めないのだ、亞米利加や歐羅巴に行つてそんな議論が出來るか、吾人も東洋の婦人だ、出來るならば亞米利加でも歐羅巴へでも行つて、婦人を相手にさういふ議論を云つて見ろといふか知らぬが、我輩は現にやつたのです、自分で云ふと可笑しいが、それが正當な議論であつた、決して女子から頌徳表などは貰はなかつたが、私の手を握つて實に御同意だ、實に正々堂々だ、吾々の本分に就て御説明になりましたのは實に嬉しい、と大に隨喜の涙をこぼした、我輩がどういふ事を言ふたかならば話が餘り議論になるから、具體的に言ひます、指輪の話をしませう、今は指輪をはめて居る者は割合に少ないけれども、歐米では男女を問はず皆指輪を嵌めて居る、日本でも男子も嵌める、是は古い話で、坪井博士などは能く調べて居らるゝことゝ思ひますが、古い神代の頃から起原はありませうが、是は西洋などには指輪と云つても種々あります、我輩は其中の一つに就てお話をするので、西洋にはウェッディングリング。と云つて、結婚の時に用ゆる指輪がある、私も英吉利に居る時に結婚式に列しましたが、其時に花聟さんの極の親友が指輪を持つて、其處に附いて居る、そこでお寺でやるのだから坊樣が其指輪を持つて、汝は彼の女を娶るといふことを言つて、花聟さんに其指輪を渡す、さうすると花聟さんがそれを持つて、花嫁さんの指に箝める、それで夫婦の約束が出來てしまふ、是は正式の結婚には必ず無くてはならぬ所の指輪であります、何の爲めに花嫁さんの指に之を箝めるか、其指輪が抑も如何なる意味を有つて居るか、それを一つ研究して見たら、是は只裝飾的に使ふものでない、其外に何か意味がなくてはならぬ、或人は曰く

それは造作ない、指輪といふものは圓いものだ、而して何處が始めで何處が終りか分らぬ、始めもなく終りもない、夫婦は偕老同穴で何時までも圓く治まつて行かなければならぬ『お前や百まで私や九十九まで共に白髮の生えるまで』、さう云へば尤のやうであるが、併しさうではない、是は諸君が好んでも好まなくても、藥は飮まなければならぬ、安阿川餠を澤山食べた後では少し辛い唐辛の利いた物も食べなければならぬ、此指輪といふものは、今日こそ指輪と云ふけれども、其實は鎖です、鎖といふものは幾分の輪を以て出來て居る、捕虜の如く、罪人の如く、鎖を以て縛る、之を束縛といふ、是で縛つたらもう自分は其人に隷屬したものです、其人に專屬したものです、其人の許を得ない以上は無暗に飛んだり跳ねたりすることは出來ないものである其人に一生身を任したものである、そこで即ち未來の所天なるものが其未來の細君に向つて、指輪を嵌めるといふものは詰り其人の一生を引受けた其代り一生お前を養ひ、一生お前を愛する、助けるといふことなんです、即ちウエッディングリングを以て自分の身を束縛されたのです、即ち其處に於てゞす、此無言の指輪といふものは、千言萬語に優る處の一の敎訓を其花嫁に語るのである、今日は唯裝飾的に或はダイヤモンドの指輪だとか、是は何千圓だとか、唯球の光るのを見て喜ぶものがある、それも宜いが、兎に角歐羅巴に於ては、其意味に於て結婚式に用ゐる、指輪といふものはさういふ一の深遠高尙なる處の無言の說敎があるぞといふことを、唯御參考の爲めに諸君にお話して置く、

それから今一つは帽子のことです、日本では是迄婦人は帽子を餘り冠らなかつたが、近頃は段々冠る、女でも少さな子供などは冠つて居る、此處にも帽子を持つて居る子供が居るがナカ〳〵可愛いものです、頭髮なども近頃西洋式になつて、二〇三高地だとか或はどうも斷巖絕壁などいふ、いろ〳〵新らしいものが出て來た、併しあゝいふものは、帽子も要らぬといふ議論がある、だらうけれども流行は追々變つて來

るから、あんな頭にも婦人が何か帽子を戴くといふことになるかも知れぬ、して見れば婦人の帽といふものは、どういふものであるかといふことを考へて見るのも無用ではないと思ふ、そこで今日男子が帽子を冠つて居るが、私が帽子を冠つて諸君にお話をしたならば失敬な先生だと言ふだらうが、併しながら茲に例へば私が軍人で、大將か何かで、昔の臺灣征伐とか朝鮮征伐のやうなことをして歸つて來て此所に凱旋祝があると致しませう、宮女花の如く寢殿に滿つ、其處へ我輩が大威張でやつて來



る、其時には兜を被つて居りますが益々此紐を堅く締めて居る、兜を脱いで手に提げて居ては一向威光がない、さう云ふ場合には兜を冠つて居ても決して失敬ではない、又或は神主のやうなものは、烏帽子を冠つて直衣を被て神前に出る、誰も之を失敬とは認めませぬそれから坊さんが引導を渡すといふ時には、それ〲ちやんと帽子を被つてやつて居る、あの時に失禮だなど〻云つて帽子を取つて御覧なさい、誠に見つともない、だから帽子を被るのは禮です、總て人は肌

を出すのは失敬なことです、歐羅巴人は手にも手袋を箝める、西洋の婦人は猫に紙袋を被せた如く、ヴエールで以て顏を隱す、所が西洋の婦人は胸を出したり、腕を出したりする、白粉をコテ〳〵塗つて、それだから時々風邪を引くです、併し婦人は部屋に入つても帽子を取らぬ、道で會つても取らぬ、是は取らぬ方が禮なんです、そこで抑も帽子といふものはどういふものであるかといふと、總て身體を剝出しにするのは失禮だ、そこで人の前に出るには、皆それ〳〵着物を以て身體を包む、果して此身體を包むといふことが禮ならば、頭も身體の一部分であるから頭の裸といふのも失禮ではないか、だから本當の理窟から云ふと頭のてッぺんから足の爪先まで、總てチヤント包まなければならぬ、そこで頭を蔽ふものが帽子、手を蔽ふものが手袋、足を蔽ふものが足袋、身體を蔽ふものが着物といふ譯で、總て蔽ふてしまふ、それが正式なんです、所がどうもお暑うございますから足袋をお取りなさい、羽織をお取りなさい、袴をお取りなさい、片肌脫いで御免蒙りますなど丶云ふのは無禮極まる話だ、帽子を吾々が取つて居るのは無禮だけれども、是は習慣で御免を蒙るといふので、勝手に暑苦しいから取つて居るのだ、所が婦人といふものは何處の席でも帽子を取るに及ばぬ、歐羅巴では帽子を冠つたまゝ飯を食つてもおかしくない、人の前で別に帽子を取る必要はない、それはどういふ譯であるか、即ち婦人といふものは矢張り男子よりは謙遜の態度を執つて、男子は御免を蒙ると云つて帽子を取り、着物を脫ぐが、婦人はさうはいかぬ、又人の前に頭を剝ぎ出しては失禮だ、それだから人の部屋に入るにも帽子のまゝ入る、何んだ西洋の婦人は無禮だ、人の部屋に入るのに帽も取らぬと云ふが、それは間違つた話で、婦人は取りたいけれども取れないのだ、それだから小さくなつて控目になつて居るのです、是が婦人の帽子に就ての說明だ、だから諸君が男女同權だとか、或は女尊男卑だとか言つて、飛んだり跳ねたりしては宜くない、指輪が諸君に何を語るか帽子が

諸君に何を語るか、即ち婦人は如何に教育が進んで來やうが、決して男子と同じやうになつてはいけない、婦人は婦人として立つて行かなければならない、若し日本の婦人が後來帽子を冠るならば、帽子を取らぬ方が宜い、

もう大分時間が經ちましたからモウ一言で止めませう、或る西洋人が婦人に有らゆる尊敬を以て三つの教訓を與へた、前と合して御覽なさい、照應して居るから、それは婦人といふものは三つのものに、能く似なければならない、さうして又似てはならないと云ふのです、隨分六ケ敷注文だ、それはどういふことであるかといふと、先づ第一には婦人といふものは蛇に似なければならぬ、蛇といふものは隨分控目のものです、餘りノコ〳〵出て歩くものでない、ノコ〳〵出て歩くといふと人に踏まれたり何かする、蛇といふものは一定の居所がある、其點に於ては、寧ろ蛇に似なければならぬ、けれども蛇の如く出て歩く時に身上一切、不斷着も餘所行きも、有らゆる着物を脊に脊負つて、蛇の着物は蛇紋といふ立派なものだ、是は白木で拵へた、是は三越で拵へたなどと云つて、是れ見よがしに着て威張つて歩くのはいかぬ、一つの點に於ては蛇に似る、一つの點に於ては蛇に似るな、解りましたか、第二には婦人といふものは反響に似ろ、所謂響きの聲に應ずる如く、人がオイと云つたらハイと答へる、其點に於て反響に似ろ、併しながら答へるべき時に答へる話で、一々何事にても出て來て答をしてはいけない、へらず口を云つて一番仕舞に口返答をして、最後に長舌を振廻して勝利を得るといふやうな風に、一々口答をしてはいけない、第三は婦人といふものは、彼の外神田や銀座邊にある大時計、あれが二六時中少しも休まずにガン〳〵と時を報ずる、あの大時計に似ろ、チャンと規約正しく約束を重んじて、傍目も振らず豫定の行動を執つて往く、其點に於てはお前さん方が彼の時計の如くあれ、けれども婦人は何處までも婦人だからして、大時計の如

く何十町四方にまでも聽えるやうなガン〳〵ジャン〳〵近所合壁鐵棒を引いて歩いたり、井戸端會議を開いたりして騒いでは困る、其點に於ては大時計に似てはいけない、此は隨分皮肉な言ひ方だけれども、其皮肉な云ひ方も所謂可愛い子には旅をさせろで、婦人に充分なる同情を持つが故に云ふのである、丁度我輩は甘草だ、醫者の用ゆる甘草は甘いけれども、我輩の甘草は苦い、併し苦い中に又甘い所がある、甘い所に又苦い所がある、是は近頃參つた二十世紀の議論だから、其お積りでどうか十分御咀嚼を願いたい、胃の腑に容れたならば、必ず毒にもならなければ、或は七十五日或は七十五年も御長命になるかも知れない、さうなれば實は我輩は咽喉を痛めて居るので、御聽苦しうございましたらうが、我輩がそれを忍んで此處へ來て諸君に御話をした効能もあらうと思ひます。

## 諸人種男女の分業

理學博士　坪井正五郎

人間とは如何なものかと云ふに、一口に出來の惡い瓢簞に四本の棒を付けたやうなものである、而して此の人間には、第一に個人的相違、第二に大小即ち年齡の相違、第三に男女の相違と云ふが如く、その差異が種々に岐るゝ、けれども第一の個人的相違即ち賢者と云ひ愚人と云ふも、もとこれ程度の問題であれば、是を以て人間の價値を定むることは出來ない、また第二の年齡に因つて長幼老若の區別はあるとても、是また第一と同じく程度の問題であるから、矢張り人間の價値を定むると云ふことは出來ないのであるが、此に一つ人間の價値と云ふよりも、その差異の點に於て決して變らないものが一つある、それは第三の男女の性の別である、こればかりは太古の昔しより今日に至るまで、國の文明なると野蠻なるとに關

はらず決して男が女になつたり、女が男になつたと云ふやうに變りはない、

而して文明國では、男子よりは婦人の方が身の周圍の裝飾に意を用うるが、之に反して未開國若くば半開國では、女子は多く自然の儘で居る、けれども男子の方は種々に意匠を凝らすのであるが、この點は餘程禽獸に似て居る、一例を擧げるならば、濠太利亞の野蠻人を見るに、男子の肉躰の裝飾を盛んにするので、元より衣服はないから裸躰であるが、植物の葉で鉢卷をしたり、赭や白い土などを身躰に塗るのである、また胸間にはエボレットのやうに傷痕をつける、これは裝飾的觀念と一は郷里を表示する爲めであるから、中々その傷痕は小さくない、隨分大きく目立つのである、更に斯ういふ野蠻人中にも奇妙な習慣があつて、まづ我國で云へば元服する、一人前の者となるには、一の强情試驗とも云ふべきものがある、例へば、その試驗さるべき男は手に石を確く握つて、それを多勢の者が奪ひ取らうとするを防ぎ、縱んば指を折らるゝとも平氣で居るとか、或は鬚を一本づゝ拔いても顰み面をしないとか、又は人が側から幾ら話しをしかけても決して一定の時間中は口を開かないとか云ふやうに、隨分我々より見るときには馬鹿氣きつた眞似を爲るのである、是が未開男子の子女に對するプラウドなので、手取り早く云へば、傷痕の澤山ある男子に女子が戀すると云ふやうな風である、少々話しが橫道に這入つたが、是から未開人種に就て男女分業の面白い話を紹介するとしやう、

アイヌは今でこそ、粟、稗、麥、或は鳥獸魚肉を食つて居るが、以前は山に登つて百合の根を掘り出しその澱粉質のみを食つて居たのである、而してその採收は誰がするかと云ふに女子の仕事になつて居た、それからアイヌの着る衣服のアッシと云ふものは、內地で云ふ楡の木の皮を裂いて水に晒して細くすると麻のやうなものが出來る、それを簡單な機織道具で織る、その木を伐り出し皮を裂くのは男子の仕事であ

るが、水に晒して糸のやうに紡ぎて織り、衣服に仕立てるのは女子の仕事で、且つ之に內地から這入つて來る木綿糸の類で唐草模樣を縫ひつけるのである、アイヌは總て山より飲料水を搬ぶので、この水汲は隨分力を要するのであるが、是は女子の仕事になつて居るので、脊に四斗樽のやうな大きな桶を負ひ、細紐のやうなものを以て、背後へ倒れないやうに頭圍即ち額の邊に結びつけて遠き山より運で來るのである、

次にアイヌ人種の出產は女子がする、かう云ふと諸君は何人種だからとて、兒を產むのは女子に定つて居る、男の產む所が何所にあるものかと云はるゝだらうが、成程それは男が出產したと云ふことは未だ曾て聞かないのであるが、アイヌの女は肉體だけを產むので、精神は男子が產むのである、だから男子は出產時になると、自分も女子の側で床に臥してウン〳〵云つて呻つて居るのである、若し出產の時に男が外へ飛廻つたりすると、生れる子供が惡戯者になると云つて居る、然るに內地では如何と云ふに男は出產時になると外へ出る習慣がある、是はアイヌの方がいゝかも知れぬ、南亞米利加の或地方にも之と同一の風俗がある、

アイヌでは子供が追々と成長すると、男子は衣食住を求める外は歌を習ふ、けれども別に樂器は無い、女は只男の謠ふのを聽くのみである、併し熊祭になると男女ともに踊るのである、葬式は別に宗敎もなければ極簡單なもので、死骸を筵に裹んで淺い穴を穿つてザツト土を被せるのみである、それ故に少し暴風雨でもあれば直ぐ露れると云ふ風だが、その墓標と云つても別に文字が記してあるではない、けれども男子の墓には鎗の如きものを立て、女子の墓には機織器の一種を建るから、男女の區別は直ぐ分別るのである、

少しかけ離れた濠洲の野蠻人は、常に鳥の巢のやうな中に住んで居るが、此所には水を汲みとるに器物

がないから、水のある所に家を構へ、そこに無くなると又水のある所に移轉する、所謂水草を趁うて移轉するとは此事である、

また米國の極北エスキモー人種の居る所は、世界中一番寒い土地であるにも拘はらず、火と云ふものが無い、全く無いと云ふではないのだが、乏しくて貴いものになつて居る、と云ふものは元より植物がないから、海岸に流れて來る木片を拾ひ、之を乾燥して摩擦の結果火を起すのであるが、アイヌのやうに何時までも之を燃しておくと云ふことは出來ないのであるから、魚油或は獸油を燃し、食物を煮る時になると、その火の上に獸皮の鍋をかけるのである、材木がないから、大抵のものは獸や魚の皮で作るので、天幕の如きも馴鹿の皮から造られてある、船も骨は鯨の骨で、外皮は獸の皮であるが、面白いことは男子の乘る船と女子の乘る船とは違ふので、男子のものは蓋があつて一人より外乘ることは出來ない、けれども女子の船には蓋がないから幾人でも乘ることが出來る、且つ荷物も積み得られるから、一見して區別がつくのである、斯樣に植物が少いから遇々穀類や野菜類を白色人種から得ることがあると非常に喜ぶのである、先年ある野蠻人が米人から大豆を貰つたが、元より之が調理法を知らないので、生のまゝ滿腹喰つた上に水をガブ〳〵と澤山飮んだものだから、耐つたものではない、豆が腹の中で膨れて、遂に腹が裂けたと云ふ奇談がある、

中央アフリカの内地に這入ると、男は女のために衣服を作つて遣らねばならぬのである、而して若しも綻びでも裂ても、不注意である不親切であるとの理由の下に直ちに、離婚を請求せられるのである、これ位の勢であるから、女が機を織つたり衣服を縫つたりすると、彼女は男の眞似をするからお轉婆である、女らしくないと云つて排斥せられる隨分變れば變るものである、

またアフリカの西部ダホンといふ處に行くと、兵士は女子の職務になつて居て、男子は其名譽に預ることは出來ない、是こそ眞箇の娘子軍と云ふべきである、

以上述べた所に依りて考ふるに、諸人種男女の分業と云ふものは、之を二つに區別することが出來る、即ち一は男子が面倒といふので女に命ずるものと、一は女子の性質および體格上自から好んでするものと、此く二つの分ちはあるが、その孰れなるを問はず必らず分業と云ふものは行はれて居るので、決して一方といへども手を拱して居るものは無いのである、

編者曰く、坪井博士の講演は一時間餘に亘りたるが、速記者より其筆記を紛失せし由なるに、折あしく同博士も樺太へ旅行中なれば更に講話を乞ふことを得ず、聽講したる編者の記臆をたどりて、其の梗概を掲載することゝせり





# 詞藻

## 佐々木信綱先生選

和歌兼題　秋夕

### 天

夕栄にゆくや花野の市女笠
笠かたむけて富士仰ぎつゝ
横須賀　柏原みな子

### 地

亡き母のかたみの小袖いだし見ぬ
思出多き秋の夕暮
神奈川　山本久代子

### 人

をしねほす田川の末の水車
ひとりおとする秋の夕暮
埼玉　横田やな子

### 秀逸

夕日影子のなくかたへ賤の女が
手もとせわしくをしねかりゆく
東京　小林芳子

評　早乙女や子の泣く方へ植てゆくの句より脱化せるものか

ふるさとの母なつかしき夕ぐれを
かりなき渡りあき風の吹く
東京　松原岑子

ほろ〳〵と萩ちる窓のあきかぜに
亡母しのぶ旅のゆふぐれ
岩代　岸野常子

さらでだにさびしき秋を夕暮の
東京　中村千代子

空にぞひゞく入相の鐘　　埼玉　横田秋子

ほろ／＼とむかごこぼるゝおとはして
夕日さびしき庭の袖垣　　東京　よしの子

詩知らぬ人も愁を知りつらむ
色すみ渡る夕暮の秋　　能登　粟倉すみれ子

いひ知らぬ淋しき影のたゞよひて
吹く風さむし秋の夕ぐれ　　伯耆　錦織よし子

やけ跡の一本柳枝折れて
月にうなづく尾花一むら　　大阪　木村春江子

又してもゑ筆をすてゝ雲の色に
思なやます秋のゆふぐれ　　秋田　古瀬りく子

ちからなきあきつとひ行くかげみれば
なほたへかたきゆふへなりけり　　伊賀　佐々木いすゞ子

韓山の脊の君おもふこのゆふべ
秋のこゝろのさびしくもあるか　　韓國　原野みき子

何となく悲しげせまる夕暮を
秋雨細う萩の花散る　　東京　西村直子

いづかたに身をばのがれん奥山の
いはほの中もあきのゆふぐれ　　肥後　友永常子

みどり子か乳をほしげになくこゑも
いとゞかなしき秋の夕くれ　　備後　杉原衣子

乳に飢うる子をすかしつゝうなゐ子の
母まちかぬる秋の夕暮　　廣島　角倉しの子

うたげはてゝ一人歸さの小萩路

御歌のまゝの月をあふぎぬ

東京 平塚 白百合子

小鹿なくこゑもしづみてたそがれぬ
ふもと一里はすゝきなびきて

兵庫 梶原 京子

靈場の石ざか降る順禮に
鵑なく秋のゆふぐれの空

# 甲

○ 松山 田村多豆子

なにとなくかなしき秋の夕暮をおのが時とや露もおくらむ

○ 秋田 古瀬惟子

かみのもりの大木はなかばきりこめてねくらたづぬる夕がらす哉

○ 奈良 栗山俊子

旅僧のかどにやどこふこゑのしてこざめふりしく秋の夕ぐれ

○ 東京 山本しづよ子

やり水のみづ音そひてなくむしのこゑおもしろき秋の夕や

○ 越後 水野やすゑ子

ことさらにあかりをけちてさゝ窓に暮れ行く秋の夜の雨きく

○ 磐城 木幡きよ子

桐の葉の落る影さへさす窓に鹿の音通ふ秋の夕暮

○ 東京 小島榮子

なくさめむかたこそなけれ野も山も見わたすかぎり秋の夕くれ



○ 東京 原三幸子

入相の鐘もこゝろにひゞくなりうきよをあきのわかみなれども

○ 東京 松本まつ子

よの秋をわびて入にし山にてもうきははなれぬあきのゆふぐれ

○ 東京 河合清子

よばなれし山の奥にもうき秋のあはれはしるやそでのうへのつゆ

○ 秋田 細矢はる子

こひしさのゆめをも長くむすばるゝ秋の夕はうれしかりけり

○ 神奈川 中嶋光子

しぎのたつ羽音みつよつこのいほのあはれをしのふあきの夕暮

○ 東京 岩谷淺子

棚ばたにかさぬ袖さへ露けきは秋たつけふのしるしなるらん

○ 名古屋 不破きみ子

秋の田のみのりをめでつゝ夕まぐれ月まつ軒のまとゐたのしも

○ 東京 吉村まき子

淋しさもいよゝまさりぬ夕暮に草のいほふく秋のはつ風

○ 神奈川 奈良八重子

遠山の入日ながむる乙女子のほつれ毛さむく秋の風ふく

○ 東京 花柳子

夕されば秋ぞかなしや虫の音の油乏しき賤が家になく

○ 東京 神田けい子

もしほやくいそのとまやに雁落ちて三日月さびしあきの夕くれ

○ 神戸 足立あさ子

立出し今朝にたがひて歸るさは夕日さびしき秋の深山邊

○ 京都 堤登久子

病みませる友の身思ぶこの夕心ありげに桐の葉の散る

○ 東京 堤いく子

庵さす小野の夕暮秋ふけて虫の音ほそく萩亂れ散る

○ 山口 村上操子

とりたてゝこれと哀れをさしていふ事はなけれと秋のゆふ暮

○　栃木　井上瑞枝子

夢さめて熱見ゝ人の肩斜め桐の葉おつる病室の窓

○　伯耆　錦織ちよ子

きれし糸にこほろき飛ひて此夕殊にかなしき世わたりの袖

○　神戸　秋山もみぢ子

秋風のいよゝ身に泌む夕まぐれしぼる袂の露深き窓

○　東京　築地もと子

水の音もいとゞさびしく聞ゆなり我こゝろなる秋の夕暮

○　函館　藤本鳥羽子

おはしまによりて月まつこの夕べ庭の彼方にこほろぎのなく

○　名古屋　山根ふさ子

入相のかねのひゝきも打しめりこさめさびしき秋の夕くれ

○　岐阜　南みれ子

かりかねの鳴く音きこえて夕きりのひまこそみえれ霧の松原

○　東京　松下万里子

國の爲逝きし眷の君思ひ出でゝ香手向たり秋の夕ぐれ

○　埼玉　野中まつ子

男鹿なく秋の夕の果敢なさを嵯峨のゝおくに誰かわふるらん

○　伏見　寺内ちく子

木の葉ちる秋の夕べのさびしきに我ふる里のしのばるゝ哉

○　神戸　今西操子

八千草の露おく野邊に只一人ふるさと偲ふ秋の夕ぐれ

○　播磨　田淵ふじ子

しかすかにさびしくもあるか小夜ふけて鹿なく山のひとりねの床

○　松山　上原のぶ子

虫のねに萩ふくかせに夕ぐれの秋をはしらぬ物なかりけり



## 乙

○　佐賀　尾方綾子

かれの音もいつしかきえてあはれさのいやまさりゆく秋の夕暮

○　奈良　栗山たか子

風わたる野ちのゆくてはら〱とはきの花ちる秋のゆふくれ

○　佐賀　尾方やゑ子

風の音に虫もあはれをそふるらんいやなきしきるあきの夕暮

○　千葉　中川千鶴子

草むらに虫のすだきつさしのほろつき待つゝあきの夕べたのしも

○　東京　川合りく子

草ふかくあれし庭面になく虫のこゑやかなしき秋の夕くれ

○　福井　岩橋はな子

影見れはそゝろ心も晴れにけりさやかにすめる秋の夜の月

○　東京　林たまき子

吹く風の身にしむまゝに何となく秋のゆふへはかなしかりけり

○　下野　井上尙子

虫なきて鐘のひゝきて萩ちりておもひ出多きあきの夕くれ

○　東京　高野元子

たえ〲になく虫の音もきこえきて萩つゆけし秋の夕暮

○　清國　富成梓子

こゑや戀ふつまやしのふとよそ人のあはれ身にそふ秋の夕くれ

○　東京　靑木たま子

くものにしき風の聲さへなか〱に身にしみわたる秋の夕暮

○　東京　吉岡龜子

物おもふ秋のゆふへは山てらのかねをきくにもつゆそこほるゝ

○　羽後　鳥海いし子

さひしさは秋のならひと知りつれとたへぬは木の葉ちる夕かな

○　東京　牛山素子

鹿の音はたにまにおちてきりふかきそまやま道の秋の夕くれ

○　土佐　秋田廣江子

澄む月に心も冴えてひゝりたつ秋の夕の思ひ美しき

○　肥後　友永章子

かりのなゝみ空を見てもさひしさのあはれはてなき秋の夕暮

○　埼玉　横田すま子

さひしきはかきりなきまておもしろき大海原の秋の夕くれ

○　廣島　鈴森きみ子

み空高う渡る雁こそなか〳〵に人思はしむ秋の夕くれ

○　東京　土田八重子

淋しきが上にさひしい萩の葉の風も音せぬ秋の夕くれ

○　東京　靜子

もみちばは入日にもえてさひしけにうづらなくなり山かけの里

○　豊橋　廣名矢野子

吹く風も涼しさ送る秋の夕一人たゝよふ川添の道

○　埼玉　濱野ひで子

入日さす秋の海原眺むれは金波銀波は霧に消えつゝ

○　神戸　足立ゑい子

夕されば露のたましく秋の野にやかてうつろふ月そ待るゝ

○　陸前　大槻初音子

うやむやに過しむかしを忍ぶかなせきのうまやのあきの夕暮

○　宮城　大槻慶子

かせさわく尾花がそてもさひしけれ衣かせきの秋のゆふくれ

○　陸前　末永喜惠子

うきはみにたへぬならひの浮世をはおもひすてゝもあきの夕暮

○　陸前　前田河千年子

小笹原そよふく風のみにしみてさひしさまさる秋の夕くれ

○　旭川　佐藤央子

山てらのかれもまとほにきこゆなり萩の葉風のそよくゆふへは

○　伯耆　錦織さち子

ゆふへ〳〵舘の人のこゑすみてみ空しつかに初雁のなく

○　兵庫　田淵みき子

法の師のみのりの聲は今絶えて小雨ふるなり秋の夕暮

○　東京　林　艶子

蜩のなく音よわりて吹く風に木の葉ちるなり秋の夕暮

○　陸前　前田河みさを子

さらてたに秋としいへばかなしきを入合つくる山寺のかね

○　名古屋　中村濱子

山寺の鐘の響きも秋はたゝもろき涙をさそふ夕くれ

○　和歌山　植木操子

さらぬたにさひしきものを尾花のみほのかに見する秋の夕くれ

---

## 和歌兼題　行路薄

### 天

横須賀　柏原みな子

すゝき野の露のほそみちゆく笠のゆく手に見ゆる秋の夕雲

（評）まさにこれ一幅有聲の畫

### 地

東京　花柳子

黄昏の冷たき風に送られて

[illegible]　[illegible]

行路白き湖野の原

評　つくらぬ中に趣あり

## 人

岩代　岸野常子

きつねなくあれ野の原の夜の道
雨ひやゝかにすゝきはなちる

評　着想の奇抜なるをもて採る

## 秀逸

秋田　古瀬惟子

賤のひく馬のたつかみふきみえて
すゝきみたるゝまつはらなはて

評　三句猶あるへし

東京　靜子

茂りあふすゝきにまよふ河原路や
夕月あはしゆめかうつゝか

備後　杉原衣子

風渡る野道そ秋はおもしろき



まねくすゝきに靡く薄に

越後　岩本芳子

旅ころもさひしくたとる薄原
虫の音しけく日はくれんとす

神戸　足立あさ子

秋風のすゝきの糸をよりかけて
行かふ人の袖や縫ふらむ

東京　山本しづよ子

ゆふ風に野みちの尾花ふきたちて
先ゆく子らのかけかくれけり

磐城　木幡きよ子

顧る路の薄の戀しきに
月の影添ふ故郷の山

下野　井上侚子

うらぶれて訪ふ古郷の野のこみち
招くすゝきもなつかしきかな

清國　富成梓子

こゝにして月はまたましはつ尾花

ほに出てゝまねくをかのへのみち

神戸 足立ゑい子

露にさへみだれ安きを川風に道もなきまで薄戦きぬ

東京 西村直子

花すゝき誰をこてふにまねくらむゆきゝの岡の道のゆきゝに

東京 松本まつ子

いづかたによりてかゆかむ花すゝきみぎひだりより打まねくなり

廣島 鈴森きみ子

旅人の行く路の邊にそよぎつゝ招ぎ見送るはなすゝきかも



○夕暮を秋草にほふ野路行けは薄の穂より月は出てけり

神奈川 奈良八重子

○汽車開けゆき、とたへし古道にしける薄や何招くらむ

伊賀 佐々木いすゞ子

神奈川 山本久代子

うらぶれて我が故郷を尋ぬれば路傍の薄泣くとしも思ふ

東京 松原岑子

花すゝきなびき〳〵てひと筋の野邊のほそみち末もわかれず

甲

○東京 小林芳子

見わたせばゆく笠一ツまたひとつそくへもしらず花すゝきさく

評 上句すくれたり

下句猶あらはや

○埼玉 濱野ひで子

手弱女が草籠背おひて行く路の尾花がうれゆ蜘蛛のかけはし

○名古屋 不破きみ子

よしあしもしらぬ難波のはつ旅をゆく手さへぎるむら薄かな

○　東京　林點子

篠すゝきいつこに招くわれはいまみちを直くに辿れるものを

○　大和　栗山俊子

見かへれはすゝきは我をまねくなりゆくてさひしき野ちの夕暮

○　佐賀　尾方やゑ子

ほにいてゝ月やまつらん花すゝきくれゆくのちに打まねくなり

○　大和　栗山たか子

さしてゆくかたさへ見えす花薄野わけのかせにかたなひきして

○　佐賀　尾方綾子

朝露にぬれつゝたとるみちのへにほにいてそめし花すゝきかな

○　伯耆　錦織ちよ子

いとすゝき秋やむかしとたゝひとりゆくて淋くおもひみたるゝ

○　伯耆　錦織さち子

たゞ一人あゝたゝひとりゆく我をまねくは汝のみ尾花一むら

○　旭川　佐藤央子

たかうゑしひとむら薄ほのみえて道ゆく人のよすかにそなる

○　松山　田村多豆子

をりしたきいさ分行むいつはりに人をはまねく野ちのをすゝき

○　福井　岩橋花子

野路行けは右にひたりにをすゝきの誰まちわひてさしまねくらん

○　陸前　末永喜惠子

心にはてぬ風にも手はでなひくらあはれのちの小薄

○　陸前　大槻初音子

旅人のしはしこゝにて休みけんしところに見ゆる野ちの小すゝき

○　宮城　大槻慶子

おくれたる友の栞にみちすからむすひて行かんしのゝ小すゝき

○　東京　小島榮子

ゆきゝする道のをすゝきほに出てゝ誰をこてふにうちまねくらむ

○　東京　原三幸子

虫籠もて秋の野道をわけゆけはみきにひたりにまねくをすゝき

○　土佐　秋月廣江子

行けとゆけと燕の堤はてもあらであゝ日は入りぬ風寒くなりぬ

○　東京　中村千代子

行くれて迷ふ旅路のたそかれにまねきがほなるいとすゝきかな

○　東京　牧君子

鳴く虫にそゝのかされて來て見れば尾花が末に露亂れ散る

○　神奈川　中島光子

ゆくさきをとへとこたへもほそみちをふさく薄のたれまねくらむ

○　名古屋　山根しげ子

わさをへて歸り路急く夕月夜門邊のすゝき打まねくなり

乙

○　東京　吉村まき子

朝まだき露ふみわけて行く道にひとり尾花のたれまねくらむ

○　京都　堤とく子

いつしかと路の標に招かれていかりともせで坂昇りつる

○　東京　神田けい子

心あてのわかゆくかたに招くなり野邊のしるへや尾花なるらむ

○　陸前　前田河みさを子

さえ渡る月のやとれるすゝき原みちゆく人のあしをとゝむる

○　秋田　古瀬りく子

秋かせにふきみたされて花すゝきゆくにゆかれぬ路もありけり

○　大阪　木村春江子

まねかれてたとりしものを花薄尋ぬる友の行へしらなん

○　和歌山　植木[illegible]子

夕月夜ほのめく野邊をさまよへばそてよりなびくはたすゝき哉

○　神戸　今西操子

野邊一里迴りし夕月夜ゆくてさへぎる糸すゝき哉
○ 能登 粟倉菫子

野路ゆけば此身を招く心地して見すてかねたる花すゝきかな
○ 東京 土田八重子

駒とめてかはんとすれとなか〳〵に招く尾花は折られざりけり
○ 伯耆 錦織よし子

病む母の藥片手に氣もそゝろ尾花わけゆく袖のつゆけさ
○ 栃木 井上瑞枝子

草に入る月に忍ぶ身はちらへは白ゆふ尾花露と散り行く
○ 陸前 前田河千年子

秋風のたちそめしよりはなすゝきみちゆく人をまねくなるらん
○ 松山 上原のぶ子

西ひがしまねく秋野のすゝきはらいづれよりまづ分入なまし
○ 山口 村上操子

うちまねくすゝきに心うかるらむ人もかなたの野らをわけゆく
○ 東京 川合りく子

つゆしげき野邊のかよひ路ふく風にかたよりなびく花すゝき哉
○ 千葉 中川千鶴子

心こそあゆみをとむれ秋の野にまねく尾花は風のたもとか
○ 越後 水野やすゑ子

月にのみ見るべきものか初秋の旅のあしたの露の小薄
○ 東京 堤いく子

糸薄穗なみさやぎてたどりゆく袖つゆけくもひぐらしの鳴く
○ 東京 林環子

いかばかり人やこひしき路の邊のまねき顔なるすゝき一もと
○ 東京 高野元子

道のべにみだれ〳〵て糸すゝき誰まねくらん秋の末野に
○ 東京 青木たま子

旅人のゆきゝの岡の糸すゝき風にみだれてたれまねくらん
○ 神奈川 鈴木まつ子

月かげはほのかにいでゝみちのべにまねくすゝきの哀れなる哉
○ 東京 吉岡龜子

立とまる人もあらしをふく風にまねきてさわぐみちのをすゝき
○ 韓國 原野みき子

虫の音にすゝき花みちわけ行けば秋風吹きて月落んとす
○ 東京 牛山葉子

行あきをまねきがほなる糸薄みちゆく人の袖ぬらすらん
○ 肥後 友永常子

白露にぬれたる袖を道のへのを花の波とおもひけるかな
○ 肥後 友永章子

はたおりの虫さへなきて糸すゝき心ほそくもなびく野ら哉
○ 東京 河合清子

まれにたに人もかよはぬ山道にむれたつ薄うちまねくなり
○ 秋田 細矢はる子

あさまだきわかれてかへる我袖を露もてぬらす花すゝきかな
○ 埼玉 横田秋子

ゆけど〳〵尾花の袖にまねかれてかへるさ遠し武藏野の原
○ 埼玉 横田やな子

旅人のゆきゝの岡の花薄たれをまねきて秋風ぞふく
○ 埼玉 横田すま子

われ來ればあしたの原はつゆふかき尾花が袖に月ぞのこれる
○ 東京 岩谷淺子

立よりてみるべき人もなきものを誰まねくらん野路のかるかや
○ 東京 芳子

そよ〳〵と吹く朝風にさそはれて野路わけ行けば薄花咲く
○ 兵庫 梶原京子

さしかゝる山の麓の別れ路に招くすゝきの露で滋かる
○ 備後 角倉しめの子

野路三里わけてたどりし一とつ寺ひとかげ見えで薄小まれく
○ 埼玉　野中まつ子

しかすがにゆく手を急ぐ野路ながらまれくすゝきに立とまりつゝ
○ 岐阜　南みれ子

學をへて故郷に歸る此の夕四つの袖ひく野路の小薄

## 短文

### 文學士鹽井雨江先生選

### 天

夕涼　岩代　岸野常子

さき頃まで嶽山の影より、さと血など迸らしたらん樣に、西の天一面を覆ひたりし夕榮の雲も、いつしか涼風に吹き拂はれて、今は早や薄くうすく其の名殘りを留むるのみ、虎か龍か、わらず、繁り合ふ桂の葉かとみゆる叢雲一塊、さも打ちすてたらん樣に、その尾の上の方に取殘されてさまよひぬ。涼しき風の袋もてる、そは荒々しき男神にはあらずして、優しきかたちの氣高きが、其の影に乘らせ給ふには非ずやと思はるゝも、をかしや。堤は長うして、岸には青柳疎らに生長しぬ。風輕く渡り來て、其のしな垂れたる長き枝をなぶるも面白く、暫し休らひてとや、螢二つ三つ打ちつれて飛び來けるが、そと其の葉蔭にとゞまれる、又なくめでたし。小褄うち取り、繁り合ふ夏草の露ふみわけつゝ、なほも堤に添ひて下り行けば、岸邊の卯の花風かをり、打つゞく青田の稻も、綠深く風のまにまに飛びかふ螢も、數はや多くなりまさりては、さながらみ空の星の亂れ散るらんやう。何處にてか螢狩に出てたるうなゐらの、月をのゝしりにくむ聲の聞ゆるも、折からなれば興いと多かり、龍が岩の邊りに至る頃、十日ばかりの月高く、愛宕の松に懸りぬ。眺めやる水かみ遠く、漁火の三つ四つ見ゆるは、夜すがら漁夫の釣りするにやあらん。赤城の宮のあたり、かに琴の音のきこゆるなど、えもいはず。砂の彼方より、夜目にはそれと定かならねど、このあたりに暑さをさくる都人にやあらん、老いたる翁のいやしからぬが七八つばかりの稚子二人を引き具して、こなたざまに出で來りぬ。學校にて習ひやしけん、電車唱歌を節面白く稚子らのうたふに、我れも思はず近

よりて、同じ方に歩みつゝ、わやしげなる聲してうたひ合すも、物狂ほしくをかし。かくしつゝ、豈の淋さを忘るゝ程に、夏の夜の更けやすく、早や月は月見が館の松に隠れて、茂林寺の鐘の音、岸うつ波に調べを添へて、いと物淋し。返り見ればさきの人々は、いつしか歸りて、影だにもなし。我れも涼風に袂拂はせて、もと來し路を宿りに歸りぬ。

（雨評）　すなほに美はしく整ひ得たる筆は、修養のあと見えてゆかし。

## 地

日記の一節　　越後　水野やゑす子

午後三時。

夕立がしさうになつた。背の君は、西の伯母さんの所まで行くといはれる。すみゑの顔も見せて來ると、むづがるのを、やつとわやして、抱いて行かれた。

西の内につかれたと思ふ頃。ぽつりぽつりとわたつて來た。堂椽に見てゐると、池におちたのは圓い波紋をゑがく。石におちたのは文字摺の形を出す。芝生におちたのは、何のおともなく形もない。そして、枯れさうな草の根をうるほす、あゝこれが女らしいと思つた。

飛石のところに、撫子の種子がちらばつてゐる。さつきすみゑがおもちやにしてよろこんでゐたのだ。かまはんでおかう。甘棠剪る勿れ、召伯の息ひし所だもの。風一陣種子をふきちらした。

おゝ來年は思はぬ所に花が咲かう。

竹の林に雨の音がはげしくなつて。蟬も聲もやんだ。

（雨評）　洒落なる筆、才氣愛すべし。

## 人

初秋の朝　　神奈川　山本久代子

美しき夢に目覺めて、朝まだき、月の光りをしるべに、そよそよと稻の香送る涼風に送られて、ふらふらとさまよひ出でつ、萩の露はらはらと落して行く程に、細道はこゝに絶えて、白銀の玉とさばしる關川の流れに出でぬ。瑠璃盤に曉の星轉ば

せて、篩ふが如きさまを見つつ、石傳ひ岸に沿うて下れば、こゝは早や流れも緩やかに、山鳥のしだり尾をそゝぐも、かゝる處ならんなど思ひ廻らしつゝ佇めば、何やらん小魚のはねて、波の輪二つ三つゆらゆらと浮べる月を動かして、靜かに岸を洗ひて消えぬ。

（兩評）　文また初秋の朝のさはやかに涼しき氣あり。

## 秀逸

◎◎　暴風雨　　東京　神田けい子

月待つ夕暮の程、雲の往來なべてならず忙はしく西へ西へと急ぐにぞ、さては、と、雨戸の締りやいかに、垣の支へやいかになど罵りさわぐ折りしも雲漸々低う垂れて、空の景色凄しく小暗うなりて、俄に雨いみしう降り來り、やがて風さへ吹き起りて、おどろおどろしうなりもて行くに、雨戸堅く閉して、皆打ち寄り、物をも云はずあきれたる程、何の心地かはせむ。

一陣戸に當る雨は、横さまに礫打つかと計り吹きつけて、戸は今にも破れなむと思はる。風も次第におどろおどろしう鳴り叫べば、家はゆらゆらとゆらぎて、唯船に乘れる思して、物も覺えず。折柄、烈しき物音せるは、木などの倒れしか、垣の飛ばされしかと、現心もなく、誰れも誰れも顏打ち守りて、物をも云はず、手足わなゝき身慄ひて茫然たる中に、稚きものは、いも寢で泣き叫び、老いたるは經誦しなどす。やがて、風はいよいよ荒れ立ちて、戸鳴り柱きしめきて、あなと云ふ間に、彼方の板戸一枚吹き放ちて、さと入る風に燈火も消たれば、あとはぬば玉の暗にて、あや目もわかず。恐しさ云はん方なし。あはれ、多數の鬼神どもの一つに集りて、天下を一揉に揉むかと思はれて、物の蔭に燈火微かにかきたてゝ、終夜まどろむともなく明す程、夜中ばかりよりは、風やうやう和ぎて、雨のみ軒をたゝきしが、其れさへ、明け行くまゝに止みぬ。

朝戸開きて見やれば、嵐の空は靜まりて、吹き折られたる松が枝に殘る月影、いと凄し。大きなる柿の木實、まだ青きに、根より拔かれて、前栽の

秋女郎花などの上に臥したる、彼の烈しき物音は是れにやありけむ。千草の花は何れも見る影もなく、虫はいづこにか宿るらむ。皆端近く出で、、夜もすがら恐しかりしことを盡きせず語ふも、唯夢の心地してなむ。

（兩評）情景は現りなく見へたり

○◎秋夕　神奈川　奈良八重子

花やかなりし夕陽の、富士のあなたに落ちて、夕映雲の刻一刻と薄らぎ行くにつれて、夜の女神の黒い裳裾が、だん／＼と此方をさして歩いてくるとき、何のあてどもなく、背戸を流るゝいさゝ小川に沿うて、畔道を南へと靜かにたどる中に、身はいつしかお玉が池のほとり、秋草の咲き亂れた中に立つた。そうして、不知不識湧き出るのは、との池についての悲惨な話である。

今から百年も昔、この村一の金満家といはれた孫兵衛の獨り娘に、玉といふのがあつた。十歳の春、母に別れて心邪しまなる繼母の手に、憂き艱難をなめつゝ、十八の春を迎へたとき、或る男を戀して、繼母の爲めにならず、あまつさへ繼母の親戚なる某を、婿にと强いられ、或る夜意を決して、家を逃れ出で、此池に身を投げて死んだ。

何といふ哀れな話であらうと。暫し暗碧色の水面を、ぢつと見詰めて居ると、蛙一疋不意に水中に飛び込んで、物凄い音が四邊の寂寞を破ると同時に、波紋が水面の平和を破つて、星の影がゆらゆらと搖れた。間もなくその音が全く池中に沈んでしまつたとき、あたりは一層靜かに、一層淋しく、たゞ草葉にすだく蟲のみが、露重たげにないてをるばかりである。

あたりは益暗くなつた、いざ歸らうとした時、ふと名も知らぬ一と本の花が、薄白う淋しげに立つてをるのを見た、昔お玉が此池の畔に立つた時を語る如く、いかにもわびしげにうつむいて立てゐる。しかも可愛い露の玉を宿して。あゝこれが昔はかない最後を遂げたお玉の魂の花となつたのではあるまいか。そうして、その時の涙が今も露となつて宿つてをるのではあるまいか。それとも、玉の運命を悲んだ星の涙であらうか。仰ぐと鳩羽色の大空に、無數の星が、いかにも答へ顔にかが

やいてをる。

（雨評）文は整ひ、末段の花の意匠なども工夫は見ゆれど、情熱がまだ足り申さず。

◎結婚をすゝめし友に

能登　栗倉すみれ子

御親切なる再三のおすゝめは、うれしう存じます、併し、光子樣先日も一寸申しました通り、私の理想は獨身主義なんです。そして、一生小學敎員で果す圖りですわ。たとひ結婚するにもせよ、それは遠い〳〵未來の事で、又私は財産や地位なんか望みやしませぬ。此職務に同情を表して滿足して呉れる人ならばと思うてゐるのです。天眞爛熳花の如き小供と遊んでゐると、丁度自分も小兒の樣な氣になッて、無上に樂しいんですよ。先生！先生と四方八方から袴に睦び縋る可憐の生徒を見捨て、他家へ嫁ぐなんて、私としてどうしても出來ないです、それに貴女!!!今日も授業の時間に、ネー、光子さん!!!一人の女生徒が、席を離れて窓を覗くのですもの。何をするのかと、暫時知らぬ振りして見てゐると、廂の蜘蛛の巣に蝶の懸ッたのを、助けてやッたんでした。私嬉れしくて嬉しくて、ネー、涙が出た位でしたわ。そして、愈々自分の責任の重い事を自覺したのです。まア、こんな譯で、只今の我身には結婚などと云ふものは、更に念頭に無いのですから、どうぞ惡からず、貴女から宜しく先方へ斷ッて頂戴な。併し、光子樣!!!私の行末を案じ下さッての御眞心は、永久忘れはいたしませぬ。へだてなき仲とは申しながら、女らしくもない氣焰を申して、濟みませぬ、御免下さい。

（雨評）文も整ひ情もきこえたり。ですわなどの語調はちと下品なり。

◎水車の響

下野　井上倘子

希望の焰胸に燃えて消ゆるまもない頃、友の都の學校に入るを送つて、見えなく成る迄、村はづれの松によつて、うらやましさに泣たこと、都に嫁いだ友の夏帶締た後姿に見とれたこと、今から思へば、我ながらをかしい。巨萬の財寶はなくとも、永久かはらぬ畑田がある。鋤鍬取つて働けば、不自由はなく、新鮮な靑物は絶えず。近い川に釣た

魚は、父が夕餉の膳に上る。山海の珍味は知らぬけれど、先づ滿足である、朝夕氣高い日光山を、目の前に、空氣の淸い、風の涼しい懷しい人々のあるこの村から、なぜ彼のちりの深い都へと望みをかけたのであらうか、自分はもう、涼しい風が通りぬける、赤田の中の水車塲を、天地と定めて水車が簡單な調をくり返すやうに、我も自然を友に、簡易な生活を續けやうと決した。車の平和の響は、まゝなれた耳に、今更にたかくきこゆる。

（雨評）　何んぞ簡單とのみ言はん、無盡の趣味は君實は其處にあり。

◎夏のあした　　能登　粟倉一子

歸省以來、珍しくもまだきに起きゐでゝ、爺やにまで笑はれぬ。うかゞひなしつゝ、庭の面に出づれば、木々の葉末に宿れる白露の、吹く朝風にポタリ〳〵と落つるも、云ひ知らずをかし。冷たき朝露ふみしだきつゝ、そこはかとさ迷ひし末、裳かゝげて、淨露提げゆふべ下男の掃き淸めし廣庭に、隅なく水を打ちぬ。いつの間に眼醒め給ひけん、兄君書窓より覗き玉ひて、「流石は女學校の運動塲に鍊へしかひありて、中々活潑だねー」と、高らかに笑ひ玉ふ。お轉婆と曰はぬばかりの御口振り、口惜し。仰げば横雲東の空にたなびきて、殘むの月影も星の光も、いと淡うなりぬ。垣根の朝顏けさ十七開く。汝れが命短きに、同じくば我頭にてすぼめよかしと、白きを一輪亂れし髮にかざしつゝ、折柄聞ゆる鈴の音は、新聞紙の配達なるらむ。

（雨評）　一輪亂れし髮にされたる朝顏は、兄上の何んと評せられけむ。きかまほし。

◎夏の夜半　　東京　吉村まき子

何にか恐しき夢におそはれて、目さむれば夜はいたく更けぬらむ、うちわのみ賴りに、何事も手につかざりし宵とは、うちかはりて、ねまきにてはちと肌寒う覺ゆるなり。室内暗くして、枕邊に置きし豆ランプの、ほのぐらう光るのみ。隣室には、幼き弟の母上と共に如何なる樂しき夢むすぶらむ。時々小さき鼾もらしつゝ眠れり。何時ならむと頭もたぐれば、床の間の上にては、待ち兼ねたる如く、十二時を報じぬ。再び眠らむとすれども、中々に眠られず。強いて

眠らむとすれば、目はいよ〳〵冴えて、眠られざれば、やをら蚊帳をぬけ出でゝ、窓の板戸一枚、そとくりあくれば、今は草木もねむり、犬の遠吠さへ全くとだえて、只耳に入るものは、草原の中にて、時々何虫やらのチゝとすだく音のみ、十日ばかりの月は、西に傾きかけて、黒き、白き雲にあるはかくれ、あるはあらはれて、凄く冴えたる光を放ちつ。我れはしばし窓にもたれて、眺むるともなく、又考ふともなくゐたりしが、ふと彼地に渡らせ給へる兄上の、晝は戰のきはにたち。夜は彼の一幕の下に、草葉を褥とし、背嚢を枕として、一夜の露をしのぎ給ふなど、如何ばかり苦しき事のみや多かるらめなど、思ひ浮びつ、つゞきて久しういたつきに惱み給へる我が親しき友の、今宵は如何に居させ給へる、かひなの痛みは覺え給はずやなど、考へて、思はずホロリとこぼす涙の、胸のあたりにしかとくみし手の上に落ちしに氣づきて、立ちあがり、板戸閉さんとすれば、あはれなるこほろぎの二聲三聲。コロ〳〵とすだきぬ。

（雨評）兄と友とを思ふところに、なほ深く情をこめられなば、はじめて難なき文とならむ。



◎思ひ出　東京　川合りく子

丁度去年の夏であつた、從妹のおみきさんと一所に、廣々と座敷を開放して、裁縫していますと、妹のとく子が歸つて來て、たまちんが海に游ぎに行きませんかつて、庭の屛垣の所に待ていますよ、とのことで、それではお供しませうと、祖母樣のおゆるしを得まして、二人で庭の枝打戸を開けて出ますと、たまちやんお一人と思ひの外、今日は七月の七日、盆だと云ふので、四五人のお友達が打揃うて、妾を待つていました、それから皆さんと海邊に出て見ますと、いつも穩かな海ですが、今日は特に波靜かで、水清く、皆樣が大喜で游衣に着更へますと、氣丈夫のおみきさんが、中瀨までレースいたしませうと。云ふが早いか、皆樣が一二三の掛聲勇ましく、海中に飛び込み、中瀨をさして泳ぎだす、やがて目ざし、中瀨に、第一番に着きましたのは、おみきさん、妾は三番であつた。瀨は深さ僅に膝ぐらゐ、今女隊の一群に泳ぎつかれたので、狼狽てゝ逃げまはる、いろいろの小魚を捕へんとて、腰卷を外し、網の代りに

するなど、其のお笑しかりしこと、あゝ、今日この頃の暑さに、又懸しき故郷の面白いあのお友達が、打ち揃つて、彼の海で愉快に泳ぎなさつてをらるゝでせう。

（雨評）可憐なる思ひ出なるかな。ますといふ談話調あらためたし。

## 、、、〇夢　　和歌山　植木撫子

樂しみを共にせんも、悲しみを慰めあはんも、皆親しき同胞になん。我に只一人の兄上あり。文の林のいや深く、わけ入らむが爲に、此春より、遠く隔てたる都の空に、ものし給ひしを、はや、夏休も近づけば、日々指折りかぞへてぞ、待ちわぶるなる。今宵も例の事とも終へたれば、おばしまに出でて、あたりをながむるに、夕立は名殘りなく晴れ渡りて、月かげ一きはさえ、松の梢をつたふ雫、草葉に殘る白露にやどれる、見るだに涼しき心地ぞする。また、夕顏は、いと白う笑の眉をひらきて、人待ち顏なり、あゝ、此の夕顏は、都に立ち給ふ前に、蒔かれしもの。その折り、我をよびて。この後はよく手を盡くせよ。花の咲かん頃は、一しほ歸り來らんと。その花の今宵はじめて咲きしかと思へば、一しほのなつかしさよ。時に、玄關にけたゝましく、郵便との聲すれば急ぎ受取りて、見るに、兄上の我にあてたる葉書なり。かへりきまさん日を、記されたれば、かけ込みて、兩親に一週間せば歸り遊ばすと、喜びあひて、しばしゝて、臥床に入りぬ。あゝ、兄上は午後三時半の汽車にてつくとなれば、母上は無事にと、御酒たむけ、設けのわざに忙し。我は妹と暑さをもいとはで、遠さみちも近き心地して、後れず停車場に至りぬ。旅立つ人、見送る人、あるは迎ふる人などにて、實に賑やかなり。やかて。汽車は黑烟を長く跡に殘し、轟々と響を立てゝ着きぬ。さながら、山もくだけんばかりの混雜なり。いづくにかと見まはすに、兄上は帽子をあげ、笑をたゝへて、我等を見つゝ此の時の嬉しさは、何にたとへん、思はず、兄上と叫びぬ。いで早く歸りて、といふ、折りしも、母上の妻戸押しあくるに、目さめぬ。あはれ、思ひれの夢か。實に、樂しき、嬉しき夢なりけり。今しばしみたらんにはと、惜しげれども、あはん日はひと日、近づきしも。

（雨評）結末の一句は、面白し。其他はすべて今一入の文なり。

## 、、、〇都の友へ送る　　東京　土田八重子

病める身の、此處の住居する事と相成候てより、最早一とせ。其の後は日に月に快よく、此の頃にては、田舍人の群に入りて、日々田子のいそしみの邪魔致し居り候。扨農夫の業のなみ〳〵ならぬとは、かねてより存じ居候へ共、今目のあたり見るについては打ききよりもいとど切なきものに存じ候。

冬は、霜白き曉星を戴いて、田野に出で、寒風冷露肌を侵すが中に、飢を忍び寒さに堪てはたらき、春は花咲けども眺めむよしはなく、男子は泥土をならし、婦女は田に入り、其の黑髮もさみだれがちに苗を植う。夏は亦、金をも鑠す暑き日、田水沸き立つ中へ入り、照る日に背を曝して耕す。食事の時となれば、泥つきたるまゝの手を、濯ぎも得せず。喫せし後は、田水掬ひ飲みてすますなど、げに粒々は皆辛苦にて、都の人の夢にだも思ひ及ばぬ苦しみに候。田園生活を御望みの御許樣も、かゝる樣にては、必ずやいやそかぶりをふり給ふならむ。されども、又風涼しき秋ともならば、いたづきし功は穗に現はれて、足り穗の稻の美しう黄金

波よろ川のくろを、炎みをたゝへてたどる農夫の心の中は、いかばかりにか候はん。淋しかろべき秋を待つ田子たちは、外山のかひに妻戀ふ鹿の其の聲は、うら悲しきも、かつは嬉しうもおぼゆるにや候はむ。只今月さし昇りて、草村の蟲は鈴ふりいで、賤の女が打つ砧の音は、遠く近く聞え居り候。あはれ都にては高殿の小簾高うあきて、絲竹の遊びにくらしてか、はた夜深く迄も文の林や分け入り給ひてか。かゝろ田ぶせに馴れたろ身は、露うき事はあろまにき筈に候へ共、されど〳〵、折りにふれては、たゞ何んとなく涙のこぼれおつろは、いつこも同じき秋のならはしにも候はんか。

(雨評) 結末の一節はよし。前段はありふれたろ事をながながと書かれたろ、少しうろさき方あり

## 、〇夕立

松山　田村多豆子

とゞろ〳〵に鳴り響くかみの音に、耳もふたかれつ、眼を射ろ稲妻の光り、いとおそろしと思へろほどに、降り来ろ雨は、盆をくつがへす許りなりしが、忽に晴れわたりて、大空には一點の雲も殘さで、夕月の影ほのめく軒端に、吹風のあまれろ、けふの堪へがたかりし暑さも、打ち忘られて、涼しさえもいはず、心氣もいとすが〳〵しくなりぬ。雨ふりてなにとか謂へろことわざも、思ひ出されてなむ。

(雨評) これも整ひたりと申すべきのみ

## 、〇夏草

和歌山　島田千代子

露のなさけに生ふろ草々の中にも、あはれ深きは、のきばにつろしゝしのぶ草などにあらん。根をまげて玉となせろもあれ、輪のやうつくれろもあれ、いづれとて青々とせし若芽をふかぬはなくて、打水やれば、玉ぞこぼろゝけはひの、いとをかしう、わけて月をやどせろさまは、身も世も清げにおもはれて、時々のものとはいへ、一しほの涼しさを覺ゆろになん。

(雨評) 整ひたりと申すべきのみ

## 、〇我住居

肥後　友永常子

水田數丁を隔てゝ、球磨川の急流に對し、さ夜深き枕に耳をすまして、水聲を、軒端の竹に雨のそゝぐ音と聞き、あろは、市房の高峯に、冬は早くより時雨の雲間に雪をながむ、山翠りに水清き舊住居に名殘を惜みて、此天草の南端、水の浦に居を移してより早、年のなかばを過しぬ。さても、海上遠く南方をのぞめば、水か山かと見えて、甑島長く海上に横はり、西ははてもなき太平洋、只、水平線上に白帆の點々眠ろが如きのみ。近くは島々の間に見えかくれして、波上に白くかげを移し行きかふ眞帆片帆、舟歌おもしろく櫓をおす漁舟、是皆、山陽の詩中の實景にあらずや、昨日迄は深山の木かげに小鳥のさへずろ聲をきゝ、今日は磯なれの松に、たえず浪聲を聞く

(雨評) 詞は優美なれど、我が住居の其情は、ちとおほろなり。

## 、〇雨の夜友を偲びて

京都　堤登久子

日は既に暮れ果てつ。今朝より小やみなく降ろ五月雨は、何時止まんとの望みもなし。今宵こそはと約せし友は尋來ず。少さき同胞は早や夢路や辿りけむ、二階も下も靜々と、唯聞ゆろは、軒端に落つろ雨垂の音のみ。獨り薄暗狐燈の下に、果敢なき思に耽りつゝ、餘りの徒然さに、傍の文引き寄せ、取り出しゝは、日頃懇ひ慕ひまつろ優しき姉様の御玉章。尺にも餘ろ御情けに滿ち滿

たる美文。さては、み心のまゝ御自在なる御筆にて、和歌新體詩など數知られぬ程。卷きては繙き讀み行く每に、有りし當時が偲ばれて、いとゞ懷しさの增し行くのみ。分けて身に染みて嬉しと

思ひしは、君が日記の一節よ。斯くまでに我が身の上に熱き惠をそゝき給ひてむ事かと思へば餘りの勿體なさ且つは有難さに暫しは文を握り絞めて、知らずく袖を濡しぬ。あゝ、如何にせば、この暖かき御情け、深きみ心に報ひ奉らるべしや。日每に同胞持たぬ淋しさはなどゝ宣ふ者を、あゝ妾日每誠の姉妹にも劣らぬ程のみ惠受けつゝあるに、あはれ薄學の身の悔しさよ心は千々に碎けども、御慰め參らせん言の葉だに知らず、獨り若るしむ愚なる身の哀れさ果敢なさよと、思ひは又も深うなり行きて、夜の更くるも知らで、取り廣げし文の上、あはれ、幾度落しけむ、降る雨ならぬ露の玉は。

切めて思ふ一にてもと、書く筆の跡も、いと拙なき端書一片。あい、さらぬだに淋しき此の梅雨期、如何に詫しう在はしましてむ



〔雨評〕すべて今一入の文と申すべし

○花芭蕉　紀伊とく子

朝起きて、最先に目に入るものは、我窓近き花芭蕉である。釣るしてあるしのぶに與へし露の白玉が、あふれ落ちて、その葉に碧瑠璃を轉ばし、今や登った旭に映じて、きらめいて居る。紅の花は二つ三つ開きて、山桃の如き實と交って居るし、淡き綠の葉が其のまはりにしげりあうて居ます。これは、先つ日、親しき友より、株別けをしてたまひしものであるが、此の繁殖の模樣では、來る年は、又、他の友に別つ事が出來るであらう。

（雨評）末段の情は可憐なり

○魂祭　越後　松永しげ子

松の枝每に、蟬の鳴き初めしより、暑さ日々に加はりて、匂ふ朝顏の色もめでたきを、姉君はいまさず、いぬる年の一日幽冥界へゆき給ひて、源平桃の花咲きて、北窓に驚きなく春は、四月廿一日に、產の難くして死にませり。歳は二十九、花ならば盛りなるを。

繼父母に苦しめられ、つれなき男に捨てられ、涙を以て日をすぐし〻姉……思へば、涙の種。一人の娘をのこして、なき人のかずに入られぬ。

いかばかりおもひおく心や深かりけむ。妾も旅に在りて、其の折りにあはざりしよ。今やその魂、いづかたに迷ふらむ。今日しも親戚の者を集へ、姉のなき魂を祭る。夏菊の二本いき〳〵とさ〻れたれ共、あかき燈明亦滅、細き香の煙はたえむとして立ちのぼる。

鐘のひゞき、讀經の聲、姉はいかにき〻ます。式も終り、皆人かへる、亦もとの一家姉の身の上をのみ語りかはす。姉よ何とてかくは世を早く去りまし〻ぞ。妾は人とならば、共にたのしく暮さむものをとたのしみしを、なつかしの姉上よと瞑目すれば、やつれし姿おぼろに、消えはて〻餘香のたゞ室にいやたかきのみ。

（雨評）　材料は哀しきものなれど、筆はまだ其の情をあらはし足らず。

## ○無情　　　豊橋　廣名矢野子

夕べ涼しく吹きくる初秋の風に、庭の木葉の一葉二葉落ちぬるを妾は一人庭前にながめて居た。秋とは云ひながら、晝はまだ暑さにたへかねる程なれど・さすがに朝夕は一入涼しく、身にしみじみとする程である。指折りかぞふれば、丁度三とせの昔の此頃であつたらう、兄上が東京から暑中休でおかへりなされた時、此庭の此松の木の下で、東都のお話しなぞして頂いて、たのしく面白く一夜を明した。其夜、兄上のお言葉にはあなたも來年此所の學校を卒業なさると。東京の學校に行き。立派に成功しなければなりませぬと、お話しなされた事があつた。それを、今思ひ出すとなんだか兄さんがこひしく思ひだされる。其兄さんと云ふのは、其年の冬から、世にもおそるべきフチザス とか云ふ病にか〻りてとう〳〵此世に無き人の數に入いてしまはれた。其後と云ふ者は妾は只兄さん兄さんと思ふて、一日涙に袖をぬらさぬ日はなかつたが、時過ぐるにしたがつて、其思ひも次第にうすれて、此頃では更に思ふた事もなかつたが、今日此の庭の此の松の下で、草間にすだく虫のあはれに歌ふうたを聞くにつけて、再び思ひ出したのである。

嗚呼、人間のはかなさ、妾は、今成功の曉を夢みつ〻あるが、明日其無情の風にさそはれるやもなぞと、はかなき思ひに沈んだが、此時一陣の風、涼しさをのこして、サツト一亘り。

（雨評）　可憐なる情はあれど、文章は未だし〳〵。

## ○運命　　　和歌山　村田清子

幸なき身のわれは、今やわが市の小學教師とはなりはてぬ。今日しも我校の落成式、こ〻かしこに黒、藤色の紋付に白線入れし海老茶の袴を一樣に着けたる、少女の打つどひ、滿面に笑みをた〻へつ〻、愛らしき聲はり上げてうたひ遊べり。懷ふ昔。あ〻そも今は一年もすぎぬ。わらはが高等女學校の補習科に通ひにしその時よ、嗚呼いかに樂しかりしよな。わらは〻希望の光にみち〳〵たりき。それよ、わらは〻業了へて後、樂しきホームを作るべかりしなり。嗚呼人の世は夢なりけり。定めなきは浮世なる哉。日露の平和は破れぬ。そが殺那、無限悲音、わらはが耳朶に、涙の曲と響きしなりき。栁櫻をこきまぜて錦織りなす卯月中葉、かの君は遠く異國に出征しぬ。實や、かの君は、當時陸軍中尉として、有望の一士官なりき。かくて、かの君は、翌年の末つ方、二龍山の砲聲に、芳名をとどめて、敵の矢丸に斃れ給ひぬ。あはれふくよかなりし肉は、徒に知らぬ異國の草を肥やし、あはれ露を含める白薔薇の如き君が面は、また見るべからず。あはれ、わらはが胸の奥のなげき。世は無常、情は泡沫、わらは〻青春の血も枯れ果てぬ。かくて、小學教師としてつとむる身となりしにこそ。あ

いかに悲しきよ。いはじ語らじ、我は天の運命と泣かん。さても、可憐なる少女子よ、神の國より降りし汝よ、わが胸の煩悶を知るや知らずやあゝ。

（雨評）其の意にきこえたり。

## ○田舍の夕　大分　佐藤家子

夕日華やかに西に沈みて、一際高きひぐらしの聲、いと心地よき夕暮の空よ。妾は昨日より織り初めし妹の夏衣、今日は半織りえたる嬉しさ、殘りは明日にと、まど押し占め、一人廣き廣き後の野邊にさまよひいでぬ。打ち仰ぐ西の空、黄紅の色こきに、沼のあやめのうつろひし風情、えも云はれぬ眺めなる中に、今し排水終へてスコップ肩に佇み給ふ父君兄君、さながら畫中の人の如く、アアげに詩的なるかな。此の好景色に、心うばはれ、しばし恍惚と眺め入りしが、折しも遠くきこゆる牧笛の音、鷄舍とざさんとさわぐ弟の聲に、心付きて、急ぎ家への方へと踵をかへしぬ。

（雨評）今一入筆を工夫せられなば、畫葉書の畫題にはなり候はむ。

## 、、、綠陰讀書　備後　杉原衣子

炎天、四旬の校暇を得て、行李匆々鐵路に依れば、千里の江陵瞬時に經過し、一日有半にして、身は已に故山の舊草廬にあり。かれて親める學の窓によりかゝれば、綠槐數仞の長きを添へ、枝葉森々として、天津日影をもらさず。青苔滿地、淸風颯々、梢に叫ぶ蟬の聲さへ、岩にしみ入る心地して、萬斛の涼味、自ら掬すべし。

今日しも、兄上の古き文ども曝し玉へば、そが中に目とまるべき雪々、彼是とりあつめつゝ、携へ來りて、讀みもてゆて行けば、餘りの樂しさに、時計の針の移るも知らで、ほつとつく一息に、思はず忍ばれぬ、昨日の都大路の强かりし暑さよ、耐へがたかりし苦しさよ。

（雨評）前半と後半と、その筆づかひの異れるは、いかなる故ぞ。

## 、、、いさめ

三十年來涙ながらの御心つくしも水の泡かゝるかなしき御名をきゝ候とは、何の宿世の罪、たゞ〳〵泣かれ申し候。ひろき浮世の海原に、たゞ一人の伯母樣、赤心こめて神にも佛にも祈りつくして、血とわき返る涙と共にかき送りまゐらする此文御惠みも敬も愛も、わすれはてしもそのおいかりにふれんも、心苦しく候へども、ゆらさせ玉へ。

稚き時より親の顏さへも得しらぬ身には、高き深きはぐゝみの御恩は、かけどもつきず。明くるも暮るゝも、たゞ一すじに伯母樣のみ惠みにかへさんとのわがいそしみに候ぞや。伯母樣なきて誰によろこばるゝ我身の望……。いとせめてたゞ一すじ流れ通へる血の末春子いとしと思召給ば、あはれ迷の夢よりさめさせられて、誠の道の人とならせ玉へ。日すがら夜すがらもだへ苦しみつゝ、今はた涙も絞りつくし春子が命伯母樣のお行末と共にうきも沈みも。

（雨評）詞には力あるやうなれども、情はさまでに動かず。

## 、、、提灯　越後　海野幸子

提灯へさても、汝は多情なるよ。田吾作は鼻つまゝれても知らぬと形容し、詩人は烏羽玉の黒白も

分かねと歌はん暗の夜に、主人に供して其道を照し、其行を賑かにするの提灯は、あはれ汝は如何に忠實なるよ。

滿面笑を浮べし老若男女、三々五々相集ひ、歌ひさゞめく此處大廣場の祝賀會に、高くつるされたる紅提灯の、小國旗と參差して左右に振る樣の面白さ、氣も伸びる程なり。階段高うして奥渺暗き堂宇の内に、つるされたる大提灯見るからに尊し。

何處の不運兒ぞや、醫師を後に伴ひて小走りに行く提灯は、影見えぬ迄見送られて氣遣し。

田舍の劇場に、一段高う控へたる警官の赤筋提灯は、殺風景とも云はんか。

愛らしき子守女の背よりたれし、玩弄の提灯にやあらんか。

澪ゆらぎて、そよ〳〵と音なう吹く風に、消えかゝりては又明るき淡き光りの盆提灯は、またなく哀れなり。

殊に悲しきは、若き乙女の歸らぬ旅に門出の際の白張提灯にこそあれ。

嗚呼多情なる提灯よ、汝は又可笑しき名よ。

（雨評）意匠は工夫せられたりと思へど、筆は其の工夫に未だ伴ふ力なきををしむ。

## 、、夏の夜　　函館　藤本鳥羽子

暑かりし夏の日も、いつしか函館山の峰にしづみて、空には淸き明星の三つ四つ、風は涼しく海の方より吹き來りて、軒の靑簾を卷きあげ、卷き下しつ。程なく月のはなやかにさし昇りて、松の梢にかゝれば、淸き姿は、かゞみの如き池水にうつりて、涼しさ得も云はず。庭下駄引きかけ、飛石づたひに池の傍近く步みよりぬ。折りしも、彼方の芝生に二個の人影、ちらと見えぬ。月の光りにすかし見れば、いぶかしや、一人は正しく文雄樣、今一人は女の影なるが、………………妾の胸は何となう穩ならず。文雄樣に限り。とは思へど、さすがに、はかなき事にむねをいためつ、兎やせん角と思ひを焦す。折りしも、一はやく妾の傍へ走せ來りし少女。「叔母樣、今れ、母樣はあつちの芝生で、叔父樣とお話してるのよ」、「おや君ちやん」、と、妾は思はず少女の手をしかと握りぬ。其の刹那、悶えし心はいづこへやら。月はいよゝ中空に高く折々風に乘つて響き來る、ピアノの音は、いかに深く妾が心を諭しけん。

（雨評）あまりに朦朧なり。

東京　平塚白百合子

中流、棹さす人もなき屋方船おぼろにふく淸風に、らんじやの薫りゆかしく、さへぎる雲なき中空にかゝれる月光をあびて起伏する群山、麓をわづかにもやしこめたる、神心おのづからいづこにか飛びゆく如きとき、かの船よりしづかにおこる琵琶の音、餘音は流水の調べと合して、覺えず襟かきあはされぬ。

## 、寄宿舍の夜　　福井　米村つる子

あはれ、今日の日も、暮れにき。今までは、樂しく愉快に、各室より、歌ふ聲、話しする聲、笑ふ聲、又あちこちの窓隅々にて親しげに、語らふ姿も見えしが、自修時間の鐘の聞えしと共に、直ちに今までの樂しみ消え失せて、大水の引きしが如く物靜なり。各室の洋燈ぱつと明るく、室淨うして塵なし。今まで運動なしたる所も、忽ち、自修室となり、餘念なく机の下に坐し、明日の調べをなす時の、嚴肅眞面目なる態度、これ皆、後日敎育の大任を負へる學びの友。かゝる折節、さつきのことゝて、雨は音なひ、田の蛙の聲もかまびすしく、またあはれにていと淋し。この淋しき靜かなる、二時間も迫りて、九時の時計はなると共に、自習終はるべき鐘の音。あちこちの室より、話しの聲、たかしげなる笑ひ聲、洩れ出して、愛滿ちたる暖かき各室の內、そろ〳〵と寐ぬる用意に取りかゝる、机かたづける人、着物たゝむ人あり。とか

うすら中、又も、就褥のリン、再び。消燈リン、後はこそ／＼冷やかなる床の中に入り、樂しき夢路を辿るなり。此夜香れは眠りもやられに、五月雨の晴れまより出でし月は、戸ぼそを洩れて、忍び入る。あゝ清き月よと思ふまもなく、暗くなりぬ、少雨は簫々と窓の戸を打ち、うら淋しさいはん方なし。故郷の空、一入なつかしく、あゝ父母、さては、はらから、如何におはすらんなど思ひつゞくるに、不意に驚かさるゝ犬の一聲……早く寐ばやと今更心づきて、樂しき夢路に付きぬ。あゝ愛暖かき教への主よ、たらちねよ、休み給へや樂しとも樂しき我が舍の內。

# 新體詩

## 文學士　鹽井雨江先生選

### 天

海濱の人　　土佐　秋月廣江子

浮世をうみの螢が身と、我が運命は記されぬ。
望むを許さぬ空想を、いつまで胸にゑがくべき
寄せては返すしら浪に、心の塵を洗ひつゝ、
靜かに渡る涼風に、足りてあれとぞ悟りにし
思ひ出しげき二十年も、夢と封じて、眞砂路に、
まねぶ小さき歌聲を、なれてと人は微笑みぬ。
さはれ、更け行く夜を一人、波に碎くる月見ては、
堅くつゝみしわが胸も、騷がぬ事のなくてやは。

（雨評）想に哀れなる詩情あり。言ひまはしにおもしろき詩韻あり。あはれに思ひやらるゝ海濱の人に候かな。

### 地

月　　越後　海野幸子

谷に落ちたる己が子を、
たすけ上げたる親猿は、
白き枯木に坐りつゝ、
膝に抱く子のせな撫でゝ、
手の毛にそみし臭き血を、
月にすかして眺めけり。
沙漠の中によろめきて、
流るゝ血汐なむる獅子
紅の舌をまきあげて、
月に向ひてほゆる時、
駱駝の上の黑き人
鎗を握りて喘ぎけり。
霞に袂まきあげて、
月はほのかにさゝやけり、
「紅なりし猿のゆび、
きずをばなめし獅子の舌、

なまぐさき血をまた見せな、
「我が世に忌むは其の血なり」

（雨評）句もよく整ひたり。殊に工夫せられたる意匠のあるを愛す。

# 人

## 病犬

長崎　馬場麗子

病まひに若き生命をば、なやみなげくは人のみか。
幸ある日には愛人の　あたゝかき手に抱かれて、
うなじの柔毛撫でられし　若き小犬の、病みて今日、
肉枯れ、骨はあらはれぬ。
一つの餡を爭ひて、　たはむれし日の友どちの、
うらやましさは、幸ならむ。
うなゐわらはは、捧もちて、惡み嫌ふか、彼を逐ふ
逐はるゝ彼れは傷負ひてか、利かぬ前足うらみつゝ。
かなしき聲にさけびつゝ　いたはしげにも逃げまよふ。
「われを生みたるなつかしき　母もあらば」と、かひなき身の、
小さき胸ぞせまからむ。　なやむ思ひの火となりて
出で來る如き息づきに、　奇しき聲してうめくさま
運命の神や咀ふらむ。

（雨評）多少の情も動きたり。且つ、題の新しきなど工夫せられたる跡あるを愛す。



# 秀逸

## ○◎子供の栗拾

越後　水野やすゑ子

安ちやん行かうよ、　あの前山へ。
坂を上るは、　となりの子供、
竿をかついで、　袋をさげて、
唱歌うたつて、　元氣を出して。
木に上れるは　大きな子供、
下でいがくは　小さな子供、
ゆふべ婆やに　きかしてもろた、
昔ばなしの　おさるとおかに。
いがやを取つ　皮やを取つて
澁やを取れば、　ちつくりうまい。
おおお、それより、　いろりにいけて、
どんとはねたら　おかしかろ。

（雨評）可憐なる歌に候かな

◎

うばら花さく袖垣に、　袂かゝげて手をとりて、
笑ひこぼれて行末を、　此の月のこと永久に、
浮世の雲はかゝるとも、　はるゝ御空をたのしみて、

なかき思を語りしか、
望の月夜も十六夜も、
おなじ光のかゞやきに、
何を頼みの月かげぞ、
わかれ〳〵し涙かな。
さらば涙にみをつくし、
君か言の葉くり返し、
君を思ひて君を呼びて、
袂絞りて花と語らむ。

はれて曇りてまた晴れて、
十年の秋もくれはてつ。
山をへだてゝ海千里、
十年二十年いつまでも、
はるゝ月夜の其の度に、
うばらが下に我ひとり、

（雨評）詞の少しく輕きにすぎたる心地するををしむ。

〇秋の庭　和歌山　植木撫子

いぶせきまでにしげりたる　庭の草葉もかれそめて、
日々にあれゆく賤が庵、　何れをながめやるだにも、
淋しきものを、秋風の　身にしみ渡り、桐の葉の
一葉二葉と散りいでゝ、　落葉が下にたえ〴〵の
人まつ虫の聲きけば、　こひする身にはあらねども、
わが身ひとりの夕べかな。

（雨評）優美に流暢にはあれど詩想のふるきををしむ。

〇籠の虫　東京　檜皮與志子

家ははてなき　廣野原、
かざる七くさ　美しう。
醉ふや草葉の　甘きつゆ、
心のまゝに　興じつゝ、
うたひし事は、　そも幾夜。
さるを、一度、　とうはれの、
身をもがけども、　かひはなく、
人にはあやの　籠の中、
日に歌ごゑ　細りゆく、
秋の小虫の、　いとあはれ。

（雨評）やさしく整ひたれど、ありふれたるををしむ。

〇歸省　備後　杉原衣子

親しき友に送られて　飽かぬ別を惜みつゝ、
のこす言葉は少きも、　なみだは胸に餘るなり。
今はと定めの時來れば、　人の心をくみもせで、
一聲つらき音をあげて、　滊車ははなれぬいさましく、
またゝく隙に遠ざかる、　をしやおくりし友のかげ。
今一とめをとのびあがり、　のびあがれどもかひもなく。
心は後にのこれども、　駐る今日にしもあらず。
家には老の共白髮、　我を待ちつゝおはすなり。
車は風とはやけれど、　驛々にまつひまの

瞬時もいつかもどかしく、心は急ぐわが行くて。
思へば怪し我がこゝろ、時とところにしたがひて、
別れし人に逢ふ人に、かくうつりゆくわが心。
されど、操はかはらじな、親しき友よ、たらちねよ
たとひしばしは移るとも、まことのねざしうごかめや。

(雨評) 今一層語句を銑錬せられなば はじめて妙へならむ。

〇潮の音　下野　井上倚子

憂にしづむ寂し身は、さゝ波立てゝ湖を
吹きくる風にびんの毛の 亂れはげしき思ひ哉。
誰が笛の音か湖の上を 波紋なしつゝひゞきくる、
渚に立ちて額たれて、しみ〴〵ときく潮の音。
夕星きらめくゆふ雲の、あたりを包むそが中に、
君が名殘のうた誦せば、白き小さき花ちりぬ。

(雨評) 戀になやむ少女子の情景は、思ひやらるるものあれど、節の少しくはなれ〴〵の心地するをしむ。

〇苦熱　肥後　友永常子

涼しきかげとたのみつゝ、松の木かげに立よれば、
照りつゞきたる水無月に、岩根の淸水あとたえて、
むすばぬことのうらめしく、梢を見れば、水のみか、
あるかなきかに風死して、おのがさま〴〵なくせみの、
こゑより外に、聲もなし。



岩根の淸水さら〴〵と 流れは、いかに涼しきを。
梢に秋のこゑたてゝ 風もふきなば、夏の日の
あつさも我は忘れむを。

(雨評) 文意はうるはしくきこえたれど、さて何んの情の動かざるををしむ。

〇夢の跡　京都　堤とく子

百花散り失せ、綠葉若う 袖吹く風も暖かき、
さつきの月も半なり。思へば、戀しき去年の今日、
戀しき君に手を取られ、堺住吉其處此處と
行きつ戻りつ濱遊び、何時かは盡きぬ名殘ぞと、
涙の中に打ち乘りし 汽車はつれなや我れのみを、
斯くも隔てて十三里、東の里の人としぬ。
そのほの暗き停車場に、袖をみ顔に打ちあてゝ、
見送りましし姉君が 優し御姿、今も猶ほ
影とはなれず、目の前に 君如何に在すと偲ぶ時、
身は何時しかも夢の中、戀しき君のあり〳〵と。
あな姉君よ姉君と 袖にすがれば、果敢なしや、
夢はもろくも覺め果てゝ、一人淋しき窓の許
さめて悔しき夢の跡、辿るよしなき浪花津の、
思ひは多き橘の數、借ても果敢なき夢路かな。

(雨評) 流暢にはあれど、道行きぶりの文の如くにて、面白からず。

〇秋の賦　越後　よし子

淸けきそらに聳え立つ 峰の梢の紅葉は、
立田のひめの衣かや。霧立ちこむる野の末に、
こがれの垂穗わたりつゝ、田舍の秋は來りけり。

肥えたる馬は嘶きて、　ゆたけく馬子も歌ひつゝ、
こがれの田の面わたりつゝ、　たのしき秋は來りけり。
嗚呼、春の野の花がすみ、　たのしくこゝに遊びしが、
嗚呼、夏の日の木下陰、　むなしく時を過しゝが、
いつしか秋は來りけり。　獨り小川に立ちよれば、
清けき水はさゝやぎぬ、　たゆみし秋を嘲けりて。
吾は知らじと言ひ顔に、　迎へぬ秋は來りけり。

（雨評）　詩想少しく亂れたり。韻もいひまはしも、未だしく。

## 農夫　　大分　佐藤家子

うの花白き山道を、　朝月ふみて、牛引きて、
ひろげをせなに、父と子は　遠き彼方の山畠に、
黍を植ゑんと出で行きぬ。
ひろげはあぜの柳かげ、　わき出づる清水むすびつつ、
煙草のけむりゆるやかに、　父がじまんの獵ばなし、
いつしかやみて、うと〳〵と　やなぎの風に吹かれつつ
しばしたび立つ、華胥の國。

（雨評）　前節と後節との間、はなれ〳〵にてまとまりわるし。

## 六月祓　　神戸　足立ゑい子

うきこと流せ御祓川。　けふぞへだつる夏と秋。
涼しきものときく風を。　明日はうきなき袖にしめむ。

## 初夏　　神戸　足立あさ子

青葉にまじるおそ櫻。　初花よりも珍らかに。
ながめ盡せぬ空にまた。　山時鳥音信るゝ。



## 蚊遣　　紀伊　とく子

ひろ間の暑さを忘れんと、　銀杏の大木の下陰に、
涼風待てる夕まぐれ、　隣家に蚊遣火たきそめぬ。
可愛き孫を安々と　寢させんものと、祖父が今朝
山より取り來しもろんどを　くすべて防禦の代とせり。
さすがの蚊軍の突喊も、　この逆襲に勝ちがたく。
何處ともなく退却し、　露營の夢をや結ぶらん。

# 短歌

## 御歌所寄人 醫學博士 井上通泰先生選

### 甲

閑居友　　肥後　友永常子

ともし火のかべにうつせる我かけの
ほかには友もなきいほりかな

猫　　東京　白井春子

猫の子のなにをおふらん夏草の
繁みが中に鈴の音する

○　　松山　田村多豆子

秋の野の千草百草けふ見れば
庭のはなには限りありけり

# 乙

避暑　東京　原三幸子

鎌倉に夏はくらさむゆきのした
あふきがやつのなさへすゝしき

野暁月　岩代　岸野菊子

にはとりの聲するかたや里ならん
野中のまつのありあけのつき

夫の留守によめる　千葉　中川千鶴子

我がせこがとにいます夜は小笹ふく
風も雨かとおどろかれけり

折にふれて　横須賀　柏原みな子

一葉ちり二葉流るゝ川添の
柳に見ゆる秋の色かな

湖上納涼　下野　井上尙子

のる舟は風と波とにまかせおきて
笛ふきすさむ月のみづうみ

海　大和　栗山たね子

しづかにしよさのうなつら小夜ふけて
つきすみわたるあまのはしだて



夜泉　東京　松本まつ子

岩まもるしみつのおとをきゝながら
ぬるよすゝしきまつの下庵

七夕　播磨　田淵ふじ子

こゝかしこほゝつき取ると騒く子の
聲にくれ行く星合の空

# 丙

夏月　東京　松原みれ子

しろかねの玉かとそ見る山のはを涼しくいでし夏の夜のつき

古戰場薄　岩代　岸野常子

あとゝへば引間の原の夕かぜにいまはたなびくはなすゝき哉

秋扇　神奈川　山本久代子

すてらるゝ覺えなけれど捨てられぬ紙より薄き人のなさけに

折にふれて　東京　原田まつ子

涼しさも忘れにけりな大井川さかまく波のおそろしくして

名所月　岐阜　南みれ子

明石かた磯ふく風の音たえて浪間に浮ぶ月のかげかな

名月　愛知　中村なみ子

惜みても猶あまりあり待つまよりいろかた惜き十五夜の月

ほとゝぎす　長崎　馬場麗子

あはれなりなきわが妹の名をきざむ石工の小屋に啼くほとゝぎす

萩　磐城　木幡きみ子

秋の色もおき餘りてや白露の匂ひこほるゝ里のはき原

圍碁　埼玉　横田政子

大磯によせくる波の數そひて打おと高し白黒の濱

朝顔　東京　中村千代子
朝寝髪とく起き見れば白露の玉をやどせる朝顔のはな

夏夜　肥後　友永章子
うなゐらははし居ながらにねふりけりやぶ蚊おひつゝ月やまたまし

○　韓国　原野みき子
白百合の花かげ見ゆる谷川の水をめでます夏やせの人

初秋虫　東京　神谷てる子
今きてはすゞしくきゝしまつむしも秋としいへはあはれなりけり

秋風　越後　岩本芳子
釣たるゝ翁の袖にしられけりうふすな川の秋の初かせ

河夏月　神奈川　鈴木まつ子
なか〳〵にこゝろもすみですみだ川つきのひかりの涼しかりけり

夏月涼　清国　富成梓子
みるからに涼しき月のみやこにはなつわすれくさ生ひしけるらむ

初秋露　信濃　宮坂たつ子
踏み別けて行くも哀れや一筋の道さへきりて露に伏す萩

夕顔　東京　高野文子
いにしへのあれしまがきを思ひいてゝまたなつかしき夕がほの花

稲花　東京　西村直子
國のなのみづほしられておほみたにさきみちにけり富くさのはな

一軒家を見て　宮城　大槻慶子
ゑにもよし歌ともならんしづかやに煙やすくおくる人やそもたれ

初秋虫　陸前　大初音子
此の夕はた織むしのこゑすなり秋のあはれもこれよりぞしる

初秋露　京都　堀とく子
日盛りは暑き軒端も打そよく葉に置く露に秋は見えつゝ

閑居月　旭川　佐藤央子
軒ちかくたてるすゝきやれらん月より外の友しなければ

夏の夜　栃木　井上瑞枝子
月影のすゞしくてれる夏の夜を舟こぎくたす刀根の川面

○　東京　土田八重子
おもしろや秋の夕は虫の音とまつ吹く風を琴に合して

七夕　兵庫　田淵みき子
機姫の雲の衣をかへすらんさきりも深き天の川浪

虫　和歌山　植木操子
こゝろなく人まつ虫の聲きけはふりすてかたき秋の野邊哉

聞琴　大和　栗山俊子
すゞしくもことしのらへのきこゆなりはま松かせの音にあはせて

夕虫　東京　神田けい子
憂しとかこち悲しと言ひし秋の日も暮れぬと告くる虫のこゑかな

○　伯耆　錦織幸子
晴るゝ夜の月美しく影やとす水もすみゆくこゝちこそすれ

雨後月　弘前　太田ゆき子
みたれおく萩の上葉の白露に涼しくすめる望の夜の月

初秋風　神奈川　奈良八重子
むら竹の葉末にそよとおとつれて浴衣に涼しはつ秋の風

秋の月　東京　秋山かぞゑ子
はきの葉におく白玉そ露ふけて光さやけき秋の夜の月

夕所瀧　神戸　足立あさ子
松を吹く風もましりてなか〳〵に調へしき琴引の瀧

朝顔　神戸　足立ゑい子
咲かへてさかり久しき朝顔は千とせを菊にゆつらさりけり

○　東京　平塚白百合子
藤の花をわけつゝのほる舟白し月のおはしま人おほろにて

蚊遣　東京　吉村まき子
蚊やりたく賤かのきはを吹く風になり〳〵見ゆる月の涼しさ

月下船　埼玉　野中まつ子
夕立のあらひ出したる月かけを波間にのせて下る船かな

○　東京　檜よし子
来はきのみたるゝ小道わけ行けはこほるゝつゆに袖そぬれける

苦熱　　兵庫　中川和子

今日も又たへぬ暑さをうなゐ子らいさゝ小川におよきするかな

初秋風　　東京　牧　君子

何となうたゝ何となう淋しきは秋つけわたる風にそありける

秋のうたの中に　　土佐　秋田廣江子

白菊の清きしつくに墨すりて我思ひ出の歌かきてみむ

窓前竹風　　名古屋　山本しげ子

夕月夜軒端の竹に風見てかけ面白きまどのうちかな

◎入選者に告ぐ　賞金は甲三人に、其順序によりて本社規定の天地人に對するものと同じく、乙は從來の秀逸又は佳調とも見るべきものなり

## 俳句

### 内藤鳴雪先生選

**天**

快き枕ばなれや今朝の秋　　横須賀　柏原みな子

**地**

人の顔提灯で見る夜寒かな　　横須賀　藤原すみ子

**人**

秋の水花なき園をめぐりけり　　神奈川　水村富子

夕顔の花にかくるゝ小猫哉　　常陸　岡田蔓子

千金の庭涼しさや茶一服

稲妻や經誦し窓にひらめきて　　東京　高野みち子

山寺の門たゝかばやむしの聲

閨の灯のまたゝく頃や時鳥　　東京　花柳子

襟を抜き語り合ふこそ涼しけれ

夕月の入るを眺めて朝餉かな　　岐阜　南みれ子

涼しさは踊子揃ふ屋形かな　　金澤　國井芳惑子

短夜や一むら殘る谷の雲　　備后　杉原衣子

短か夜を惜しみに出たり椽の上

螢飛ぶ谷中の墓地の小雨かな　　三重　大西くすよ子

鮓の上涼しきこぼれ松葉かな

明星の影はるかなり秋の海　　横須賀　柏原みな子

夏の月人あり屋根に笛を吹く　　岩代　岸野常子

名月や峠の茶屋に人もなし　　神奈川　山本久代子

葉柳に魚飛ぶ雨の川瀬哉　　兵庫　梶原京子

端居して漁歌を聞く夜の涼しさよ　　神奈川　水村富子

叱られて蚊遣に泣くと中候

雨の月三尺低き廂かな

竹植ゑて我隠家を人知し　　神奈川　高橋つれ子

技川に入りし夜振の一人哉

涼しさや妹がとりたる舟棹　　相撲　渡邊久子

抱籠に薩摩隼人が裸哉

山陰にあると知らしな夏の月　　相撲　小林錦子

雲去りて裸となりぬ夏の山

茂る木に雨を避くれば鳩の鳴く

蚊柱の砕けて散りぬ青嵐　　横須賀　吉岡とし子

坂下る馬の尻尾や青嵐

馬曳いて柿の木月夜戻りけり　　横須賀　藤原すみ子

宵闇や田毎の水に稲妻す

夕霧や灯のつきそめし向河岸

川風の小窓を打ちて秋近し　　横須賀　楠とよ子

瀧に路盡くる處や風薫る

▽注意　本號より投稿規定の通り前々月末日締切とせり

# 女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月十日とし、翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により爾後締切を掲載前々月末日迄とす、兼題和歌の甲乙・短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〲別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。

和歌兼題

十月 遊上雁 女子讀書

十一月 水鳥 看護婦

十二月 落葉 歳暮

定價

| | | |
|---|---|---|
| 一冊 | 前金 | 貳拾錢 |
| 三冊 | 前金 | 五拾七錢 |
| 六冊 | 前金 | 壹圓拾錢 |
| 拾貳冊 | 前金 | 貳圓拾錢 |

全國無遞送料

廣告料

| | | |
|---|---|---|
| 五號活字廿三字詰一行 | | 金三拾錢 |
| 半頁 | 三十二行 | 金八圓 |
| 一頁 | 六十四行 | 金拾貳圓 |
| 表紙一頁 | | 金拾六圓 |

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵劵代用一割増の事)●前金領收證は差出さず本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に郵券二錢御送附あり度し●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認めありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年八月廿八日印刷

明治四十年九月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社 國光社

右代表者 東京市京橋區築地二丁目二十番地 橋本忠次郎

印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 河本龜之助

發行所 株式會社 國光社 (電話新橋二六九三番)(電話新橋特八八番)

東京美術學校長　正木直彦先生序文
同　校教授　島田佳矣
同校卒業生　野口駿尾　兩先生共著

# 女子技藝 編物模樣圖按

全五冊
石版極彩色
大和綴美本

正價
●松の巻　金四拾錢　櫻の巻　▲藤巻各金　五拾錢
●菊の巻　●梅の巻　各金五拾五錢　送料各金四錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて書模樣を編み或は刺繡するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなり
從來此種の書籍歐米各國にて出版されしものなれども其意匠圖案の樣式風味は直ちに之を我が工藝に適應する事能はざるのみならず價格の點に於て不廉にして一般に普及すること能はず●本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を補ひしものなり●編物は貴賤都鄙の別なく本邦女子適當の手藝にして漸次發展しつゝありて將來大に海外輸出の望ありと雖も從來の意匠圖案は幼稚拙劣を免かれず
●本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字等の簡易なるものに始まり橫模樣、連續模樣、角模樣、圓模樣、隅模樣、單獨模樣等の順序を經て漸次高尚優美なる繪畫的下繪に進み花卉、虫、魚、風景、人物を蒐集したり●本書は獨り斯道修學者の好教科書なるのみならず技藝家の好參考書にして亦た麥稈細工織物等各種技藝の參考書たるの價値を有す

明治四十年九月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾七年第九號　第三種郵便物認可




東京築地活版製造所印刷